

新・单冠湾泊地活動記

扶桑畝傍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは

艦隊これくしょんの二次創作です

2022年、突如して始まった深海棲艦の侵攻により

瞬く間に制海権を失う人類は

隣国との行き来すらままならなくなっていった

2025年、『初期艦』と呼ばれる艦娘達の出現により、

近海の制海権を少しずつではあるが、広げて行った

2030年状況がある程度落ち着き、

艦娘達からのかねてからの要望

『提督』の着任が進んでいたが

一部では『そう言う扱いをする場所』が出ていた

その一つ、単冠湾泊地へ新たな提督が着任する

元は『艦隊これくしょん』の提督だった

そう、この世界は

『艦隊これくしょん』が、ゲームとして存在し、

それが現実になってしまった世界の話である。

目次

会合まで？	1
嫁とハイライトが消えた駆逐艦達	7
嫁とお風呂と増えた謎	17
嫁と妖精と家事スキル	22
嫁と裏と提督	28
嫁と朝食・昼食兼用メシ	34
嫁と戦闘と敵	39
嫁と報告と見送る側	44
嫁と火の車と来ちゃった	49
嫁とドラム缶と	54
嫁と艦娘と資材が無い!!	60
嫁と過労死確定とまた増える	67
嫁と登場人物紹介	71
嫁と資材と軽巡洋艦が来ない!!	78
増える嫁とお前かつ!!と資材がないいいいつ!!	83
嫁と空戦と過去	88
嫁と陸路と会合	94
嫁と機体と村雨	99
北上と村雨（むらむら）とエージ	105
嫁と村雨と今度はお前か!!	112
嫁と食豪と雨雲の涙	119
嫁と日常と書類	126
増える艦娘紹介	131
遠征組みと深海棲艦	140

嫁と留守番組みと遠征組み	149
嫁と泊地と現実	158
嫁と娘と艦娘	166
嫁に娘とエージ	172
嫁と娘達と長良型	178
嫁とエージと五十鈴	186
エージと矢矧と護衛艦	192
副業と三笠と艦娘	199
卯月と深海棲艦と嫁	206
嫁不在が起こす大問題	213
誰でも良い、ヤツらを止めろ	218
嫁とエージと・・・	223

会合まで？

かつて

日本は『大日本帝国』と名乗り

世界大戦をしていた

しかし大敗、どん底へ一度落ちた

そこから這い上がり

現在の・・・まあ、結局ダメな所はダメなんだけど

ただ、近年

『深海棲艦』なる『一部人型を模した怪物』が現れ

海上輸送は勿論、空路も潰されていった

現在、連絡できるのは

まさかの『ロシア』『旧・朝鮮半島』『中国』

それ以外は衛星で辛うじて通話が出来る。

ただ、どこも深海棲艦の攻勢により、

疲弊し貧困に喘いでいた

そんな中、『呉』に『艦娘』と名乗る者が現れ

第二次世界大戦を駆け抜けた『艦艇』を名乗り

徐々にではあるが海域を深海棲艦から解放して行った

ある程度落ち着いた今日（こんにち）

新たな『提督』がここ、『単冠湾泊地』に着任する事となった

「うへへ、ホントに来れた。」

いくら近海の制海権を取っていると言っても

護衛艦では

深海棲艦の妙な障壁を突破するのに、

127mm速射砲で10発は当てなければいけない

「ま、完全に無効って訳じゃ無いのが救いだよな。」

誘導兵器はダメだけど、

無誘導兵器もそこそこ効果はあった

「とは言え、装甲を積んでいない護衛艦では、

一発で行動不能に陥りやすいのですがね。」

「現代艦の一番の弱点ですね、

艦長、ここまでありがとうございました。」

「君の構想には驚かされたよ、

「無いなら造ればいい」

おかげで「現代艦使用の駆逐艦」が出来たのだから。」

うん、

艦これを良くご存知の方々は解るだろう？

そして、鋼鉄（くろがね）の咆哮、

これらを組み合わせれば行けるんじゃないかと、

呉鎮守府の『明石』に依頼、

結果、

- ・ 単装127mm両用速射砲3基
 - ・ 3連装Mk53改・酸素魚雷発射管2基
 - ・ 20mmガトリングガン4基
 - ・ ガスタービン機関
 - ・ 7.7mm3連装機関銃座4基
 - ・ 爆雷投下装置
 - ・ アクティブフェーズドアレイレーダー
 - ・ アクティブソナー／パッシブソナー
 - ・ 平均装甲20mm複合素材VP59%
 - ・ 航続距離18ノット／18000海里
- と、スペックを見てもおかしな駆逐艦が出来上がってしまったのだ。

外見は陽炎型に近い容姿だが

艦橋に武骨なアクティブフェーズドアレイレーダー

艦尾には、統率射撃管制照準器

ガスタービンにシフト配置などと説いてはいけない

何よりも

艦娘の『陽炎』と、海上自衛隊から出向の人員で

「動くのだ」

試験航海の時、はぐれ深海棲艦のイ級と

遭遇戦闘を実施

結果、射程外から袋叩きにされたイ級は、ものの数秒で轟沈して行った。

ただ、新造艦艇における『値段』が、

ここで足を引きずりまわす結果になる。

「ただ・・・。」

「ええ。」

「高い。」

お気付きの方は居るだろうか？

そもそもが護衛艦用の装備がどこにあったのだろうか？

大破着底している艦艇から回収なんて無理だし、

アメリカ海軍からイージスを引っ張って来れる訳もない

結果、新造中だった護衛艦から拝借し、組み込んだ。

Mk53魚雷に関しては、

弾頭の部分をスペックダウンし、

53.3cm魚雷発射管を改良し収まったが、

同乗した陽炎曰く

「早すぎて狙うのが難しい。」との事。

「護衛艦、3隻分の値段になるとは

思っても居ませんでした。」

「うん、私もそう思う。」

トン数は陽炎型の約10%増しで、

重い癖に、加減速が護衛艦より良好

艦首にはバルバスバウを搭載してるから、

まあ、最高速度が46.8ノット、公試状態でだ。

全力運転で、49.9ノットを出せる。(乾装備だけど)

装甲部材に関しては、複合で妥協、

鉄、スチール、銅の三層複合だ、

応急修理能力も護衛艦標準で、

艦首がもぎ取られても沈みませんだそうだ。

知つての通り、ここはロシアだ。

単冠湾泊地は、ロシアが管理を任せたと、島民全員避難済みで、廃墟しかない
自国で少量なりとも燃料を確保出来るロシアは、
近海のみ迎撃し、ほぼ引きこもりと化した。

「まあ、なにかな？」

艦娘が乗らないと動かないのも、不思議な物だね。」

陽炎型現代使用試験艦は、

名前を『かげろう』と命名され、

いざ出航しようとして、動かなかった。

艦娘の陽炎が

「まっさかく。」と、冗談半分で、乗船すると、

全てのシステムが起動し、出航出来た。

つまり、艦娘と人員が居ないと、

この『かげろう』は動かなかった。

「つまり・・・この子は私自身って事？」

と、陽炎の嘆きから陽炎の『専用駆逐艦』となり、
日本海の警備任務に今も就いている。

呉の『明石』がもしかかしてと思い、

俺に再度何かしらの艦艇の設計かアイデアを、と

頼まれたので、

ワンワン五月蠅い『時津風』に、

ゲームでやっていた『改・時津風』を提供、

ま、御察しの通り、『時津風』が乗っていないと動かない

船体がフルフラットのフリゲート艦を素体に

主砲は、10cm連装高角砲4基

五連装61cm魚雷発射管2基

20mmガトリングガン（CIWSのレドーム無し）6基

20mm連装機関砲座4基

爆雷投射機／爆雷投下設備

最大速度、42.7ノット、18ノット／8600海里

まさか、ゲーム上のスペックそのまま出来上がるなんて

誰が予想しただろうか？

なお、専用艦になったのは言うまでもない
時津風曰く

「いや、らくちんだけど、

自分で海を走る方が気持ちいいかもね、
ガトリング？だっけ？

アレが一番五月蠅いかな。」

とか、言っていたそうさ。

オマケで言えば、

「せめて隠してくれ。」

「恥じらいをもう少し持って欲しい。」

「誰でも良い、服装を直すように注意してくれ。」

と、乗員たちからクレームが相次いでいる。

操舵輪を受け持つ隊員に懐いており、

隙あらば肩車をして貰っている。

「ば・・・ばかなっ。」

「ぐぎぎ（血涙）、くやしいのう。」

「あの太ももに挟まれたい。」

など、一部危険思考が蔓延しており、

早急な対策が必要と判断されている。

ちなみに、陽炎は

艦長（61歳）に告白まで済ませており、

艦橋で毎日イチャイチャしているそうさ。

普段は髪を両サイドで束ねているが、

当直明けなど、寝ぼけていると、

腰まで掛かる赤茶の髪をなびかせ

艦長と上陸する際は、髪を降ろして一つに纏めている

「あれは、熟年夫婦にしか見えない。」

「陽炎・・・幸せにな。」

「・・・すば」一部血濡れの報告書が紛れていたが、

おおむね陽炎の方は問題はなさそうさ。

「つて、報告書を見せて貰った時、
思わず笑っちゃいましたけどね。」

「ああ、海上自衛隊員としてあるまじき事と
思いつつも、

こんなご時世だ、多少は大目に見えるだろう。」

「陽炎つて、以外とオジ専なんですかね？」

「わからん、ただ、亡くなった親族の方に

関係者が居たとかいなかったとか

そんな噂があるな。」

「・・・そうでしたか。」

「さて、設営機材もあらかた上げ終わったし、

後はキミの運営次第だな。」

「つ、そうですね、やって見ます。」

「たとえば、ゲーム上とは言え、一時期、

大将まで行きながら轟沈ゼロを達成し続けたんだ、

大丈夫、きっと出来る。」

嫁とハイライトが消えた駆逐艦達

って、言われたけどさ？

一人でどうしろと？

そう、この単冠湾泊地に人間は俺だけ。

ゲーム上でうじゃうじゃいるらしい『妖精』は、

未だ発見の報告も無いし、

『見える』事も報告に無い。

「・・・つんだんじゃね？コレ。」

秘書艦？いません。

乗って来た護衛艦はもう遙か彼方の水平線に隠れる

「・・・あの子でも居れば、

俺は何とかなると思うんだけど。」

そう、かつて『艦これ』の提督だった俺は、

晴れて『本物』の提督になったのだ。

しかし、画面でポチポチと違い、

所詮人間一人、

やれる事なんて極僅かしかない

「山雲が居れば俺は良いんだけど、

流石にいきなりは無理だよな・・・。」

勿論、『艦これ』の時にケツコン済

常に秘書艦として第一艦隊旗艦に居て貰った。

「なにが無理なのかしら？」
は？

「この世界では初めまして、

朝潮型駆逐艦6番艦、山雲です。」

・・・山雲だ。

「ちよっ、なんで泣いてるのよ？？」

え？

ああ、嬉しいんだな

「す、すまない、

山雲、提督の扶桑・瑛士だ、

改めて、これからもよろしく頼む。」

「ふふっ、はくい、ア・ナ・タ／＼／」

「へ？」

「ほら？貴方がくれたのでしよう？」

その指に光る指輪は・・・

「やっど・・・アナタに会えた。」

「・・・ああ、俺も、大好きなお前に

やっど会えた・・・山雲。」

▽

「あのう、いちやつくのは後にして貰えませんか？」

「っ!?!」

「あ、どーも、通称、猫吊るしです、

エイジさん、とつとと指示してくれませんか？」

「しやつ、喋れるのかっ?!」

「へは？そりゃあ普通に、

てか、単冠湾泊地の設営で来てるんですから

早く支度して下さい、山雲さんは、

そのボンクラがうるちよろしない様に

しつかり手綱を握って下さいね？」

「はっ、はい！」

▽

荒れ果てた港湾に何人か見える

「あ、やっど来まし・・・嫉ましい。」

「やくねえ、貴女も大概でしょう？」

「・・・大淀。」

「はい、大淀型軽巡洋艦一番艦・大淀です。」

「・・・そのスカート、どうにかならない？」

分かるよね？わからないとは言わせない。

そのきわどいスリットのスカートから見えるのは、

生足・・・な訳で。

「山雲、何か代えの衣装なり、

スリットの入って無いスカートとかないのか？」

「・・・あれ、艤装の一部だから諦めて。」

「・・・マジか。」

「マジよ。」

「変態。」

「わたしの旦那を変態呼ばわりは、

例え『連合艦隊旗艦』でも、容赦しないわよ？」

主砲連撃装備と、

五連装に換装した魚雷発射管を展開する山雲

「・・・そうでしたね、

提督の寵愛を一番に受けてたのは貴女でしたね。」

「それだけ俺は山雲を愛してるからな。」

ぼん

あ、真っ赤になった山雲も可愛い!!

「バカア〜／＼／＼」

胸に顔をうずめて小声でそんな事言われたら

たまらん!! そうだろう!!

だが!! 誰にも譲らん!!

へはあ、

ここは、ちゃんとやっていけるのかしら?<

▽

山雲とイチヤイチヤしながら

工廠妖精さんに最低限の2ドックを依頼し、

設備妖精さんに厩舎の設営、補助設備の建設を依頼、

滑走路はあるが、ボコボコの穴だらけだったので

手隙の妖精さんに修繕を依頼、

各航空機の試運転で使う為だ。

へ・・・イチヤイチヤを除けば、

案外有能なんですネ、貴方は。<

「ん? 山雲が可愛い? 当然だな!」

「モウ／＼／」

〈はあ、

司令部からの指示書では、

当面の近海解放を主軸に、

アリューション列島方面の解放を

優先して欲しいとの事ですが?〉

「・・・資材に余剰は?」

〈ないですね、

遠征しようにも、駆逐艦は山雲さんが一人、

出れませんね、大淀さんも

任務艦娘の任があるので、当面出れません〉

「でもお、今はそれ所じゃ無いんでしょう?」

〈それ所でなくても、

大淀さんは『艀装』が無いんです、

泳ぐぐらいは出来ても浮かべませんので

「やっぱり、ゲーム上のアレか?」

〈ゲーム上の?はよくわかりませんが、

大淀の場合、一隻だけの建造、

最後の連合艦隊旗艦であった事、

遠洋における経験不足もあつて、

艀装は後回しにされているのです〉

「ふむ、確かに遠洋に

経験者を充てるのは筋が通つてるな、

そうすると、家には、

山雲以外の艦娘がいないのか。」

〈・・・いるにはいます〉

「誰かしら?」

〈旧・ソビエト連邦の駆逐艦です〉

「ちよつ、まて?」

激レア艦娘の一人じゃないか?!

なんで家にいるんだっ?!

「アナタ？浮気ハユルサナイワヨ？」

「違う、その艦艇って。」

「タシユケント、普通は特定海域での

保護（ドロップ）しか、確認されていません」

「タシユケント？」

「確か、ヴェルちゃんのお友達よね？」

「まあ、あっちはソ連の純国産駆逐艦だ、

ヴェルは、響だってわかってて言ってるだろ？」

「わかってるわよ、

でもおかしいわね、普通は建造、保護、

それ以外では『初期艦』達だけ、

艦娘の出現条件にどれも当てはまらないわ。」

「・・・会えるか？」

「3番ドックで、うずくまってる筈です、

言葉は通じますが、返事だけで

会話が成り立つかどうか」

「山雲、一緒に来て貰えるか？」

「は、いい、山雲、抜錨します。」

「・・・他にもいるんですけどね、

って、人の話は最後まで聞きなさいよ!!」

▽

「は？へ？」

「ちよ・・・これは。」

「いるわいるわ『海外艦娘の駆逐艦』が

恐らく、ドイツ、イタリア、アメリカ、

って、アレはジャービスなのでは？」

「オール海外駆逐艦艦娘ね。」

「だな。」

「ダレ？」

「・・・此度、ここ単冠湾泊地に着任した、

扶桑・瑛士だ、階級はまだ少佐だけだな。」

「ソ、タシユケントよ。」

「・・・寂しいのか？」

「・・・イイエ。」

「ソビエト連邦が無い事か？」

「・・・ソレもアルワ。」

「・・・ほら、隠してあげるから、ね？」

山雲がタシユケントを優しく抱きしめる

周りの海外艦娘達も

つられて泣き始めた

「・・・辛いよな、

知り合いは勿論、かつての故郷の状況すら

わからないんだからな。」

数分か、数十分なのか、しばらくして

「ゴメンナサイ、

貴方が提督なのね？」

「無理はしなくていい、タシユケント、

辛いのは『生きている証拠』だ、

感情は殺すなよ？」

「オドロいた、そんな事言う人がいるナンテ。」

「悪いけど、

順番に自己紹介を頼めるか？」

流石に海外艦娘までは把握しきれてないからな

「・・・わかった、

北の国産まれの巡洋艦、タシユケントだ、

嚮導駆逐艦として建造されたんだ。」

「よろしく、タシユケント。」

「J型駆逐艦、ジャーヴィスよ、

今は、正直アンラッキーだけどね。」

「ジャーヴィス、よろしく。」

「フレッチャー、姉妹は沢山いたわ。」

「・・・よろしく、フレッチャー。」

「ジョンストンよ、

どうしてこんな所にいるのかわからないけど。」

「それは今後の課題としよう、よろしく。」

「ジョン・C・バトラー級

サミュエル・B・ロバーツ、

サムって呼ばないで。」

「・・・サミュエル、で良いかな？」

「うん。」

「マエストラーレ級駆逐艦、ネームシップです。」

「よろしく。」

「グレカール。」

「・・・そうか、よろしく。」

「リベッチオ、寒いんだけど、何かない？」

「・・・山雲、俺の持ち物から、

防寒着を、それと、〈猫吊るし〉!!

全員に防寒着を!!」

〈・・・はいはい〉

「シロッコ、眠いから起こさないで。」

「待て待て、外で寝たら凍死するから起きてろ、

間も無く施設の仮設が終わるから、

そこでストーブも焚いて貰ってるから。」

「ほんとう？」

「ああ。」

「レーベレヒト・マース、

マックスには手を出さないで。」

「・・・嫁の山雲が居るからな、

助けはするが、手は出さんぞ?。」

「嫁で〜す。」

「マックス・シュルツ、

貴方が提督?・ふうん。」

「おう、よろしく。」

「耐氷型貨物船・宗谷です、
輸送なら手助け出来ますよ?」

「・・・はあっ!？」

あの南極観測船の宗谷っ!？」

「ええ、そうですよ?」

「久しぶりねえ、宗谷。」

「あら、山雲ちゃん、南方以来ですね、

70年?もつと振りかしら?」

「・・・歳は言わないで。」

「山雲、安心しろ、俺がお前の旦那だ!」

「っく、えへへくく／＼／＼」

「あらあら、見せつけくれちゃって、もう、

でも、提督がここに来たと言う事は、

私達に出撃命令を告げに来たのでしょうか?」

あ、全員がビクついた

「如何せん資材が足りない、

辛いだろが近海の掃海と、

遠征における資材を確保したい。」

「でも、全員・・・燃費に問題アリよ?」

それでも遠征を出さないとダメかしら?」

「宗谷さん、燃費云々じゃないんです、

俺は“資材”と言ったんです、

鋼材、ボーキサイト、弾薬、これらも資材です、

燃料に関しては

近場の大湊警備府から手配をかけています、

この単冠湾泊地に赴任するだけでも

かなりの提督候補が嫌がって来ませんでした、

それなりの優遇措置が無ければ

誰も来なかつたんでしよう。」

「貴方は?」

「俺ですか?」

俺は、最初に、燃料は本土から輸送前提、

それ以外の資材は状況に応じて請求、

不足分を遠征にて確保すると、

契約で結びました、

ですが今日はその初日、

最初の輸送船団が来るのは三日後、

つまり、三日間持ちこたえるだけの

必用資材さえあれば、暫くは運営出来ます、

ですが、任務の一つである『建造』に必要な

鋼材、ボーキサイト、弾薬すら足りないのです、

無理を承知で頼みます。」

俺は頭を下げる。

「・・・幾人か、ここ、単冠湾泊地に来ましたが、

頭を下げたのは貴方だけです、

ロシアの方々も一時期は居ました、

けど、私達を運用しなかった、

罵声、怒号、叱咤、虐待も行われてきました、

それでも、

「日本国」を守る為に働けと言うのですか!!」

「・・・いえ、ここを守る為に戦って欲しいのです。」

「ドウイウ、こと?」

「タシユケントさん。」

「タシユケント、

俺は国云々よりも、

お前達を守りたい、その為にいずれ増える艦娘達に、

安心して貰える泊地作りをしたいんだ。」

「絶対嘘だ。」

「サミュエル、俺を信じろとか

そう言う事は言わない、

現に、お前達に防寒着を無償で渡しているぞ?」

「・・・それは、そう、だけど。」

「山雲、

全員を修繕ドックへ案内してくれるな？」

「覗かないでよ〜？」

「・・・俺は執務室に行く、

早速大本営にカチコミの一報を

叩きこんで来る。」

「私だけなら良いのにく。」

「・・・いつか、な、

今はそうじゃない、ケツコンはしたけど、

『(仮)』だ、

本当の結婚指輪を渡せるように、

俺もやれるだけやるから、待っていてくれるな？」

「・・・何人ならいいの？」

「・・・言わなきゃだめか？」

全員（私達は一体何を見せられているのだろう）

「・・・3人、ぐらい。」

「えへへ〜／＼は〜い。」

「とっ、兎に角、まずは全員の修繕が優先だ、

明日、明朝06:30から行動を開始する、

それまでは自由にしてくれ、以上だ。」

嫁とお風呂と増えた謎

「妖精さくん、

お風呂はもう良いのかしら〜?」

〈あ、すいません、猫吊るしさんは今外してて〉

「あら?」

それは後で見かけたらで良いわ、

入渠ドック（温泉かけ流し）は、もう使えますよね?」

〈あ、はい、

元あった施設を最高級の露天風呂付き入渠ドックに
改造済みです!!

美肌!保湿!若返り効果!

打ち身、打撲、擦り傷なんでもござれ!!

極めつけに!!

高速修復材における最高品質!!

疲労回復待った無し!!

最高以外の保障は致しません!!

「あ、そう、それと。」

〈なんででしょうか?〉

「覗いたらコロス。」

〈き、肝に銘じておきます〉

「よろしい。」

〈では、ごゆっくり。〉

（アブねえ、やっぱ西村艦隊の山雲は要注意だな）

▽

「あ、アレ、いいの?」

「見なかった事にしてね〜?」

「ハイ。」

「ねえ?」

「なあに?ジャーヴィスちゃん?」

「貴女「山雲よ?」・・・山雲さん「ちゃんね?」

山雲ちゃんは、あのアドミラルとケツコンしてるの?」

「してるわよ?」

(誰にも譲らないわ)

「どうしてケツコンしたのかなって・・・。」

「どうして・・・ね、

まあ、私は保護(ドロップ)上がりで、

『元・深海棲艦』でもあるのよ。」

「ジョンストン!!距離を取って!!」

「ちよっ、サム!!痛いつてば!!」

「勘違いしないで?」

今はれっきとした艦娘よ?

それに、そうでなければ瑛士とケツコン(カリ)は、

結べない物、それゆえ、私が艦娘であるゆるぎない証拠。」

「けど!!」

「ま、何時かは経験するかもしれないわ。」

「確か、

『艦娘と深海棲艦は表裏一体』って言う仮説ね?」

「流石長女ね、マエストラーレ、

仮説じゃないの、実例が報告されているわ、

『初期艦』と言う存在によってね。」

「ふうん、

『吹雪・叢雲・漣・電・五月雨』彼女達もかつては?」

「所詮うわさだけど、

深海棲艦の『良心』が、艦娘と言う人も居るとか。」

「・・・私は嫌。」

「えっと、グレカーレちゃんね?」

深海棲艦の良心が私達って事かしら?」

「ケツコン。」

「あら?どうして?」

「・・・あいつは人間、

私達は艦娘、『轟沈』さえしなければ、人間より長い生きするわ。」

「・・・わかってるわ、

でも、選んだのはアノ人、そして、

私もそれを受け入れたの、

明るく振舞ってるけど、

辛さ、悲しさ、命令を出さなければいけない立場に

立ち向かってるの、ソレを隠してまで

『私』を選んでくれた、それだけで・・・。」

「それだけで？」

「まだまだ十分じゃないわ、

これからも養って貰わなきゃいけないのよ？

そろそろ揚がりましょう？

なんか静かだと思ったら、

みんなのぼせてるし。」

「ちよっ!?アメリカ組!!何してんのよっ!?!」

「むうく・・・なんかへんく。」

「タシユケントちゃんたら、

・・・意外と大きいモノを持ってたのね。」

「んなトコ見て無いで引き上げるの手伝えよ!!」

「グレカーレちゃん?手伝って下さいでしょ?」

「あゝっ!?もう!?!」

▽

その頃の執務室

「・・・でねえ。」

がちちゃん

ジー・コ、ジー・コ

リダイヤルの裏技を使ってかけ直すが

「・・・ほう、よろしい。」

がちちゃん

(黒電話に出ないって事は・・・)

魔改造スマホでかけ直す

勿論、相手のスマホから

ホラー御用達の着〇〇〇の曲が強制的に流れる優れもの

【いや、怖いからね!!】

お願いだからこつちの番号にかけないでよ!!】

「嫌だね、

『三笠元帥』あんた言ったよな？」

単冠湾泊地を、立ち上げるって。」

【・・・会ったのね?】

「ああ、

初見睨まれたが些細な事だ、山雲が居てくれるからな。」

【・・・え?】

そこの初期艦、電ちゃんの筈だけど・・・】

「いや?」

会って無いし、山雲は俺があげた『指輪』もしていたぞ?」

【ちよつ、ちよつと待ってっ!?!?どう言う事なのよっ!?!】

「どうもこうも、

俺が『艦これの提督時にケツコン（カリ）した』

山雲が、俺の初期艦として彼女達のカウンセリングしてるぞ?」

【・・・大変、

今、元運営に連絡したら

『山雲のデータ』だけ、抜け落ちてるって・・・】

「・・・そっか、

ま、俺の嫁だ、気にするな、

バックアップのデータで、艦これ自体に影響は少ないんだろ?」

【・・・そのようね、

運営発表では、一時的なシステムダウンが原因としているわ】

「ならいいじゃん、

それに、今更『電』を派遣されてもお断りだ。」

【その電ちゃんはどこに行ったのかしら】

「さあな、

しかし、オール海外駆逐艦と、

『宗谷』が居るなんて思っても無かったぞ?」

【な・ん・で・い・る・の・よっ!?】

「しるか、

兎に角、資材が足りないし、生鮮食品、日用品、

風呂場用品も全然足りてない!!俺を殺す気かつ!!」

【そんな・・・ロシア政府は

使える物は残したって言ったのに】

「おまけに『タシケント』が残されていたんだぞ?

おかしくないか?

『タシケント』は、ソ連製だろう?」

【・・・一から調べ直しね、

わかった、その件はこっちで動くから、

貴方は明後日の資材が付くまで何とかして頂戴、

追加の資材も手配するから】

「あと、『呉の明石』に直通回線の設営を頼んでくれ。」

【今度は何造るのよ?】

ただでさえ、横須賀の子達から『専用艦』の

催促がしつこいのよ?】

「俺だって知っている事をフルに使ってるだけだ、

『駆逐艦』は出したから次は、『軽巡洋艦』枠を造らないとな、

ここの『大淀』の艤装が無いつて言われたからな、

『専用艦』造った方が早いだろ?」

【・・・ねえ、

山雲もそうだけど、大淀もなんているの?」

派遣予定の『大淀』は、

『まだここに居るのよっ?』】

「・・・追々調べる、期待すんじゃないやねえぞ?」

【そう、

それじゃ、極力アリューション列島方面解放を主軸にしてよね?】

「・・・わかった。」

嫁と妖精と家事スキル

執務室

「さて、先ずは生鮮食品の確保をしたいと思う。」

さて、0630からなにを言っていると思うのだろうか？

仕方がないのだ、昨日の夜は、

俺のリュックサックに詰め込んでいた

『お気に入りカップ麺』を食べて夜ご飯としたため、

もう朝飯分すら無いのだ

「キミ達艦娘は資材の補給と言う形で餓えは凌げるが、

俺はそうは行かない、

それに、カップ麺の味を覚えた以上、

資材だけでは満足できないだろう？」

カップ麺と言う言葉だけでキラキラする目は完堕ちしたと見る

「幸い、海は直ぐそこだ、

艀装の慣らし運転も含め、艀装を装着、

それと、これだ。」

漁網、それは漁師が使う道具である

「これを？ドウすればいいのだ？」

「これか？」

こうやって袋状になっているから

艦娘二人で牽引して魚を取る、

日本、ロシアの漁協組合と、双方の国も納得している、

よって、単冠湾泊地3海里範囲は、俺達の専用漁場となっている。」

「ちよつと待って？」

私達は言っても『海外の艦娘』なのよ？

領海とか色々国際問題にならないの？」

「サミュエル、良い質問だ、

ま、そこは『単冠湾泊地所属の艦娘』で、

押し通せるし、艦娘に国境なんて付加価値をつけると、

世界中に居るかもしれない艦娘は、

『不法入国・不法滞在』で、今頃は強制送還の嵐だろうな。」

「あく、それもそうね。」

「兎に角、材料が無ければメシにありつけない、

それさえわかかっていればいい、

仮に深海棲艦の妨害にあった場合、

『全力で漁礁』になって貰え、

そうすれば新しい魚も寄り付いて来るだろう。」

「でも、私達は基本『料理』出来ないわよ?」

「・・・マエストラーレ

そこは俺がやる、一応調理師免許も持ってる。」

「は? あんた提督でしょ?」

「提督が料理出来ないなんて何時の時代だ?」

提督になるのにあたって色々免許を取らされたんだ、

重機関係、事務関係、調理関係、家事スキル等々、

あ、その服の洗濯は流石に自分達でやってくれ?

『艦娘』は、戸籍上れっきとした『女性』なんだから。」

「とっ?! 当然でしょっ!!」

洗濯ぐらいでできるからっ!!」

あ、完全に駄目だこりや

「山雲、

ジャーヴィス、サミュエル、マエストラーレ、

グレカール、この4人に洗濯を教えてやってくれ、

洗濯機か、洗濯板では、お前に任せる。」

「センタクイタ?」

「あん?」

俺はお前のままが良いんだ、

それに、下手にデカくなって見ろ? 引く自身がある。」

「バカ／＼／＼」

全員（他所でやってくれ）

「兎に角、艀装のチェックが済み次第、

タシユケント、フレツチャー、ジョンストン、
リベツチオ、レーベレヒト、マックス、

この6人で近海の警戒及び、朝飯確保を頼む、

ま、偶に資材が紛れ込むらしい、期待はするなよ？」

「ふうん、わかつたわ、朝ごはん、期待してる。」

「ちよ、マックス!？」

「ふふ、いいわね。」

「もう、私がいるでしょ？フレツチャー。」

「ワカツタ、一応旗艦は私デイイのか？」

「別に良いんじゃない？私この辺り全然知らないから。」

「では、作戦開始！」

▽

「じゃあ、洗濯板での洗い方教えるわね。」

「え？洗濯板？洗濯機じゃないの？」

「だって、『電気』が来てないのに、

どうやって洗濯機を動かすつもり？」

「それは・・・。」

「私達の艀装で発電しちやダメなの？」

「あのねえ？燃料もタダじゃないの、

それに補給物資が来るのは明日の午後、

節約しなきゃ飢え死にするわ？」

「アンラツキーだわ。」

「でも、お水は？冷たくて手がかじかんじやうわ。」

「そーだそーだ。」

「は？」

4人「は？」

「温室育ちの艦娘に、洗濯すら早かったのかしら？」

「ちよっと、山雲さん？」

「マエストラーレ、

確かに貴女達は温暖な気候で過ごしてたんでしようが、

ここは、単冠湾泊地、北の海よ？」

温泉かけ流しのお風呂があるだけありがたい事なのよ？

『戦後の日本』でも、

温水がふんだんに使えるようになるには、何十年もかかったわ、私はアノ人、瑛士に『頼まれたから』教えるの、

そうでなければ、貴女達の下着は

瑛士が洗う事になったでしょうね。」

「そ、それは嫌ですわ。」

「うゝ・・・。」

「確かに嫌ね。」

「わかったよ、やるよ。」

▽

「ふむ、艤装の状態はいいな。」

〈当然です、

最高の状態に仕上げてますよ！〉

「へゝ、寒冷地装備って案外あったかいのね。」

〈お嬢の寒さ嫌いは解ってるつもりですよ？〉

「お姉、大丈夫？」

「なあに？ ジョンストン！」

「あんなに喜んじゃって、

マックス、そっちは平気？」

「レーベレヒト、別に大丈夫、

タシケント、そろそろ漁網を降ろすポイント。」

「そんな・・・お姉ちゃん呼びしてくれないっ!？」

「アハハ、

そうね、マックスで良いかしら？

そっちの端をお願い出来る？」

「いいわ。」

「ちよっ!?! マックスっ!?!」

〈漁網牽引開始します〉

▽

執務室

「さて、三笠元帥、昨日の今日だけ。」

「お、ね、か、い、た、か、ら、あの曲やめてよくお。」
「やだ、」

「だったら素直に黒電話に出ろよ、」

「やっぱり『電』の痕跡はない、」

「ただ、資材の減り方から、」

「山雲は『自力』で建造し、『艦これ』から出て来たんだろう。」

「・・・そうすると、大淀は？」

「まだ寝てるんだ、」

「下手に入室なんで、俺を社会的に殺す気か？」

「寝る？」

「艦娘に睡眠は左程必要としない筈・・・」

「聞いた限りじゃな、なあ？『猫吊るし』」

「そうですね、ですが『山雲・大淀』に関しては」

「イレギュラーとしか、我々の答えに出来ません」

「猫吊るしちゃんでもわからないか、」

「それと、こつちも直ぐに打電が来たのよ」

「タシユケントか。」

「ええ、」

「彼女は『娼艦娘』好きにしてくれて構わないと」

「・・・あえてロシア沿岸に深海棲艦を追いやるのもアリか。」

「ソレに関しては同意します」

「やらないですよ？」

「後が大変なんだから、それともう一つ」

「ん？」

「・・・複数の艦娘データの欠落が確認されたの」

「ほとんどが、」

「『貴方の指揮下にあった艦娘達』よ」

「・・・つまり、建造をかければ。」

「十中八九、彼女達が建造されるわね。」

「勘弁して頂戴、」

三笠？貴女だってイレギュラーだけど、これ以上抱え込ませないで頂戴？

建造妖精達が増長して、

『我々の建造技術は世界一』なんて、言い出しかねないわ〈
【ごめんなさい、

確かに私も艦娘だけど、艤装は無い、

なんせ、『本体』は横須賀の公園にあるのだから。」

「まあ、いいや、兎に角追加の資材の手配を確実に頼むよ、

『明石』の着任はまだ無理そうか？」

【そうね、『呉の明石』は来たがってたけど、簡単に配置転換は出来ないし、

『呉の明石』だから出来る事の方が多いのよ】

「ついでに言えば、

『宗谷』は自由奔放だな、

さつきは執務室居たと思ったら

今度は護岸で釣りしてるし、呼んでも来ないし、気づいたら執務室に戻ってたりと。」

【・・・今度、そっちに視察に行くわ、

予定を組みなおすから・・・一週間でめどに】

「わかった掃除ぐらいはしておくよ。」

【ひ〇こ饅頭で良いかしら？】

へいえ、老舗の金平糖で〈

「後、林檎だな。」

【林檎？貴方も変わってるのね】

「お前もな。」

「で、聞き耳立てて何してんだ宗谷？」

「いえ、お菓子の声が聞こえたので。」

「・・・喰えないヤツだな、お前。」

「いえいえ、提督さんほどでは。」

（こわ、この二人なんなの？）

嫁と裏と提督

執務室

「さて、タシユケント？」

「聞こえてるか？」

☒アア、感度良好、ちゃんと聞こえてる☒

「よかった、漁は順調か？」

☒既に一回目でかなりの量が獲れたぞ？☒

「一回で良いんだけど、まあいいか、

資材は紛れていたか？」

☒・・・ああ、オドロイタよ、

ドラム缶がなぜか紛れていてな、

中には、『鋼材、ボーキサイト、弾薬』各種30程度がな☒

「ほう、どうやらそこは漁礁でありつつ、

資材溜まりかもしれない、

ラッキーだな、ちゃんと座標の記録を取って置いてくれ。」

☒了解した、

マックス、座標の登録を頼む☒

☒わかったわ☒

☒ちよつと！マックス！

どうしてお姉ちゃんって呼んでくれないのっ?!☒

「・・・フレツチャー、姉として姉妹のジョンストンの状態はどうだ？」

☒最高ですわ!!☒

(うるさっ!?)

☒この洗練されたボディ!!なびく美しい髪!!

誰もが一目見たら惚れるのも無理ないですわ!!☒

「あく、そうか、艤装の不調とかを聞きたかったんだが。」

☒お姉!ちよつと変わって頂戴!

ごめん、お姉呼びしたら、こうなっちゃって、

艤装に関しては快調も快調!

今までの不具合が嘘のように無いわ!☒

「よかったよ、帰ってきたら艦装妖精達に報告書を頼めるか？」

☒「なんで？」☒

「一人一人の癖に合わせて艦装の調整をするからな、
利き腕ぐらいわかるだろ？」

艦装の摩耗頻度からある程度は調整が効くんだ。」

☒「へへ……あんたの事、少し見直したかも。」☒

「……リベッチオ、タシケントの具合はどうだ？」

どこかしきりに気にしていたりしてないか？」

☒「なんで私に聞くのよ？」☒

「いいから。」

☒「……お腹を押さえてるね、

あと、顔、化粧か何かで顔色をごまかしてる☒

「……漁を中断して良い、

リベッチオ、帰還の指揮を執ってくれ、

タシケント、旗艦を移譲、リベッチオに。」

☒「……え？あ、ああ、ワカタ、リベッチオに移譲スル☒

「タシケント、辛いならちゃんと言ってくれ、帰還しろ。」

☒「……わかった☒

☒「ねえ？」☒

「リベッチオ、帰ってからだ、

全員につぐ、タシケントを護衛、即時帰還せよ。」

▽

執務室

「山雲、タシケントを身体検査してくれ

俺じゃ不味い案件だ。」

「呼び出して、内容が身体検査？」

「……口頭は不味い、これを見て検査してくれるな？」

「っ!?ドウイウ事!!」

「言うな!!」

恐らく誰にも言っていないんだろう、

艦娘同士の方が抵抗は少ないと踏んでだ、頼む。」

「・・・気づいた？」

「ああ、お前が自力で建造しここに來たって仮説は
確証になった、別に咎めないし、嬉しかった、
そこまで俺を思ってくれてたんだなって。」

「多分だけど・・・。」

「ああ、大淀もそうだ、

それと、かつての仲間達が、建造待ちしてるようだな、
一般常識だけじゃない、

専門分野すら叩き込んでから來たんだろ？

なら後は経験だ、頼りにしてるよ？俺の奥さん。」

「／／／わかったわよ、

でも、早めにね？じゃないと我慢しきれなくて
襲っちゃうかも。」がお！

「・・・出來たら引退するんだぞ？

それに『娘』に引き継ぐ事になるんだぞ？」

「・・・そうね、まだ、先ね。」

▽

執務室

勢いよく扉が開く

「大変よ!!タシユケントがっ!!?タシユケントがっ!!」

「山雲、頼んだ。」

「はい。」

「なんでアンタは行かないのよ!!」

「リベツチオ、

悪いが報告書を作ってくれ、それと、

今居る全員にこれを読んで頭の片隅に入れといてくれ。」

「なんでよっ!!タシユケントが大変なのに、

報告なんてあとでしょ!!」

「・・・リベツチオ、

お前は何時ここに來たんだ？」

「今、その話をしてる場合じゃないの!!」

「言え、コレは命令だ。」

(なっ!?)

「・・・タシケントの、次よ。」

「それ以降、タシケントがふらりと居なくなったりしてないか？」

「・・・してた、でも、それとこの事と関係なんてあるの？」

「全員が揃っても、それは続いてたんだな？」

「だからっ!!」

「・・・続いてたんだな？」

「そうやって追い詰めても話しませんよ？」

「宗谷、お前、知っていたな？」

「さあ、なんの事でしよう？」

「タシケントがそう言う事を、一人で受けていた事だ。」

「な・・・なんの話よ？宗谷？」

「・・・気づいた、が、正解ね、

一度、私の前で倒れてるから、それでね。」

「ちよ・・・宗谷？なんで教えてくれなかったのっ!？」

「恐らくタシケントから止められたんだろ？」

「そうですね、

でも、そう判断したのは私、

せめて、他の子にそう言う行為をさせない為に。」

「そんな・・・。」

「宗谷、お前は謹慎処分とする、

リベツチオ、他の全員を集め、

『大淀』に講義を受けさせて貰え。」

っ!?

「大淀、怒りの矛先は俺が受ける、

この子達に一般常識を講義するように。」

「了解しました。」

「答えになって無い!!」

「リベ。」

「略称なんて許してない!!」

「・・・済まなかった、俺の落ち度だ。」
優しく抱きしめる

「だって・・・あんな、血だらけで・・・。」
「大丈夫だ、最高の奥さんが治してくれるから、安心しろ。」
「ほんと?」

「ああ、『艦これ』の世界から抜け出してまで
俺の所に来てくれた最高の奥さんだ、
タシユケントは大丈夫だ。」

「へ?『艦これ』の世界ってなに?」

「・・・大淀、この事も説明するように。」

「・・・はい。」

▽

独房

「さて、宗谷、

お前は『なにを知っている?』」

「さあ?」

「話して貰うわよ?宗谷。」

「ちっ、三笠。」

「早かったな。」

「非公式よ、私はまだ横須賀に居る事になってるの。」

「そう、そっくりさんに話す事はないわ。」

「いいえ、話して、

同じ、大戦を生き延びた生き残りとして。」

「いやよ、

それに話した所で艦娘の」

頬を伝う血はそれを現実と認識させるのに十分だった

「な・・・なんで?」

「ああ、言っただけだったな、俺の事。」

「・・・まさか。」

「ええ、私の親族よ、だから『艦娘に攻撃できる』」

「三笠ああっ!!あんたはどうしてタブーを簡単につ!!」

「親族って言っても、

大戦時の搭乗員の親族よ、かなり離れてるけどね。」

「そう言う事だ、提督の資質は

『第二次世界大戦の生き残りの子孫』に色濃く出るんだ、

宗谷、お前は呉に行つて貰う。」

「なぜ。」

「やっぱりそうするしかないの?」

「なんだ? 洗いざらい吐かせるなら

『呉の明石』の方がいいだろ?」

「それは、そうだけど、『性癖』まで変わるって、

どう言う事か……。」

「ちよつと待つて?」

『性癖』が変わつてなに? なにを言ってるの?」

「おや、まだお話し中でしたか?」

「おお! 明石! そうか、三笠を連れて来れるのは、

恐らくと思つてたが、来てたのか!」

「はい! あやや、瑛士さん? この子が例の『宗谷』ちゃん?」

「ああ、

しつかり『メンテナンス』してあげてくれ。」

「はい! しつかりメンテナンスしますね!」

「い、いやよ、

手!! その手はなに?! ワキワキしないでよっ!?

ちよっ!?! たっ、助けてよっ!?!」ア／＼／／

(関わらないのが一番ね、

巻き込まれたら……私が私で無くなりかねないから)

「ふむ、

只の全バラメンテナンスだつてのに、

なんで嫌がるんだか?」

「それは……乙女の事情よ。」

「そか。」

嫁と朝食・昼食兼用メシ

執務室

「はて？」

色々あり過ぎてなんか忘れてるような。」

「はい、報告書。」

「リベツチオ、

おま、日本語書けるのか？しかも漢字も。」

「え？うん、なんか知らないけど出来た。」

「助かる、てつきりイタリア語圏内の文字で来ると思ってたから。」

「ん、そもそもが無理かも。」

「ん？」

「だって、ロシア語は解んなかったし、

ここ以外外に出ないから、辛うじて日本語で話してたぐらいだし。」

「あゝ・・・濟まない、

一応、日・伊辞典があるけど、取り寄せとく？」

「・・・そうね、いつか使うかも。」

「わかった、次の補給物資に入れて置く。」

ぐく

「あ、そうか!!俺達、まだ朝飯食ってねえっ!!」

「・・・そうだ!!積んだままのお魚が腐っちゃうっ!!」

「急ぐぞ!!」

「了解!」

▽

あれ？

なんで暖簾がかかっているんだ？ここはまだ施設して機能して無い

筈

「なあ、リベツチオ？」

「なに？」

「ここ、機能してたか？」

「・・・してなかった、はず。」

唐突に扉が開く

「提督、お待たせしました、給糧艦『間宮』着任致しました、既に新鮮な魚介類は冷凍庫の中ですのでご安心を。」

「間宮っ!?ま、まさか……。」

「……すいません、我慢できずに妖精達に依頼しまして建造して貰いました、

こちらがその資材消費報告書、です。」

鋼材 2000↓270

ボーキサイト 2000↓346

弾薬 2000↓1689

燃料 2000↓241

「ひいひいっ!?家計が火の車にいいっ!?」

「ちよっ!?さっき拾った資材の何倍も消費してるじゃないっ!!」

「ごめんなさい!ごめんなさい!!」

「ちよっと?騒がしいけどどうしたの?」

「ああ、可愛いわあジョンストン!最高に可愛いわあ!」

「ねー!マックス!!なんでお姉ちゃんって

呼んでくれないのよっ!!」

「タシケント?大丈夫?無理しちゃダメだからね?」

「アリガト、マックス、

痛みは大分引いたから、ね。」

「はく、疲れた、あれ?リベ?なにやってんの?」

「ぐーちゃん、マエストラーレ、

これ、やばいよお……。」

資材表を見せる

「うわ、アンラッキーに乗せだわ……不幸よ。」

「フレッチャーが使うには多いし、

ジョンストンでもないし……

言っとくけど私じゃ無いからねっ!!」

「ア・ナ・タ?」

「間宮だ、これからよろしくたのむ。」

「山雲ちゃん、ごめんなさいっ!!」

▽

「まあ、ギリギリ遠征一回分ってトコか、うん、美味しい。」

「あの、提督の『煮つけ料理』の方が美味しいのですが?」

「そうか? 駆逐艦の口に合わせた甘めの煮付けも美味しい、焼き鮭の塩加減も絶妙だぞ?」

「あう／＼／／」

「でも、来るならちゃんと一報が欲しいわね。」

「そう言いながら、貴女行動力に、みんな感銘を受けたのよ? みんなが行くなら、私もってだから、ね?」

「つまり?」

「はい、資材に少しでも余裕が産まれれば

『自力建造』で、来ちゃいます、

本当にごめんなさいっ!!」

「はあ・・・山雲、この周辺海図を。」

「はくい。」

「家、つまりここが単冠湾泊地だ、

ここから北西2海里、この地点だ、ここは先の

鋼材・ボーキサイト・弾薬が各30確保出来る小規模の資材溜まりだ、

燃費の良い駆逐艦達で何往復でもと行きたいが、

家には無理がある、燃料が残っていない。」

「そうね、近海の解放もそうだけど、

最重要は燃料、でも北西には深海棲艦の

北方艦隊が控えてるわ、下手に戦闘しようものなら

即、オケラね、渦潮も観測されてるから、

そのまま帰還不能に陥る。」

「そこでだ、大湊警備府まで範囲を広げると・・・。」

「そうですね、私の記憶違いでなければ・・・。」

単冠湾泊地より南東4海里付近を指さす

「間宮の言う通りだ、そこには

『燃料』の資材溜まりがあつた筈なんだ。」

「でも、そこって。」

「ああ、深海棲艦・太平洋艦隊の活動範囲、

従つて奴らもそこを使っている筈だ、

戦闘は避けられないだろう。」

「じゃあ、その『大湊警備府』にお使いはどのような?」

「そうしたい、だが、航路を把握してるのは誰かいるか?」

手をあげるのは『山雲』と『間宮』だけ

「そうだ、誰も知らないし、抜け道もわからないだろう、

ジャーヴィスが言うのは航路・抜け道を知っている事が条件だ、

したがって、動けるのは

『山雲』『フレッチャー』『ジョンストン』

『サミュエル』『ジャーヴィス』『リベッチオ』

『マエストラーレ』『グレカーレ』となる。」

「アトミラル、やつぱり?」

「すまない、レーベレヒト、マックスは留守番と、

もう一度、北西の資材溜まりに行つて貰いたい。」

「私も。」

「タシユケント、ダメだ、

お前さんはまず、自分の身体を治せ、

山雲の治療は的確だが、戦闘中に何か起きてからでは、

『轟沈』しか待つていない、頼む、大人しくしてくれないか?」

「やだ。」

ん?.

「わたしも、役に立ちたい。」

化粧を落としたからよりわかる

『土気色の顔』だ、こんなんじゃ死に行く様なものだ

どうすれば大人しくしてくれるのやら

〈急報!!近海にて発砲炎を確認!!〉

「なにつ!?

タシユケントを除く総員は第一種戦闘配置!!
緊急出航準備!!」

〈続報、深海棲艦と艦娘の撃ちあいを確認!!〉

嫁と戦闘と敵

出撃用港湾区

「編成を発表する、

第一艦隊

『山雲』『フレッチャー』『ジョンストン』

『サミュエル』『ジャーヴィス』

第二艦隊

『リベッチオ』『マエストラーレ』『グレカーレ』

『マックス』『レーベレヒト』だ、

タシユケントは、艀装装着後、

港湾に待機、対空警戒に当たれ。」

「っ!?やれると思うの?」

「言いたい事は解る、だが四の五の言ってられん、

タシユケント、燃料もあるが、

港湾から対空迎撃、ここを護つてくれるな?」

「やらせて、大丈夫、沈まない。」

「・・・よし、第一艦隊、第二艦隊、抜錨!!

戦闘中の艦娘艦隊を援護し、単冠湾泊地へ誘導、

深海棲艦共に我ら単冠湾泊地はここにありと、

見せつけて来い!!」

全員『はい!!』

▽

執務室

「さて、どこの艦娘なのかね。」

視界の端で何かがビクビクしているが、

見なかつた事にして

「山雲、状況は?」

☒間も無く目視圏内☒

「了解、最大射程で牽制射撃、

それと同時に敵数の確認だ。」

☒全艦、マルチ隊形、主砲連撃よーい☒
「撃て。」

☒てーっ!!☒

▽

「つたく、なんでこんな所に!!」

「満潮、魚雷!!」

「わかってるわよ!!」

艀装が軋む

「峯雲避けてっ!!」

「しまっ!!」

(ダメ、避けられない!!)

「はあああっ!!」

「ぐっ!!」

(誰っ!?私を担いで避けるなんてっ!?)

「あ・・・貴女はっ!？」

「こちら単冠湾泊地第一艦隊、『山雲』よ、

久しぶりね、満潮姉さん、峯雲、朝雲。」

「山雲っ!?それに、単冠湾泊地って!？」

「話はあと、

みんな、単縦陣、引っ掻き回すわ!!」

「フレッチャー、了解。」

「ジョンストン、追従するわ。」

「ジャーヴィス、遅れないで！」

「サム!!アンタが遅いのよ!!」

「なっ・・・海外の艦娘なんだにや。」

「こちら第二艦隊、旗艦リベツチオ、

貴女達はどこの所属?損傷艦はいるの?

的確に情報を頂戴。」

「っ、すまないにや、

大湊警備府、第四艦隊、旗艦・軽巡洋艦『多摩』だにや、
タンカー護衛の帰りにこのざまにや、

私が中破、他の子は小破にや。」

「了解、私達の誘導に従って単冠湾泊地へ向かいます。」

「え、えらくしつかりしてるにや、

えつと、リベツチ才だったかにや?」

「はい、

別に、駆逐艦がしつかりしちやいけない理由は無い筈ですが?」

「お、おう、誘導感謝するにや。」

(おかしいにや、もつとはちやけキャラだと噂では聞いたけど、

全然違うにや、それも、歴戦を生き延びた風格さえ漂わせるなんて)

「第一艦隊へ、合流完了、護衛を開始します。」

☒了解、敵、深海棲艦は『二級駆逐艦』4、

『へ級軽巡洋艦』を一隻確認、遅滞戦闘中☒

「了解、分派の必要性は?」

☒無し、駆逐艦2隻撃沈、更に戦闘続行

単冠湾泊地へ早急に向かわれたし☒

「了解、

多摩さん、全速力は出せますか?」

「ソレは無理にや、

半速なら大丈夫にや、

他の子も上構物の小破だから全速は可能な筈にや。」

(つて言うか、

この会話中に『二級駆逐艦』を二隻撃沈しただって?

どれだけ練度が高いんだにや?)

「わかりました、

マエストラーレとグレカーレで牽引します、

そうすれば少しは早く着けます、

二人共、牽引準備、急いで。」

「はい!!」

(なんかりべが凄い事になってる!?)

▽

「フレツチャー、ジョンストン、魚雷戦用意、目標、軽巡洋艦。」

「山雲!! 私達の魚雷はっ!!」

「そうよ!! たまに変な方向に行くのよ!?!」

「いいから、牽制になるの、回避を鈍らせるには最適なのよ、
はい、今撃ってー!」

「ああ、もう!! 知らないからね (わよ) !!」

(流石姉妹、息が合ってる)

「サミュエル!! ジャーヴィス!! 残りの駆逐艦に魚雷発射!!」

「お願い、真つすぐ進んでっ!!」

「アンラッキージャーヴィスだけど、

これに関してはラッキーショットね!!」

「積めは、ワタシがシメルわ。」

4人 (怖っ!?)

▽

単冠湾泊地・港湾

「ふう・・・。」

(本当は海にでて、一緒に戦いたい)

「駄目だ。」

「ちよっ?!? 防空壕に避難しなさいよ!!」

「意地でも海に出ようとする体調不良の女の子を

引き留める役目もあるからな、無理な相談だ。」

「・・・行かないわよ。」

(もう、万全だったら、セクハラで引っ叩いてやるのに)

「・・・選べるんだぞ? 普通の生活も。」

「・・・いやよ。」

「みんながいるから、か?」

「勿論、ソレもアルワ。」

「ま、人間は信用出来ないよな?」

「そうね、アンナ奴らなんて、『滅んでしまえばいいのに』」

「そうだな、滅んだほうがいつそ清々しいな。」

「・・・アナタ、変よ。」

「そうだな、人間だけどな。」

「こうやって山雲を墜としたの?」

「ないない、

それに、画面越しで指輪だけ渡したんだ、

本当は愛想付かされてもおかしく無かった。」

「でも、彼女はここに来た。」

「ああ、それこそ時空を超えてな。」

「はあ、私にもそう言うコトがあればヨカッタのに。」

「講義で受けたと思うがじゅ「ばか」おい。」

「山雲を一人にする気?」

「しない、この命にかけて。」

「そ、でも、重婚なんてなに考えてんの?」

「責任かねえ。」

「そう、汚れたワタシなんて、貰っても嬉しくないデシヨ?」

「こんな美人を貰えるなら幸せ者だな。」

「・・・ばか、本当に貴方は、ばかよ。」

「さいですか。」

「考えさせて・・・それに、練度も足りないでしょ?」

「よく御分かりで。」

「・・・チョットダケ、目、つぶって。」

「はいよ。」

「『アタシ』なりのお礼、それと、予約かしら?」

「予約されました、

さて、電探の電源入れ忘れは勘弁だからな?

対空警戒を厳にしてくれ。」

「ちよっ!?

なんでソレを知ってるのよっ!?!」

「ケツコンしたら教えたげる。」

「もくっ!!」

嫁と報告と見送る側

執務室

「大湊警備府、第四艦隊、旗艦、軽巡洋艦『多摩』、
此度の救援感謝するにや。」

「単冠湾泊地、提督の扶桑・瑛士だ、

固くならなくていい、損傷の修理は出来るが、

生憎、燃料不足でね、大湊警備府までは出せない、

明日の午後、その大湊警備府から物資輸送船団が来る、

それに便乗して帰還して貰いたい。」

「感謝するにや、連絡も?。」

「してある、何やらオマケもつけて輸送船団を送るとか言ってたが、
なにが来るのやら、

『多摩』以下、『満潮』『峯雲』『朝雲』は、

単冠湾泊地にて休養後、明日の輸送船団にて便乗、帰還してくれ、
それまでは自由行動とする、以上だ。」

「了解にや。」

「了解。」

「わかりました。」

「わかったわ。」

▽

間宮食堂

「はい、お待たせ、特性間宮お汁粉よ?。」

「いつ?! いいんですかっ?!」

「朝雲ちゃん、みんなが無事のお祝いも兼ねてるのよ?。」

「ちゃんと食べてね?。」

「いただきます!!」

「おいし、間宮さん! 美味しいです!」

「峯雲ちゃん、ありがとうね。」

「あの・・・。」

「なあに? 満潮ちゃん?」

オカワリアリマスカ？

「はあい、今持って来るわね。」

「しかし、単冠湾泊地、か。」

「多摩、久しぶり、さつきはごめんなさいね？」

「山雲、久しぶりにや、

大戦時はすれ違いばかりだったけど、

こうして話せるのは本当に良かったにや。」

「貴女は建造から？」

「そうにや、大湊警備府じゃ最古参だにや、

練度もかなり上がった筈だったけど、

流石に任務後に襲撃されると後手に回るにや。」

「貴女には、私はどう見えるのかしら？」

「・・・場所を変えるにや、

3人共、ちよつと山雲を借りるにや。」

「え？あ、はい、わかりました。」

(多摩さん？)

「山雲、また後でね。」

「峯雲・・・コノ胸雲。」

「ちよつ!!?山雲姉さん!!」

「確かに、大きいのよね同じ姉妹なのに。」

「朝雲っ!？」

「ソウネ、ワタシナンカ・・・。」

「満潮姉までっ!？」

▽

工廠裏

「ここなら大丈夫かにや？」

「ええ。」

「貴様、何者だ？」

「そうね、朝潮型「そうじゃない」あら。」

「本当に山雲なのか？」

「そうね、そうであってそうでないかもしれないわ。」

「答えになっていないぞ。」

「多摩、貴女は知ってるかしら？『艦これ』を。」

「・・・元はゲームとか言ったな、

それがなにか？」

「私はそこから生まれて来たの。」

「っ、そうまでしてアノ提督に付きたかったのか？」

「ええ。」

「艦長達が泣くぞ？」

「それがねえ、後押ししてくれたのが、艦長達なのよ。」

「・・・はあ、聞かなかった事にするよ。」

「懸命ね。」

「呆れただけだ、私は『第二次世界大戦』の方が濃い、

例え場所が違えど状況が違えど、

『大日本帝国国民』を護る為に動いている。」

「確かに今の『日本国』を動かしているのは子孫たちよ、

でも、それを護る義理立ては必要無いんじゃない？」

「無い、だがな？・・・いや、いい。」

「会ったのね？かつての乗員達に。」

「会ってしまったが正解だ、

偶々、警備府の外に買い物に出た時に、な。」

「話せた？」

「最初は、泣いてしまったよ、往來関係なくな。」

「生きているのだから喜ぶべきね。」

「それと同時に辛かった。」

「そうね、老いるのは人間の宿命、

整備さえしつかりしていれば、『老いない艦娘』

その感情は大事よ？」

「だからこそ、護る為に思いを新たにしたらんだ。」

「そう、その人に孫は居るのかしら？」

「・・・居たが、既に亡くなっていたよ、事故だそうだ。」

「ごめんなさい。」

「その奥方もつい先月亡くなったそうだが、

私は・・・引退も考えたんだ。」

「でも、出来なかった？」

「いや、

『老いは当たり前前だ、ならお前さんは、

ワシらを護る為に生きてくれ』とな、それと、

『幸先短いおいぼれより、お前の子が見たい』なんて言われた。」

「ぶふっ!？」

「正直、一般教養が私自身に身について居たから良かったが、

知らなかったら、相当不味かったと内心安堵したよ。」

「へ、プクク、返事はしたの？ウフフ。」

「・・・今の提督と出来てはいる、と言った。」

「あらあ。」

「・・・ただな、アイツに見せられなかった。」

「・・・。」

「老衰だった、休暇の時、顔だしついでに家に寄ったんだ。」

「顔はどうだったの？」

「あのやろう・・・満足した顔でなあ・・・」

写真を抱えて・・・くそ・・・涙なんて・・・。」

「私にもその辛さ、分けて頂戴？」

「いやだ・・・これは私だけの物だ・・・。」

「そう、なら、隠してあげるわ。」

「・・・うああああっ!?!わあああんっ!?!」

「ほんと、艦娘なつてから、

『見送る側になるなんてね』・・・つらいわ。」

▽

翌日、午後

単冠湾泊地・港湾

「多摩ちゃんっ!?!どうしたのっ!?!」

「ちゃん言うなっ!!」

真っ赤に晴れた目元はそりゃあそう言うよ

「ちよつといいかしら？大湊警備府の提督さん？」

「キミは、山雲かい？どうして多摩ちゃんがこうなってるか
教えて貰えるかい？」

コシヨコシヨ

「・・・多摩ちゃん。」

「だから、ちゃんはやめっ!？」

「おう、熱い熱い。」

「バアカア／＼／恥ずかしいだろう!!」

「大変ねえ。」

「火に油どころか、テルミットぶち込みやがって。」

「あら？テルミット単体じゃ発火しないのよ？」

「うっせ、

満潮、朝雲、峯雲、その二人をとつと持って帰ってくれ。」

提督、アトデオハナシね。」

「ほんとよ、乙女達の前で随分ハレンチね。」

「ほえ。」

嫁と火の車と来ちやつた

執務室

「資材が回復した側からこれかいつ!!」

鋼材 32↓5857

ボーキサイト 41↓8769

弾薬 12↓7896

燃料 0 ↓10000

←

鋼材 5857↓1761

ボーキサイト 8769↓121

弾薬 7896↓589

燃料 10000↓371

「さあ、洗いざらい吐いて貰おうか? 『明石』!!」

「あははく・・・ごめんちやい。」

わかるよね?

先の『資材に余裕が出来たら来る』と

「ごめんなさい。」

「面目次第もございませぬ。」

『明石』『蒼龍』『霧島』が来てしまったのだ

これを受け『呉の明石』が悔しがっていた

「来ちまったもんはしようがないが、

家には軽巡が居ないんだぞ?

達成できる任務が『駆逐艦』限定に限られるじゃ無いか!!」

在籍艦娘

戦艦 『霧島』

正規空母 『蒼龍』

工作艦 『明石』

駆逐艦 『山雲』『フレッチャー』『ジョンストン』

『サミュエル』『ジャーヴィス』『マエストラーレ』

『リベッチオ』『グレカーレ』『タシュケント』

『レーベレヒト』『マックス』

給糧艦 『間宮』

任務娘 『大淀』

「兎に角、マックス、レーベレヒト、

二人は北西の資材溜まりに行つて、

少しでも資材と食糧調達を頼む、

タシユケントは留守番だ、てか動くんじゃない。」

「いやよ。」

「いやよ、じゃなくて、山雲と執務を手伝つて貰う、

追加資材に必要な書類が山ほど必要なんだ、

嫌なんて言つてられないんだ。」

「はあ、ワカツタわよ。」

「貴女もお嫁さんになるんだから色々教えてあげるわね？」

「今、さらつとナニカ言わなかったか？」

「次、フレツチャー、ジョンストン、サミュエル、

ジャーヴィス、この四人で南東の燃料溜まりに向かつて欲し

い。」

「え？でも、深海棲艦がウロウロしてるんでしょ？」

「ジャーヴィス？晩御飯抜きになるんだぞ？」

「シツト!!それは不味いわね！」

「次、マエストラーレ、リベツチオ、グレカーレは、

島内の調査と、畑に転用できそうな土地を探してくれ。」

「え。」

「マエストラーレ、お前は薄いスープで満足できるのか？」

「やらせて貰うわ。」

「でも、この寒い島で農業出来るの？」

「グレカーレ、それに適した作物の『苗』は先の輸送船団で来ている、

リベツチオ、防寒着は俺の使つていいから、頼めるか？」

「・・・わかった。」

「そんな・・・提督の防寒着をお借り出来るなんてっ!？」

「霧島、蒼龍、明石はお説教な。」

「えっ!?!」

「あちやく、まだ終わって無かったんですね。」

「く、私の計算に間違いなんて……。」

「現在13:57か、準備出来次第行動開始、

美味しい晩飯か、寂しいスープだけか、

お前たちの行動に掛かっている、頼んだぞ!!」

全員『了解!!』

▽

「タシユケント、書けたか?」

「どう?あつてるかしら?」

「よし、大丈夫だ、やっぱりみんな『日本語』は

普通に使えそうだな。」

「そうねえ、これは大きな誤算ね。」

「ソウなの?」

「ああ、大抵の海外艦娘は、母国語か、

ふにやふにやな『ひらがな』が多い、

紙代も馬鹿にならないからな、助かるよ。」

「ヤッタ／＼／」

「……むう。」

「山雲?指輪の件なんだけど、どんなデザインがいいか?」

「へっ!?!で、デザインっ!?!」

「ああ、本土の宝石商に頼んで『誕生石』は確保してある、

後はデザインだけなんだ。」

「……後で、カタログ頂戴／＼／」

「任せる、

タシユケントは、先ず体調を万全にする事が任務だ、

当面は大人しくしてなさい。」

「えく。」

「えく、じゃない、

ただでさえ血液を失ってるんだ、

下手に動いて、貧血症状でぶっ倒れて見ろ?

屋内なら誰かが見つけれられるだろうが、
屋外だと、『即凍死』が待ってるんだぞ?」
「・・・はあ、ハヤク春にならないカシラ?」
「無理だな、冬に入ったばかりだ。」
「・・・あの曇天に砲撃したら晴れるカシラ?」
「あら、奇遇ね、同じ事を考えてたわ。」
「お前ら、弾薬もタダじゃないんだからな?」
「は〜い。」

▽

「よいしょ、よいしょ。」
デッキブラシで風呂場の床をこする
蒼龍、そっち終わったらこっちね。」
「明石?サボって無いわよね?」
「蛇口の調整にボイラー調整、
変わってくれてもいいのよ?」
「遠慮しとくわ。」

オリヤー!! パカン

「霧島の薪割りは順調の用ね。」
「あはは、艤装つけたままでもいいから薪割りなんて、
提督らしい発想ね。」
「そうだね、

でも、リアルの提督って、結構イケオジなんだね。」
「蒼龍、『艦これ』の更新が少なくなってるから、
それなりに年数が経って居るのよ?」

提督は人間、御歳を取られるのは当たり前よ。」
「そう、だったね、

山雲が言ってた『見送る側』って、この事なんだね。」
「はい、ですが、引退すれば私達も『老います』
でも、それは今じゃない。」

「そうね!!まだまだ先の話だもんねっ!!」

▽

(そう、私達は艦娘、

山雲が言っていた事も承知で、

「私達はこちらの世界に来た、

来てしまった、つまり、

『深海棲艦』にもあり得る話)

「提督、必ず私達が御守り致します、

いつか、終戦を迎えられるその日を、

その先を共に過ごす為に。」

嫁とドラム缶と

執務室

「・・・山雲、タシユケント、

あと、どれくらい?」

「こっちは、7まい。」

「ワタシは、4まい。」

「もう少した、俺もあと3まい。」

申請書、必要資材量、必要理由、

日程、航路予定、必要艦艇、必要人員

これらを必要資材100毎に一枚

100以下、つまり、99からは、10単位に一枚

そして、一桁にも、一枚となる。

電卓と言う相棒が軋むが書かねば終わらない

執務と言うデスマーチ

〈急報!!〉

ジャーヴィスより緊急電!!

「・・・ないようは?」

〈発・単冠湾泊地ジャーヴィス

宛・アドミラルエージ、

予定地点にて資材回収せしむも、

『回収資材』に異常発生、

『意識不明の艦娘』を保護す、

緊急と判断し、全力にて帰投す、です

「『霧島』聞いているな?」

☒はい、ですが燃料は☒

「止む終えまい、単艦にて急行、

急ぎ合流、護衛任務に就いてくれ。」

☒了解しました、計算上、燃料は往復は持ちます☒

「わかった、

緊急出航を許可する、

『明石』『蒼龍』は、港湾に待機、

『蒼龍』は、偵殺機を許可する。」

(え?イマ、文字がオカシかったヨウな?)

☒マジでっ!?!いいのっ!?!☒

「うむ、深海棲艦を見つけ次第、

『サーチアンドデストロイ』だ、明石は、

緊急用浮きドックの準備だ。」

☒ひやつほくいつ!!アレを合法的に使える日が来るなんて!!☒

☒了解です、緊急修理分の資材、一隻分はあります!

いけます!!☒

「行動開始!!」

3人☒了解!!☒

「ねえ?」

「なんだ?山雲?」

『『偵殺機』って、なあに?』

「ワタシも気になる。」

「・・・『鋼鉄の咆哮』は知ってる?」

「かじり程度は。」

「しらない。」

『『呉の明石』は?』

二人「嫌と言う程知ってる。」

「そいつと、俺で、

『航空自衛隊の引退した機体』を、

『魔改造』して、正規空母で運用出来るようにしたヤツ。」

二人「なにそれ、怖い。」

「とは言え、引退が十数年前だから、

ほぼ新造品なんだけど、『F-4・EJ・ファントムII』

速度780km/h、20mm機関砲一丁、『500kg徹甲爆弾』

一発、

増槽込みの航続距離、4786km、

先の、大湊警備府からのお土産で、20機配備してあるんだ。」

二人「資材がマツハで消えない？それ。」
「・・・消える。」

二人「もう、書くのいやあく。」

「俺もだ・・・泣けるぜ。」

▽

「さあ、獲物を探して頂戴!!」

フアントムIIヒャーウィーゴっ!!」

へ・・・英語喋れないのに無理すんな

「まったく、この『呉の明石特性浮きドック』

瑛士が気を利かせてくれなかったら、

今回は積んでいたかもしれないですね。」

▽

「あ、そうそう。」

「なあに？」

「ドウした？」

「こんな改装、受ける気、あるかなって。」

設計書、設計図の順で受け渡す

「オーバースペック過ぎよ、

それに、『深海棲艦』も使って来る可能性だってあるわ。」

「確かに、コレじゃ、艦種スラ、変わっちゃうね。」

「だよなあ・・・普通は。」

二人「え？」

「『霧島』いるじゃん？」

二人「うん。」

「あの子、結構ぶっ飛んでる時あるんだよ。」

二人「うん。」

「結果がこちらにございます。」

主砲35.6cm連装砲・4基（8門）

（艦首、艦尾に、背負い配置各2基）

←

35.6cm65口径三連装砲（9門）

(艦首に背負い配置、2基、艦尾、1基)

側舷砲15.2cm単装砲

(片舷7門×2)

←

単装76mm60口径速射砲

(片舷6門×2)

12.7cm連装高角砲4基(8門)

←

10cm65口径連装高角砲8基(16門)

25mm連装機銃10基(20門)

←

20mmガトリング砲8基(5門×8基)

追加兵装

15.5cm三連装65口径・2基(6門)

(艦首、艦尾に各1基)

機関換装 改・艦本式タービン4基、

278500馬力

速力 35.8ノット

航続距離18ノット/14560海里

二人「・・・さ、書類を進めましょう。」

「・・・いわゆる、『鋼鉄の咆哮仕様』になれるんだ。」

「資材が本当に溶けて逝くわね。」

「ハア、常識と普通ハ、どこニ行つたんだロウネ。」

「これを実現出来る『呉の明石』に文句を言ってくれ、

来て早々どこかと連絡を取ってると思ったら

『半日もせずに改修完了しました』とか言つて来て、

なんの事だと思つたら既に『手遅れ』だったんだ。」

「確かに末っ子で、少し大雑把と言うか、

はっちゃけてると言うか・・・。」

「ナア、まさかと思うけど、

『他の艦娘』も出来るのかイワナイよね?」

「・・・アイツらならやりかねない。」

二人「不幸だわ。」

「事務作業用のパソコン頼んで置くよ・・・。」

▽

「後ろ、どうかしら。」

「お姉、今の所レーダーには引つかかってないわ。」

「ジャーヴィス、エージはなんて？」

「今、『霧島』がぶっ飛んで来るって言ってたわ。」

「『霧島』、ね、

『艦これ』の世界から来たんだから、練度もかなり上よね？

「それがねサム？」

『アイツの射線上』だけには、入らない様にだつて。」

「なにそれ？『霧島』つて、ノーコンなの？」

「そうじゃなくて、『巻き添えを喰らうから』だつて。」

「・・・本当にソレ『霧島』なの？」

「さあ？態々『艦これ』の世界から来てるんだから、

『霧島』なんでしょうね、

!?

ジョンストン、フレッチャー、気づいた？」

「ええ。」

「不味いわ、数がどんどん増えてる。」

「ジャーヴィス、接敵一報を。」

「わかってるわよサム、妖精さん、お願いね？」

▽

〈続報!!〉

最大探知圏内に複数の感アリ

追撃艦隊と推察、

これより、遅滞戦闘に入る、です

「霧島!!まだ着かないのかっ!!」

☒いえ、もう最大射程圏内です☒

「ジャーヴィスへ、

大至急、単冠湾泊地へ直行されたし。」

▽

〈返電、大至急単冠湾泊地へ直行されたし〉

「え？つまり？」

〈既に霧島の最大射程圏内だそうです〉

「みんな!!逃げるわよっ!!」

▽

「諸元入力完了、

35.6cm3連装砲、

全門、ぶちかませえええっ!!」

本日の報告書？

フレッチャー、ジョンストン、

サミュエル、ジャーヴィスに損傷無し

保護艦娘一人

燃料は霧島の補給で、オケラとなった

蒼龍が接敵出来ず不貞腐れた

マックス、レーベレヒトは、オマケを回収

奇跡的に燃料を確保し、全体へ等分補給とした

オマケの中身は現在調査中

嫁と艦娘と資材が無い!!

入渠ドック

・ 医務室

「ふう、状態安定してます、

じきに意識は回復するかと思われます。」

「っ、悔しいわ、流石専門職。」

「いえ、山雲さんの『医療知識』とか、

『研究段階の治療法』は、

私が知りえない物です、尊敬こそすれど、

謙遜は私が許しません。」

「そう、それならよかった。」

「しかし、

ドラム缶の中に艦娘が入ってたなんて、

今までの報告に無かった案件だぞ?」

「そうですね、

損傷状態から、恐らく『大破着底』

『大戦時のまま』と推測できます、

使用されている『刻印』から、

『オーストラリアの艦艇』だと、断言できます。」

「オーストラリア・・・」

今は内戦状態になってるアノ国か。」

「近隣のニュージージーランドは、

その避難民受け入れで、貧困が極限状態との事ですが事実で?」

「・・・聞かない方がいい、

明石、状態には常に注意してくれ、

もしもの時は。」

「・・・保証出来かねます。」

「せめて俺を呼んでくれ。」

「はい、わかりました。」

▽

廊下

「アナタ。」

「なんだ？」

「ドコ見テタノ？」

「・・・いや、発育の良い子だなあ、と。」

「処スル？」

「勘弁してくれ、普通の反応だ、

それに、山雲とは・・・な？引退が出来る時に、な？」

「バカ。」

「さて、今日と言う今日は、

『シロツコ』に出て来て貰わないとな。」

「そうね、喰つちや寝艦娘に

タダ飯を食べさせる余裕は無いわ、

最低限『温室畑』の手入れだけでもやらせないと。」

コンコンコン

『『シロツコ』いい加減出て来い、

家にはタダ飯を食わせてる余裕は無いんだ。」

「出て来なさい、こうして扉のノックだけで留めてるのはかなり讓歩してるのよ？」

「返事は無し、か。」

「もう、マスターキーはこっちが持ってるのよ？」

それでも開けないで、

貴女から出て来るのを期待してるんだから。」

カチ

「っ!?!伏せろ!!」

「ちよっ!?!」

扉が吹き飛び、反対側にさらなる大穴が出現する

「いたた・・・大丈夫?あ・・・エイジっ!?!」

「・・・少し切っただけだ、

頭の切り傷は見た目以上に

軽傷な事も・・・おい、山雲？」

「ユルサナイ、コンナノ、ユルサナイ。」

「山雲っ!!」

「絶対に許さない!!」

服装が変わり、灰色の制服があらわになる

「教えてあげる、

失敗するとわかってても、

たとえ、勝ち目がなくても、

最後まで戦う意志を、覚悟を決めた、

『西村艦隊』の力を。」

轟音と共に部屋には穴が開き、海には

なにかが跳ね飛んで行った

▽

「いっつう、山雲の奴。」

(もう、海は嫌なのに)

「立て。」

「うわっ!?!」

咄嗟に飛び退くとそこに水柱が際立つ

「実弾っ!?!なに考えててんのっ!?!」

「さあ、艦装を。」

「ふざけんな!せつめいしろよ!!」

「説明?貴女が撃った砲弾で、エイジが怪我したのよ?

なら、それがどう言う事か解らせてあげる、

それでいいかしら?」

「っ!?!」

砲弾ではなく、腹に重たい一撃がめり込んでくる

「ぐうお・・・。」

「あら?実弾が嫌なら、『拳』で良いのかと、

違ったかしら?」

「や、まぐもおおっ!!」

殴り返す

「せっかく筋はいいのに。」

「くそっ。」

距離をあげようとするが

「命中。」

「ひっ!?!」

水しぶきがシロツコを隠す

「まだ沈まない筈よ?大破よね?」

「い・・・いたあい。」

「あら、可愛い声ね、

もっと泣かせてあげようかしら?」

「この、クソアマっ!!」

主砲を構えるも

「あら、そんな所に主砲が。」

ゴキン

「あゝあゝあゝうゝあゝっ!?!」

振り下ろされる踵落とし

☒山雲っ!!いい加減にしろっ!!☒

「・・・わかったわ。」

(・・・痛みがいい・・・わから・・・い)

『シロツコ』

貴女のここでの仕事は畑の管理よ?海じゃないわ。」

(・・・きこえない・・・いたい・・・こわい)

「海が嫌いな艦娘が居たっていいのにな。」

▽

医務室

「山雲さん、やり過ぎです。」

「・・・。」

「その姿、例の『スリガオ』の時のだな?」

「え?」

改めて自身の姿を確認する

「・・・そう、ね。」

「余計な事も頭に入れて来たんだな？」

『知ったんだろ？』過去の海戦の結果も。」

ウン

「ほれ、お前を隠せるぐらいは出来るぞ。」

しつかりと、強く抱きしめる

イタイワヨ

「おう、わざとそうしてる。」

ハナシテ

「嫌だね。」

キライニナツタデシヨ

「いや、無いな。」

ハナシテヨオ

「お前が泣いても離さない。」

バカア

徐々に服装が普段の服装に戻っていく

(ふう、こんな事も起こるんですね、

感情における『仕様外』の力、

私にも起こりうるのでしょうか?)

「おう、ココは？」

「ここは、単冠湾泊地、管理を、『日本国』がしています。」

「ニホンっ!？」

ベットを翻し、障害物とする

「ちよっ!? 安静にしてなさいよっ!!」

「ワタシをオーストラリア海軍と知ってて、

どう言う了見だっ!!」

「貴女を保護したからに決まってるでしょう!!」

それに、今は『2030年』なのよっ!!」

(嘘だ!! 今はまだ、1942年でしよう!!)

「ちよっと、医務室でなんの騒ぎ？」

「ジャーヴィスか、すまない、

この子に現実を教えてあげてくれ、

「俺は山雲を独り占めするので忙しい。」

ハナシナサイツテバ／＼／／

「バッドデイだわ、

私は『J級駆逐艦ジャーヴィス』よ？

イギリスの『艦娘』なの、貴女の名前は？」

「・・・『P級軽巡洋艦』パース、

生まれはイギリス、所属はオーストラリア海軍。」

「そう、同郷同士、お話ししましょう？」

今の西暦からかしら？」

「っ、そうよ、

今は『1942年』なんですよ？そうよね？ね？」

(お願い、そうだと行って!!)

「ふう、残念だけど、

『2030年』貴女が『戦没』してから、

それだけ時間が過ぎたのよ、パース。」

「うそだ・・・艦長達は？オーストラリアは？」

ワタシは・・・。」

「貴女は『艦娘』として、新たに生を受けたの、

過去の事は辛いでしようけど、

これらは、全て現実よ。」

「いや・・・いやあ、

かえして!!ワタシを1942年に帰してよおおっ!!」

「出来ないわ、

私はどつちかというと『現実』を生きるので手一杯なの、

それに、『艦娘』の姿で戻れば、

間違い無く貴女は『そう言う扱い』をされるわ。」

「・・・なにを、いつているの？」

「明石？姿見の鏡はあるかしら？」

「ええ、今、出しますね？」

▽

「コレ、だれ？コレが、私なの？」

▽

「シヨック、ですよね、

でも、『艦娘』としては、健康良好、
何処も悪い所はありません。」

「私の船体はっ!？」

「この身体はなんなのっ!?!教えなさい!!日本の船!!」

「『明石』です、

艦装は外していません、流石に裸じゃ不味いので、
服は私が着せました。」

「これじゃあ、ただの学生・・・これじゃあ、

1942年に戻れないじゃないっ!!

治しなさい!!治しなさいよっ!!お願いよおっ!!」

「パース、それは出来ない、

それに、今や各国は内戦を抱えたり、

『深海棲艦』に海の自由を奪われ、『貧困』に喘いでいる。」

「この変質者は誰?少女を抱え真面目な言葉を言われても、
説得力すら感じないわ。」

プハ、ヤットハナシテモラエタ

「・・・嫁を抱きしめて何が行けない!!」

「その背丈から見ても、少女にしか見えないし、
だいたいお前はなんなんだ?」

「ここ、単冠湾泊地の提督で、

扶桑・瑛土と言う、昨日付で『中佐』になった、

山雲の旦那だ!!」

「モウ／＼／嫁の山雲ですう。」

「・・・ニホンは、変態の国だったのか。」

▽

(やっべえ起きたくない)

嫁と過労死確定とまた増える

執務室

「・・・そんな、母国が、内戦なんて。」

「それと、2028年を最後に、

連絡が途絶えている、

隣国のニュージージーランドも、29年を最後に、

音信不通、現状は誰にも分らない。」

「・・・そんな。」

「おいっ!?!」

倒れ込むパースを支える

「こんな世界なら・・・沈んでた方がマシよ。」

「申し訳ないが、今は『艦娘・軽巡洋艦パース』として、

お前は『生きています』

現状、北方海域の解放が優先だが、

北アメリカへの海路が安定し次第、

『南方の解放』を主軸に切り替えるんだ。」

「・・・うそだ。」

「?なもんか、

呉鎮守府が先ず『台湾』への海路を確保すべく、

作戦の準備を進めている、

そこから、フィリピン、インドネシア、

パプアニューギニアを経て

『オーストラリア』の現状確認に動いているんだ、

必ず、辿り着ける。」

「・・・みたくない。」

「パース。」

「ころしてよ。」

「駄目だ。」

「なんでよ?」

「『生きていますからな』」

「死んでるのと一緒よ。」

「ここで何もしなければな。」

「・・・って、

なんで貴方頭怪我してるのよ?」

「・・・気にするな。」

「でも。」

「いいっ!!」

「なんで怒鳴るのよ!!」

「痛えからに決まってるだろうが!!」

プシ

「っ!?っく・・・いてえ。」

「や・・・やだ、血が!!」

「くそ、また切れちまいやがった、

明石の野郎、止まったとか嘘こきやがったな?」

「・・・みせて。」

「はあ?」

「傷口!!見せてっ!!」

「ちよっ!!?うおっ!!?」

「・・・確かに、ここからの出血ね。」

「ばっ、近い!!」

「・・・じつとしてなさい。」

「なにを?」

「いいから!!」

「おう、わかったよ。」

(なんで・・・なんでだろ?)

私、これを治せる?わからない、

でも、多分、触れてなぞれば・・・)

「・・・痛みが引いてく、パス?」一体何を?」

「これで、もう噴出さない筈よ。」

手鏡を渡される

「おお！痕こそあるが、綺麗になってる！
なんか傷ありの顔って、箔が付くな！」

「・・・ふう。」

「あぶなっ!?!」

また倒れ込むパースを抱き抱える

「なんだか、疲れたわ。」

「傷、治してくれたんだな？ありがとう。」

(・・・え？ヤバ／／普通にしてればカツコイイじゃない!!)

「ん？どした？顔赤くして？」

何処からともなく冷気が漂う

「随分と仲良くなられたのですね？アナタ？」

「やつ!?!山雲っ!?!」

「ほく、嫁の山雲がイルのに、

堂々と『重婚』相手を増ヤスのか、お前と言う奴は。」

「タシケントっ!?!」

「ちっ!?!ちがうわっ!!」

わ、わたしが倒れたから!!こうなっただけで!!」

二人「へく、ホントに?」

「・・・額の傷を治したんだ、

そうしたら、身体から力が抜けて立っていられなかったんだ。」

「そう、貴女は『そう言う艦娘』になったのね。」

「どう言う事だ？」

「エイジ、わかってるんでしょ？」

「この『艦娘達』に『個性と能力』が、発生している事に。」

「・・・やっぱりか。」

「ウン？山雲、それナラ、ワタシも?」

「貴女はまだわからないわよ、

『霧島』の様に『鋼鉄の咆哮仕様』

『蒼龍』の様に、『特殊航空機運用』

『明石』の、『超特殊工作スキル』

私『山雲』の、『叡智引用スキル』、

エイジに関わりのある艦娘が増えて行っているの。」

「そ、それが『艦娘』じゃないのか?」

「違うわパース、

普通は史実の武装、機関、精々のif改装で、

装備その物の『新造』はあり得なかったの。」

「家の妖精達か?」

「わからない、けど、

〈猫吊るし〉が言っていたイレギュラーに該当するの、

そして、貴女『パース』にも、

『傷を治す』と言う能力が発生してしまったの。」

ぐうぐ

「あう／＼／＼」

「恐らく貴女の内包資材と、

たぶん、『カロリー』を消費して能力を使ってるのね、

ちよつと遅いけど、お昼にしましょ。」

時計は15:45を少し過ぎていた

嫁と登場人物紹介

※

扶桑・瑛士（45）

やや身長は低めだが、体つきは細マッチョ
かつては『艦隊これ』の提督民

現実における深海棲艦の攻勢が始まってから、

『提督候補精査委員会』に応募、

そこで、『初期艦』の

『吹雪』『叢雲』『漣』『電』『五月雨』と会合、

『提督（仮）』のお墨付きを得た

主要鎮守府の研修を回る際

『呉の明石』と意気投合、

ここで『専用駆逐艦事件』が発生する

その結果『単冠湾泊地の提督』に就任が決まった

横須賀鎮守府の『三笠元帥』とは、

研修の際、『東郷平八郎』の話をかじり程度に知っており、

『三笠』に目を付けられた

ただ、『三笠』自身は、

『三笠公園』に良く来ていた瑛士を知っており、

実際に話せればと、考えていたらしい

山雲

この『山雲』は、『艦これ』における、

ケツコン（カリ）艦娘だった、

現実における深海棲艦の攻勢が始まり、

その辺りから、『意志』を確立、

単冠湾泊地着任の情報を、

『提督候補精査委員会』のサーバーをハッキングして知った

辛うじて、『パラボラアンテナ』が一基稼働状態を確認し、

意を決して『単冠湾泊地』へ自身を飛ばした

そして、『着任予定だった電と融合』

その時ハッキング能力が、『叡智引用スキル』へ変化した融合された電は、『新たな基地の初期艦』として、無事である。普段は、改の状態で、感情を切っ掛けに、

『スリガオ海峡突入・改』となれる

体術は勿論、練度・改装はカンスト済み

フレッチャー・ジョンストン・サミュエル

この三人は

一応、『宗谷』の気転により、『接待』はされなかった

虐待こそ受けていたが、辛うじて『意志』は失わなかった

ジョンストンは一番最後に着任したため、

軽い打撲で済んでいた

フレッチャーは、『お姉（ねえ）』と、

ジョンストンから呼ばれるようになり、

色々吹っ切れた（主に妹愛が）

ジョンストンは比較的普通の性格だが、

姉のフレッチャーのはっちゃけ具合に、やや疲れ気味

サミュエルは、

はっちゃける姉をみてこめかみを抑える回数が増えた

ジャーヴィスとはなんだかんだ仲が良く、

一緒に行動している事が多い

ジャーヴィス

自身の口からも『アンラッキージャーヴィス』と言う様に、

過去、出撃しても成績は芳しくなかった

ただ、エイジが着任し、戦闘を数回し

「なんだか、攻撃が良く当たるのよね？」と、

運気が回復傾向にあるとの事

パースと同郷であり、時折り『英語』で話しており、

エイジの『英語教師担当』でもある

マエストラーレ・リベッチオ・グレカール・シロツコ

イタリア4姉妹、彼女らも『一応、宗谷』の気転により

無補給、怪我だけで済んでいた

イタリア飯は美味いと好みを選ぶに分けられるが、『カップ麺』に毒されており、

資材申請書に必ず『カップ麺』が記載される
アメリカ艦達と交代で遠征にいそしむが

リベッチオはかなり『しつかりタイプ』で、

ほかのリベッチオとは一線を画している、
そして、エイジからの借り物防寒着を

必ず着用する姿は年相応の女の子に見えるらしい

マエストラーレは、『濃い味スープ』が好物で、

「薄味スープになるぞ?」と言われると、マジモードとなる。

グレカールには、あまり差は見受けられないが、

やや大人しい傾向にある

シロッコは完全引きこもりで、

『海上に立つ事すら拒否する』

戦没時のトラウマなのか、周囲との距離を取りたがり、

一人で居る事が多い

でも本当は、一緒に海を走りたい

レーベレヒト・マックス

言わずと知れたドイツ艦娘

『一応、宗谷』に救われた?

性格面に関しては大差はないのだが、

マックスは必ずレーベレヒトと呼び、

ジョンストンの様に『姉』呼びをしない

そしてタシユケントの側に必ずいる

マックス曰く「ほっとけないの。」

食の楽しみは、交代でエイジが作る『魚の煮つけ』が好物

その邪魔だけはしてはいけない

タシユケント

旧・ソビエト連邦の嚮導駆逐艦

この『単冠湾泊地』先任達の中で一番の被害者

初出撃時も顔色を化粧で隠してしまう程内向タイプ

エイジを好いてはいるのだが、
まだ、心の整理がついていないのと、
『練度』も足りていない為、指輪はしていない
ぶっ壊れ枠代表

『霧島』

山雲と同じく、『艦これ』出身

『呉の明石』と即連絡をとり、
半日で、『鋼鉄の咆哮仕様』を身に着けた
改二艦装も勿論使えるが、

普段は『燃費』の関係もあり、改のまま
感情によって艦装を使い分けられるので
近・中・遠のオールラウンダーになった。

また密かに『呉の明石』と連絡を取っており、
『鋼鉄の咆哮仕様』兵装が確実に増えている
そこに

『蒼龍』

同じく『艦これ』出身

『呉の明石』と共謀し、

『複合装甲飛行甲板』を搭載、
ジェット機運用能力を有している
カタパルトもあるのだが、

加速時、『離陸補助固形ロケット』により、ほぼ眠っている
『喰う母』であり、

『マイすり鉢茶碗』と、『マイバケツお椀』でないと、
食べた感じがしないバケモノ
少しこの世界に來た事を後悔したが、

『有限』が大事と、考えを改めた
そのさん

『明石』

同じく『艦これ』出身

見た目は改、しかし『呉の明石』と同様、

『魔改造が大好き』

そして、蒼龍が運用した『ファントムII』の最終調整をした黒幕艦これの世界は勿論、

『鋼鉄の咆哮』の世界観、使用された武装を

『ほぼ再現出来る知識』が入っており、要注意艦娘

夜な夜な誠意製作中の『ハウニブー』が

出て来るのも時間の問題となった

ただ、電磁兵器・光学兵器の一部はまだ出来ないらしい
そのよん

『間宮』

我慢できず妖精さんを懐柔、着任『艦これ』出身料理のレパトリーは、

ネットに上がっている料理は全て再現可能

しかし、輸入が死んでいるので

揃えられる材料で最高を目指す

両腕にある『間宮砲』は、

『鋼鉄の咆哮仕様』であり、

127mm速射砲へ変更されている、

勿論、深海棲艦へ直接ダメージが通る

任務娘

『大淀』

セリフ、出番すら忘れられつつある『艦これ』出身

一応、艦装はあるとの事だが、瑛士に言い忘れている

初対面時、山雲を『艦これ』出身と見抜く程度に

感は鋭い筈だった・・・

周りのインパクトに押され、最低限しか部屋から出て来ない
「はあ、こんな筈じゃなかったのに。」

『猫吊るし』

言わずと知れたアレである

妖精達の統括であり、

妖精達が普通に会話出来るのは彼女の

『意思疎通スキル』のお陰である

『三笠』を艦娘化させた元凶であり、

言わば、自身がイレギュラーの発端であると自覚している
建造待ちの瑛士指揮下の艦娘達が増え過ぎて

頭痛薬の消費が増えている

『隙あらば自力建造』で着任しようとしている艦娘達を

引き留めているのも、彼女である

三笠元帥

元、『三笠公園』の三笠であり、

就役してから、これまでの『歴史の変化』を

目に焼き付けて来た

正直、艦娘化には乖離的であり、なるつもりは無かった

しかし、『象徴』を求められ、

渋々『艦娘化』横須賀鎮守府に元帥として、指揮を執っている

『三笠公園』の時に瑛士と会合しているものの

三笠が一方的に認識しただけで、この時点では話せていない

『提督(仮)』の時に、始めて会話をし、少し嬉しかった。

「艦娘化、して良かった。」と。

レギュラー堕ち

『宗谷』

タシユケントの事を知りつつ、

他艦娘に黙っていた

人間嫌いで最早滅んでしまえばいいと思っていた

『呉の明石』に

『全バラメンテナンス』を施され

骨抜き状態が今だ治らない

それを施術されると『性癖』が変わるらしいが・・・

諸悪の根源

『呉の明石』

『初期艦』達と実は同時に出現、

しかし、その工作能力は公に出来なかつた為、

『初期艦』達の後の着任と報道された

『魔改造大好き』であり

研修に来ていた瑛士と意気投合

『専用駆逐艦事件』の実行犯である

『霧島』と密かに連絡を取りつつ

『瑛士』とも連絡をとり、

現在、

『専用駆逐艦』『専用巡洋艦』『専用戦艦』を

誠一製作中

これからの娘

『パース』

オーストラリア海軍所属の艦娘

現実に置いての『初保護（ドロップ）』で、

艦娘知識は無し

最後の記憶は1942年の戦没寸前で終わっている
取り乱しはしたものの落ち着きを散り戻しつつある

この『単冠湾泊地』初の軽巡洋艦と言う事もあり

『過労死確定要員』である。

軽巡洋艦が、パースしかない為、

練度はうなぎ登りとなる・・・カワイソウニ

相手の傷を癒せる能力を持つに至るが

『大量のカロリー』と、自身の燃料も消費する為、

ほぼ死蔵スキルと化す

嫁と資材と軽巡洋艦が来ない!!

乾ドック

パスよ、

遅いお昼を食べて、

早速『遠征』を頼まれたけど

その帰り『深海棲艦』と遭遇

「痛い・・・現実、なんだ、コレ。」

改めて私は『艦娘・パス』なんだと実感した

パニックになって、転倒、

そこに『イ級駆逐艦』からの砲弾が直撃

そこで小破した

「深海棲艦・・・なんで旧式駆逐艦」に見えるんだろ？」

私はの目には、退役した駆逐艦や、

かつての『大日本帝国海軍の駆逐艦』に見えていた

そこで更に動揺してしまい、

後方から軽巡洋艦の砲撃で大破した

周りに、山雲や、ジャーヴィス、

サミュエルが居てくれて

本当に良かった

「サミーって呼んだ時のサミュエルは可愛かったな。」

入渠ドックから上がり、心配してくれてるサミュエルに

「ありがとう、サミー。」って、言ったら

真っ赤になって「ハ、ハズカシイヨウ／＼」と、縮こまっていた

「はあ、やっていけるのかな？」

乾ドックに入った『私の船体』は

見るのも辛くなるほど、痛々しい姿をしていた

艦中央部に破口、艦橋基部にも被弾痕、

後部艦橋損壊、たった4発の直撃弾で、ここまで追い込まれた

「こわいよお・・・艦長、私、こわいよお。」

この流れる水は、『涙』と教えて貰った

悲しい時、辛い時、嬉しい時、あと、笑う時も流れるらしい
「つぐ、ひつぐ、艦長、つらいよお。」

何と無くわかる、悲しい、辛い時なんだと

「みんな・・・会いたいよう。」

〈会いたいですか？〉

「だれ？」

〈猫吊るし、そう呼ばれています〉

「猫吊る・・・。」ほんとは、猫を吊るしている

〈まあ、こう言う仮の姿でしたら、可能かと〉

そこには、小人？いや、

もつと小さい、妖精と呼べるほどに小さい子が居た

〈この子は別の子ですが、貴女の船員達も

こうして具現化出来ますよ？〉

「・・・ほんと？」

〈ですが、貴女はまだ『艦娘になり切れていない』

だから『見える物』も違っている〉

「うん、みんなが言う『丸い変なの』にみえない。」

〈乾ドックに貴女の船体を持ってきたのは、

私の指示です、ここで再度改装、

『正式な艦娘』になれば、

彼らと一緒に居られる事を保証します〉

「・・・1942年に、帰れる？」

〈いえ、それ自体が不可能です〉

「・・・そっか。」

〈あっさりしてますね〉

「そんな訳ない・・・、もうぐちやぐちやで、

纏まんない、帰れるって、少しでも思ってたから。」

〈・・・貴女の艦長達が訴えてきます、

『早く側に行かせてくれ』と〉

「・・・ホントに？」

〈艦娘に関して私は『嘘』を一度もついた事はありません〉

「それ、絶対『裏切る人の言葉でしょ?』」

〈そうなのですか、では、どう言えば?〉

「知らないよ、艦長が読んでた

小説に書かれてた事ぐらいしかわかんない。」

〈・・・改装、やりますか?〉

「酷い妖精。」

〈それは初めて言われました〉

「・・・まだ、いい。」

〈どうして?〉

「・・・わかんない。」

〈エイジは、暫くは出さないと言っていましたし、

休暇も兼ねて島内でも散策をしたらいいでしよう〉

「・・・吹雪いてる外を見ていながら

何てこと言うのアナタは。」

〈・・・失言でした〉

「貴女、常識知らずとか言われない?」

〈『艦娘のなりそこない』に言われるのは心外ですね〉

「・・・ほんとに、会える?」

〈はい〉

「?じゃない?」

〈妖精統括の名前に誓って〉

「・・・痛い?」

〈今回のケースは初めてなので

なんとも言えません、気持ちいいかもしれませんよ?〉

「・・・なんか、えっちな。」

〈その体系がその根源な貴女に言えまして?〉

「・・・スケベ親父。」

〈確にかつての船員達は男性でしたが、

妖精は『中性か、女性』に限定されます〉

「・・・少し、安心。」

〈で?〉

「デリカシーとか、ほんとに無いんだね。」
「構ってる暇なんてありませんでしたから。」
「わかった、始めよ?」
「へい傾向です、直ぐに準備しますね」
「・・・ほんと、デリカシー足りないわよ?」
「・・・善処します」

▽

執務室

「山雲、パースの容態はどうだ?」
「今、乾ドックで、」

『猫吊るし』が、改装してるそうよ?」

「なんだって?」

「資材・・・大丈夫?」

「タシケント、今直ぐ乾ドックに行ってくれ、」

山雲は、フレッチャー達を呼んで遠征準備を。」

「この吹雪よ?早くても明日の午後じゃないと

時化が酷くて出れないわ。」

「マジかよ・・・せつかく『軽巡洋艦レシピ』で、

『普通の建造』が出来ると思っただのにい。」

コンコンコン

「誰だ?」

開く扉から『二人の艦娘』が現れた

「報告します、」

『アドミラル・ヒツパー級三番艦

プリンツ・オイゲン』着任しました!!」

「報告します、心配かけたわね、

改めて、『パース級軽巡洋艦、パース』

着任しました!エイジ?

傷ものにしたんだから、ちゃんと責任取ってよね?」

「山雲、ダイジョウブか?」

「はあ、わかっては居たけど、

こう、改めて言われると、ね。」

「あく……わかった、

パースは責任を取るよ、

オイゲン、お前は説教な。」

「そんな〜っ!?!」

※

新たな艦娘が着任しました

プリンツ・オイゲン

『艦これ』出身

はっちやけキャラと言うか、

何も考えずに行動するタイプ

失敗を「成功のママですネ!」と解釈し

備品を壊しても「耐久力の限界でしようね。」

「え〜い!!」と、抱き着いて来る

『艦娘』の身体がある事による『感触』が新鮮で、

朝・昼・晩問わず抱き着いて来る

『味覚』は甘党で、

『問宮特性魚の煮つけ』に『砂糖をまぶして食べる』

駆逐艦用に甘めに行っているのに上乘せである

なお、辛いのは一切ダメ

オイゲン対策として

エイジの『唐辛子ホルダー』に近寄れず、泣き出す事も

「なんでひどいことずるの〜っ!?!」

仕方なく外して、悲鳴をあげる腰のマッサージを、

山雲にして貰う毎日となった

増える嫁とお前かつ!!と資材がないいいいつ!!

大ホール

「え、みんなに言っておく事があるので

集まって貰ったんだ、聞いてもらえる?」

全体の目線はまたか、と、

資材どうすんの? って言う目線

「まず、ケツコン（カリ）の艦娘を紹介する。」

「山雲よ? 第一婦人だから、宜しく。」

まあ、周知の事実だな

「タシユケントだ、

その、えつと・・・ま、まだ、予約ナンダ、

練度はアト少しなんだ／＼」

まあ、責任もあつただけど、

ちゃんとタシユケントから言われたのでおkした

「パースよ?」

傷物にされたのもあるけど、

お嫁さんにしてくれるって約束したからね!」

はい、あの後、

お風呂（入渠ドック）の掃除当番で、

ちゃんと札をかけて掃除してたのに入って来まして

まあ、慌てますね? こけますね? そのまま・・・

色々あつたんです、色々

「そして、元『艦これ』から着任した艦娘を紹介する。」

「霧島です、

『能力』は、『鋼鉄の咆哮仕様』と、

『農耕マスター』です。」

『農耕マスター』は、農作業全般を

熟練者と変わらないスキルを持ち、

作物の生育にも作用し、食糧調達がより確実になった

「蒼龍です、

『能力』は、ジェット機運用と

『悪食・深海棲艦喰い』です!!」

そう、遂にやらかした

少しでも資材に余裕が出来るなら奴らが来るので、空腹に耐えかねた蒼龍は、

深海棲艦を『ウエルダン』にして食べ始めたのだ

「けっこう美味しいよ?」と、好きに出撃させている、

ミディアムや、レアはダメだそうだ

食べた分だけ『ストック』出来るらしく

燃料・弾薬・鋼材の問題は『蒼龍』のみ解決した

ボーキサイトに関しては近海に空母が居ない為、

まだわからない

「明石です、能力は・・・色々。」

『魔改造』『瞬間修復』『鋼鉄の咆哮仕様再現』

『艦娘医療知識・熟練』『超巨大双胴ドック艦』

はい、最高にぶっ壊れ枠になりました

デメリットは、

魔改造はその艦娘専用艀装

瞬間修復は消費資材3乗増し

鋼鉄の咆哮仕様再現は、艦種毎に仕様変更可

その際の消費資材は4乗増し

ドック艦は、大和型をそのまま2隻並列で収容可能

稼働時に各資材を8000使用し、

連続稼働時間に応じて各資材を2700消費する

流石に『艦娘医療知識・熟練』はデメリットはなかった

「間宮です、

能力『クッキングマスター』と

『お仕置き、間宮クッキング』です、ハズカシ／＼／

一つ目は先の

『ネットに上がっている料理』から、変化したモノ

ネット・本・聞き伝えすら再現可能となった

二つ目は

お仕置きされる艦娘は『調理』される

決して提督（瑛士）の前には出されない

なお、その艦娘にとって『非常に恥ずかしい衣装』で

カメラに収められる、一部艦娘は

それを目当てに間宮へあえてちよっかいを出すのだとか

「大淀です、

能力は『超直感』と、『シュレッダー』です。」

超直感は『良くない事限定で発動』し、

何処に不利な条件が重なるか

何処に危険な深海棲艦がいるか

あまつさえ、渦潮回避100%になる反面

軽巡洋艦の癖に『ボーキサイト』を空母以上に消費する

シュレッダーは、超直感とセットで

『改竄書類』を見つけると

艦装に取り込み文字通り粉々にし『適正書類』に復元する

暗号、嘘の報告なども全て『適正化』され、

真実を書き出してくれるが、

悪魔で『紙媒体』に作用するので、

電子機器には対応していない

「プリンツ・オイゲンです!!」

能力は『ガジェットマスター』と、

『糖分燃料化』です!!」

・・・どうして糖分マシマシなのかの理由がこれだ、

食べた糖分は全て燃料に変換されストックされる

糖分さえ途切れなければ燃料切れにはならない

オイゲンに関しては、燃料は糖分で代替えとなった

ガジェットマスターは、

世界中で販売されている『おもちゃに分類される物品』を

『対・深海棲艦攻撃』に転用出来る。

おもちゃであれば『架空の物』も再現でき、

『鋼鉄の咆哮仕様』と対を成すぶつ壊れスキルである

魔法・空想兵器・武器も対象で

ベルトで変身する方々の再現も可能

ただし、消費資材は『一回毎に各資材2500』を消費し、

『使い捨て』なので、非常に資材殺しである

例・けん玉（巨大）けん玉の玉の部分振り回し圧殺する

・エクス○リバー、周辺からの離脱推奨

・リ○ル○イン、相手の息の根を確実に仕留める等々 e t c …

「『コロラド』よ！」

私がステイツのBig7!!

エイジの為なら母国のステイツにだって

全門ファイヤーしちゃうわ!!

能力は『バ火力』と、『小食』と、

『プロレスジャンキー』よ!!」

・・・そう、今回の原因はコイツだ

おかげで各資材が二桁になり

駆逐艦達がガチギレした

しかし、それらを受けてもピンピンしていた

バ火力は言うまでもない、

マジでバ火力なのだ、同じ口径の砲でも、

7乗増しの威力を叩き出し、

8門同時斉射で、

『7発』は確実に当たるのだが、一発は必ず外す。

小食は、燃料に関して7割減とかなり優秀

ただし、燃料は、であり、

間宮の繰り出す料理を『蒼龍換算』5人分食べる

プロレスジャンキーは

そのままプロレス技が深海棲艦に通用し、

仕留める事が出来る、勿論威力7乗付き

「以上だ、

遠征準備だ、

この大喰らい共を喰わせて行かなきゃならなくなったが、俺も、各鎮守府に資材の融通を頼んでいる、

それと、『日本石油機構』に明日、頭を下げて来る、それについて誰かを護衛として

二人連れて行く、

山雲は確実なので、後一人、相談して決めてくれ、だが、『艦これ』組は連れて行かん。」

艦これ組「なんでっ!?!」

「お前らの消費資材でいくらかかると思ってるんだ!!」

自力で帳消し出来るように改善策の提出!!

でなければ農作業の手伝い!!

自分達の喰う分ぐらい生産してから言えっ!!」

先任組（あ、流石に怒った）

（私は確実・・・でも、

もう一人、か、誰になるのかしら？

せっかく二人切りになれると思っただのに）

嫁と空戦と過去

移動中

「・・・コワイ。」

「大丈夫か？山雲？」

「モウ、ムリイ・・・。」

まず、大湊警備府へまた護衛艦に便乗し、

そこから『二式大艇』に乗せられ『琵琶湖』へ向かう

「わ、わたしも手、にぎつていい？」

「おう、わかったグレカーレ。」

良い吹け上がりのエンジン音だ、

良く整備されている

「ふふん、どうよ？アタシの二式大艇ちゃんは？かも！」

「ああ、よろしく頼む、『秋津洲』」

「了解かも！」

滑水し、ふわりと浮き上がる

「うん！絶好調かも！」

「・・・ダ、ダメエ。」

あ、気絶した

「と・・・とんでる。」

「そりゃあ飛行艇だし。」

「うう・・・。」

「まあ、外見ろ、少しは違うかも知れないぞ？」

「そとお？」

あ、固まった

「はあ、二人共空は駄目だったか。」

「そつちは大丈夫かも？」

「ああ、俺は平気だ、

しかし、内陸部とは言え、『制空権』の確保は大丈夫なのか？」

「そこは、『航空自衛隊』と共同で確保してるかも！」

史実の『B-29』とか、『B-17』でも

出て来ない限り平和かも。」

フラグ建てんなよ……

〈接敵一報!!〉

後方より深海棲艦艦載機接近!!〉

「ふひゃあつ?!?じょうだんかもおおおつ?!?」

「仕方ない、

山雲!!グレカーレ!!

ベルトをしっかり締めとけ!!」

二人「えっ?!?えっ?何事?!?」

「秋津洲!!対空防御!!」

俺が変わる!!」

「うへええっ?!?」

無理矢理操縦席から引き剥がし

操縦桿を握り、スロットルを全開にする

「ちよつとおおおお……」

秋津洲が後ろに転がって行ったが気にしていられない

「上部、側面、射界に入り次第牽制射撃!!」

〈了解!!〉

「ぶん回すぞ!!捕まっている!!」

ワザと急上昇し、減速、そのまま失速させ、急降下する

「おちっ?!?おちるうううっ?!?」

「ひゃあああああつ?!?」

カモ〜!?

一匹跳ね飛んでいたが無視する

「しつこい、

〈副操縦士〉!!

フラッターは幾つまでやった事があるかつ?!?」

〈普通やりませんよ!!やれたとしても80が良いところです!!〉

「もう一度上昇したらぶちかます!!数えろ!!」

〈んな無茶なっ?!?〉

〈後方敵機更に接近!!数3!!〉

「いくぞおっ!!」

ガタガタ震える計器は既に580km/hを越えている
〈むちやだあっ!!〉

「あばばば。」

「みんなへ、さきだつふこうをおゆるしてください。」

ムチャシスギカモ〜ツ!?

「機銃座!!敵機は着いて来てるな!!」

〈来てます!!〉

「地表面効果を利用する、

対G姿勢!!機銃座員は、奴らの腹を狙え!!

5、4、3、2、1、急上昇!!撃てえっ!!」

〈ぐおおおっ!!海軍魂みせてやらあっ!!〉

〈あたれえええっ!!〉

〈こなくそおおっ!!〉

〈二度と貴方は載せないからなああっ!!〉

操縦桿を引ききり、猛烈な下へのGが掛かる

その動作に慌てて深海棲艦の艦載機は上昇し、

『腹』を見せてしまう

▽

☒こちら航空自衛隊北部防衛区域、

山田分屯基地、遅くなって・・・☒

丁度、そのシーンを見てしまう

☒・・・乗ってるのは誰だ?☒

「・・・け、お前も生きてたか。」

☒おま、エイジかっ!☒

「ああ、とんだ災難だぜ、てか、お前は復隊してたのか。」

☒・・・百里の奴らが来るまでは護衛する、

敵機は他の奴らが墜としたそうだ☒

「そうか、秋津洲!!操縦桿変われ、

流星に無理しすぎた・・・吐いてくる。」

へっ!?!チョッ!?!「いきなり操縦桿離さないで欲しいかもっ!!」

グエエ・・・ヴエツ・・・

「〈副操縦士〉ちゃん、大丈夫かも？」

「〈・・・二度と乗せてやらねえ〉

「同感、帰りは陸路で行って欲しいかも。」

☒秋津洲ちゃん、エイジは？☒

「奥で吐いてる、かも。」

☒そうか、やっぱり『飛べなくなったままか』☒

「っ!?!?どう言う事かもっ!?!」

☒・・・重爆の奇人って調べればわかる、

百里の奴らと交代だ、すまん☒

「ちよつと!?!」

(・・・重爆の奇人って、

4年前に行われた

『深海棲艦への重爆による攻撃作戦』かも)

▽

百里基地の空白と一旦離れ、

無茶をした機体の調整と燃料追加の為、

猪苗代湖へ着水する

「ちよつと調べ物するかも!!」

と、秋津洲は陸へ

俺は、二人の介抱をしようと

「・・・代えの服、貰って来るな？」

▽

「・・・わすれなさい。」

「わすれて!!」

現在土下座中

「忘れさせていただきます。」

何を？言えば俺は去勢手術されてしまうので言えない

「もう、頭を上げて良いわよ。」

軋む身体を起こす

「いだだだ・・・はあ、もう無理も出来ないか。」

「どうして『二式大艇』を操縦できたの？」

あゝ・・・そりゃあ、聞いて来るよね

「ねえ？また飛んで向かうの？」

「・・・止めとくか、連絡とって来る。」

「ちよつと!!」

▽

機内

「どうして質問を遮ったの？」

「だって・・・凄く辛そうな『感じ』がしたの、

アレって、『誰かを失った感じの』そう言う辛さ。」

「っ!?貴女、能力が・・・。」

「わかんない、でも、

アレは、まだ聞く時じゃない、そんな気がするの。」

「そう、わかった、貴女の間を信じましょう、

もし、その傾向が出たら教えてくれるかしら？」

「それは、勿論。」

▽

(グレカール、いい子だな)

「ちよつといいかも？」

「・・・どうした？重爆の奇人に会ったからって、

そうかしこまらなくていいぞ？」

『ただの生き残り』なだけだからな。」

「・・・『初代秋津洲』はどうなったの？」

「そう、か、お前が『二代目・秋津洲』なのか、

まったく、因果応報ってか。」

「教えなさい、元空自、扶桑・瑛士『1等空佐』」

「お前の階級じゃあ教えられん、臨時大尉殿。」

「・・・階級があれば？」

「・・・お前。」

「横須賀鎮守府太平洋管区、

水戦偵航空師団、准将、秋津洲よ、

「これなら答えを聞けるかも？」

「・・・『渡す』だけだ、話せない。」

「そう、頭のあの『髪飾り』だけだ」

「答えになっっていないわ。」

「そつくりだ。」

「なにが？」

「・・・かも、語尾が付かなくなる。」

「それは光栄ね、でも、答えは聞いてないわ。」

「俺に『発言権』は無い、

幕僚長からの『箝口令』だからな。」

「っ?!そう。」

「ここからは『独り言』だ。」

?

「全くアイツと来たらこう言う事も

想定しながら戦ってたのか、敵わねえ訳だよ。」

そのまま、『髪飾り』を押し渡す。

「ちよっ!?!」

「この後は『陸路』に変更になった、

世話になったな、秋津洲『大尉』殿。」

ああ、この会話すら見張られてるのね？

「そう、わかったかも、

大艇ちゃんの整備が終わり次第、こつちも帰るかも、

またの搭乗を待ってるかも！」

「・・・ああ、また、な。」

▽

横須賀鎮守府

秋津洲私室

「これは・・・USBメモリ。」

この部屋じゃ不味い

「三笠、力を貸してくれるかな？カモ。」

嫁と陸路と会合

延々と機構の方々に頭を下げ、

『タンクの底に溜まっている』帳簿外を、

回して貰える事になった

ただ、全国に散らばっている『燃料タンク車』を

集めるには時間が掛かる為、

牽引機関車の手配が済んだ順で送ってくれるとの事

「ふう、後は新たな『燃料溜まり』を探すしかないか。」

「そうね、

昨日の夜中だけど、連絡があつたわ、

『新しい資材溜まり』の発見よ？」

でも、『鋼材・ボーキサイト』のね。」

「それでも良い傾向だ、

引き続き資材溜まりの搜索指示は出してるのか？」

「うん、でも「お休み頂戴!!」って、

ジャーヴィスが言ってたわ。」

「うん？なんでジャーヴィスが？」

交代で遠征に・・・シロツコか。」

「そう、やっぱり、海に出れないみたいで。」

「やっぱりオシオキかしら？」

「・・・いや、グレカーレ？」

今日一杯は休暇の連絡を頼む、

俺達はお土産でも買って行こう。」

「え？いいの？」

「アナタ？家の家計をわかっているのでしょうか？」

「山雲、提督の給料と、単冠湾泊地の運用費は別だぞ？」

税金云々は税理士さんに丸投げだけだよ。」

「そうだったのっ!？」

てつきり何時も見える書類で

単冠湾泊地に関わる物だけだったから・・・。」

「まあ、俺だって買い物ぐらいするからな、

それと、今月から『艦娘バンク』が稼働する、

今まで『報酬』しかなかったが、

『給金』も発生する、

まあ、その分税金云々まためんどいけど、

これからは『日用品』を申請書に書かなくて済む。」

▽

ま、今日は俺のおごりつて言った側から、

まく、女子向けのお店に入りました、

『衣服』の嵐ですわ、

ほんと『多めとブラックカード』持って来てて良かった

「え?」

「お?」

「「あゝっ!?!」」

「アナタ!どうしたのっ!?!」

「提督?なにかあったのっ!?!」

「・・・知り合いだ。」

「にひひ、久しぶりだね?エージ。」

なにを隠そう『婦人チエーン・KITAKAMI』は、

『引退した北上と大井がデザイン兼社長』を務める会社なのだ

「どうしたのさ?艦娘引き連れて?」

「はあ、今は単冠湾泊地の提督やってるんだよ。」

「マジでっ!!あちゃゝ、

引退しなきゃよかったなく、エージの指揮で戦うのは

きつと楽しかっただろうなあゝ。」

「北上さん?どうされ・・・エージさん!?!」

「「ぎんっ!?!」」

「ち、駆逐艦が居たのね。」

「あはは、変わらないで何よりだ、大井。」

「早々変われ無いわよ、まだ引退して4年なんだから、

それにさつき聞こえたけど、

単冠湾泊地の提督ですって?」

「ああ、嫁の山雲と、マエストラーレ級のグレカーレだ。」

二人「よめっ!?!」

「・・・おう、悪いか? 山雲とは付き合いも長いし、

それに、な?」

「ええ、そうね／＼／」

「はあ、イチャイチャするなら他所でやってよ、

北上さん、大井さん、初めまして、

マエストラーレ級駆逐艦、グレカーレです。」

「お、駆逐艦の癖にしっかりしてんじゃん、

アタシが北上さん・・・北上だよ。」

「大井よ? 礼儀のなってる子なら安心ね。」

(北上さまだよ? って、やっぱり言えないんだな)

「しかし、品ぞろえがどんどん増えるな、

家も御贔屓にして貰わなきゃな。」

「ちよ、それ逆じゃなくい?」

よし、お姉さんが二人の服を選んであげよう。」

「ちよ。」

「えつと?」

「あ、そうなった北上は止められないから、

大人しく選ばれてろ、センスはマジで凄いから。」

二人「助けて〜っ!?!」

「むり〜。」

▽

バックヤード

「やっぱり、言わないんだな。」

「ええ、『北上さまだよ』は、もう。」

「俺が墜つこちなければ。」

「それは何度も言ったでしょう?」

『貴方のせいじゃない』って。」

「・・・だが、俺の重爆が墜落した先に、
『艦娘』が居た、
それが起因でその艦娘は『轟沈』した、
それが事実で真実だ。」

「『村雨』の墓は？」

「毎日、手入れしてるわ。」

「ここに？」

「ええ、着いて来て。」

▽

「・・・『村雨』」

「ここに、毎日、毎日、

『戦没時間』に合わせてね、

少しでも北上さんを支えてあげたいけど、

この手入れだけはやらせてくれないの。」

「そう、だろうな。」

首に掛けている御守りから、『髪留め』を取り出す

「それっ!？」

「・・・北上を庇った村雨のだ、

砲弾の直撃で飛んで来た、返すべきだろう。」

大井っち？誰がここに人を入れて良いって？

「北上さんっ!？」

「・・・すまん、俺だ。」

「・・・っ、その髪留め。」

「ああ、む『あんたにその名前は言わせない!!』」

「言わせない、言う資格も無いっ!!」

出てっ!!

ああ、服の代金は別にいいから、

アレは私からの『お礼』だから。」

「・・・ありがとう、北上。」

「くそったれ、

『あんたが死んで村雨が生きてればよかったのに』

▽

タタンタタン

リズムよく『気動車』は走る

「・・・はあ。」

(でも、ありがと、村雨、帰ってこれたから)か

「あく・・・重。」

トランクケースごと渡されるとは思っていなかった

「ん・・・んう？もう？えきなのお？」

(沈まれ俺の理性、ダメだ、まだ時期じゃない!!)

山雲のあの声がさらに・・・あゝくっ!!

「提督、単冠湾泊地からです、

『艦娘を保護した』と。」

「なっ!?遠征は止めた筈だろ?」

「それが、『流れ着いた』と。」

嫁と機体と村雨

単冠湾泊地

執務室

「どうだった？」

「・・・ええ、『村雨』だったわ。」

「・・・ツケ、かね。」

「偶然よ、たぶん。」

「しかし、『改二艦装』のまま流れて来た事から、

『どこかで海戦』があつた筈、

タシユケント、近隣での戦闘報告は？」

「ソレが、ないんだ、

昨日は太平洋が低気圧で荒れてたし、

大湊警備府管区でも戦闘は無し、

横須賀鎮守府にも問い合わせたけど、

あつちも戦闘はしてないって。」

「謎だな、意識は？」

「時期戻るだろうと、明石が言ってたわ。」

ちよつ、まだ安静にしてなさいってば!!

「ん？」

扉が開く

「・・・『久しぶり』」

そう言つて主砲を構える

山雲も艦装を展開するが、

丁度対角に位置してたため間に合わない

カチン

「・・・撃てるわけ、無いじゃ無いの。」

「殺されても仕方が無い事を俺はしたと思うぞ? 『村雨』」

「貴方の命は軽く無いのよ?」

それに、『髪留め』返して貰つて無いからね。」

「貴女!! やつていい事と悪い事ぐらいつ!!」

「……『まがい物』いえ、山雲ちゃん、

貴女の考え方も嫌いじゃないわ、でも、私は嫌よ？」

「……訂正しなさい。」

『『まがい物』をかしら？』

「わかってるならっ!!」

「ヨセ、山雲、エイジは争いを望んじやいない。」

「あら、初めましてね？」

「タシユケントだ、村雨とか言ったな。」

「ええ、白露型駆逐艦の『村雨』よ？」

「……『深海棲艦』なのか？」

「あら？バレた？」

「……その冷たい気配、

氷の様に固い覇気、まるで『駆逐棲姫』みたい。」

「そう言う風を感じ取られるのね、『悲しいわ』」

「嘘を言うナ、

お前からは『艦娘』らしきヲ一切感じない、

一体なんなんだっ!!」

『『深海雨雲姫』そう名乗ってるわ。』

「……俺を殺したいのか？」

「アナタっ!？」

「違うわ、

『髪留め』を返して欲しいだけよ。」

「すまん、北上に渡して来た。」

「……よかった、生きてるのね？」

「ああ、ピンピンしてるよ。」

「今でも『北上さま』って言って「ないよ」え？」

「彼女、引退して今は会社の社長だ、

婦人服でな、良いデザインばかりで

買わされまくったよ。」

「ナンデ？」

「まあ、責任感じてたんだろ？」

俺も、つい最近までは離れてたからな。」

「ウソヨ。」

「??いや、事実だ。」

「ダツテ・・・。」

「何時かむらむらに、可愛い服着て貰う為に勉強してんだあ』か？」

「っ!?ドウシテ貴方ガソレヲ知ツテルノヨツ!!」

「俺も聞いていたからな』

あの頃、北上に『艦娘』以外でなにかやりたい事無いかつてな。」

「ウソヨツ!!ダツテ!!私達ダケノ秘密ダツテツ!!」

「ごめん、コイツだけには喋っちゃってたんだ。」

ああ、深海棲艦の姿でも、そんな顔出来るんだな

「キタカミ、サン。」

「それと、ほれ、大井っちも。」

「村雨、久しぶりね。」

「オオイサン。」

『髪留め』は北上が持っている、返して貰え。」

「ほら、これ、むらむらが付けてたヤツだよ。」

「受け取ってやれよ。」

「村雨、受け取って?」

「ねえ?むらむら?黙ってちや怖いよ?」

割れた窓ガラスが『拒絶』を示唆しているのは明白だった

「山雲、戦闘準備。」

「でも。」

「準備だ。」

「・・・はい。」

「総員に次ぐ、現在、はあ、

『深海棲艦の深海雨雲姫』に襲撃を受けている、

全艦娘における『撃滅』を開始する、

総員、第一種戦闘配置、

総員、第一種戦闘配置、
資材は、また貯めよう、みんな、すまない。」

▽

「こちら第三艦隊旗艦、大淀、
シロツコを除く、全艦娘、
戦闘配置、完了致しました。」

第一艦隊

旗艦・『コロラド』

『フレッチャー』

『ジョンストン』

『サミュエル』

第二艦隊

旗艦・『霧島』

『マエストラーレ』

『グレカール』

『リベッチオ』

第三艦隊

旗艦・『大淀』

『パース』

『ジャーヴィス』

『レーベレヒト』

『マックス』

遊撃隊

『蒼龍』

泊地防衛

『山雲』

『タシユケント』

「いいの？」

「……総員、先の連絡通り、

『村雨の姿をした、深海雨雲姫』が逃亡した、

近隣鎮守府には、『村雨』の出撃停止をかけて貰っている、

よって、これから撃滅しに行く時、
本物の『村雨』は居ない、
必ず捕捉し、『撃沈せよ』以上だ、抜錨、行動開始。」

▽

第一艦隊

「お姉、なんだかエージ、怖かったね。」

カタカタカタ

(あ、まだお姉震えてる)

「コロラド？レーダーはどう？」

カタカタカタ

(お前もかい)

▽

第二艦隊

「あわわわ・・・。」

「なんなの、エージって、あんな怖い気配出せるの？」

「うん。」

(あれは覚悟の気配、

たぶん、深海雨雲姫って、ほんとに村雨さんで、

沈めなきゃいけない理由がある)

(ぐーちゃん、エージ泣いてたね)

(リベ、エージ、大丈夫なのかな?)

(わからない、深海雨雲姫が何か知ってるかも)

▽

第三艦隊

「ヤバイヤバイヤバイ。」

(あんな瑛士見た事ない・・・)

深海雨雲姫、一体なにをしたの?)

「ヤダ／＼／チョット、惚れ直したかも。」

3人「はい？」

「気のせいよ。」

3人「い、いや。」

「気のせい、良いわね？」

▽

「偵殺機、発艦始め!!」

〈流石にエセ英語は止めたんだ・・・〉

北上と村雨（むらむら）とエージ

単冠湾泊地

南東沖

（見ラレタクナカッタ・・・）

見られてしまった、

北上さんに『深海棲艦』である所を

ほんとは、エージに髪留めを返して貰うだけで

直ぐに帰るつもりだったのに

なんで？

北上さんに髪留めを渡しちゃうの？

「っ?!艦載機!?!」

（仕方ナイ）

「眠リシ英霊達ヨ、我ヲ護レ。」

浮上する『ロ級・ハ級駆逐艦』数隻

『へ級巡洋艦 elite』2隻 『又級軽空母 elite』1隻

（っ?!オカシイ、もつと呼べる筈）

「私ヲ中心ニ輪形陣、

艦載機ヲ・・・早過ギル、ナンナンヨ、アレ。」

▽

「ヒヤツハー！見つけた見つけた!!

ねえねえねえっ!!

殺つていいっ?!いいよねっ!!」

☒取り巻きは許可する☒

「えく、なんでく?」

☒蒼龍☒

「ひゃい!!」（やば、めっちゃ声怖いつ!!）

☒取り巻きだけだ☒

「はい。」（やだ・・・ちよっと）

☒どうした?☒

「なっ、なんでもない!!」

取り巻きだけ攻撃するね!!」

▽

「ネエ?」

「なあに? タシユケント。」

「いいのか?」

『キスの先払い』されちやったから、ねえ。」

「いなあ／＼／」

「でも、戻って来るって、約束したから。」

「そうだな、夫ヲ信じなくて何が・・・つ、妻／＼／か。」

「ええ、アノ人は約束をたがえない、必ず。」

▽

「こ、こちら、ききりしま、

さ、最大射程圏内です。」(ま、まだ震える)

☒蒼龍と同じく取り巻きを優先、

深海雨雲姫はコロラドに任せる☒

「は、はひっ!!」

☒霧島? どうした? 大丈夫なのか? ☒

「ちよっと代わるわよ。」

☒ん? リベツチオ? 霧島はどうしたんだ? ☒

「・・・乙女の事情よ、深くは聞かないのが

彼女の為にも、貴方の為にもなる。」

☒・・・わかった、牽制射撃しつつ、

最大雷撃距離に到達したら、

一斉雷撃、そのまま状況判断で攻撃を続行せよ☒

「了解、

あと、エージ、貴方、声。」

☒声? ☒

「・・・その、こわい。」

☒・・・すまん☒

▽

「はあ。」

「パスさん？」

「なによ？」

「いえ、溜息を付いてどうされたのかと。」

「なんでもないわよ、」

「ジャーヴィス、魚雷はどう？」

「うくん、どうなんだろう、」

「撃てるし、深海棲艦に効果があるのは解ったけど、
どうにも『じっくりこない』って言うのかしら？」

『改・Mk53・3cm4連装魚雷』

「雷速が早すぎてピーキーなの。」

「でも、『真つすぐ行かない魚雷』よりはいいでしょ。」

「マックス、そうは言っても『扱い辛い』モノって、

「実戦で支障以外になんのメリットも無いわ。」

「私も同意見、扱い辛いっいたらありやしないわ、

「エージも、せめて使い慣れてる方の火力増強版を
用意してくれば良かったのに。」

「つと、レーベさん？どうしたんですか？」

「レーベレヒト？」

「レーベちゃん？」

「どうしたのよ？レーベ？」

「・・・チャッタ

4人「え？」

「・・・チャッタノ

「・・・後でエージを説教ね。」

「パスうー。」

「・・・流石にこれは許せないわ。」

「あはは・・・でもあの怖い声って、

「こー、『ゾクゾク／＼／＼しない？』」

4人「え？」

「しないの？」

「わ、私は怖いだけです。」

「私も、でも嫌いじゃない声だけど。」

「ジャーヴェイス、アナタ、なに言ってるの？」

「パースもまだまだだね？アレは『ご褒美でしょ？』」

4人「え？」

「え？」

▽

「お姉!!しっかりして!!」

ハッ!?「ジョンストンっ!?私は一体……。」

「全くもう、『おねえちゃん』なんだから、

しっかりしてよ?コロラドを元に戻すの手伝って?」

オ、オネエ、チャン?...ブハア!

「ちよっ!?『おねえちゃん』っ!?!」

「とどめを刺してどうすんの、ジョンストン。」

「サム?とどめってなによ?」

お願いだから『おねえちゃん』しっかりしてよ?」

・・・カハア!?

「はあ、コロラド、貴女のそれでも『Big7』なの?

長門達に笑われるわよ?」

「イイワヨ・・・エージの声でビビるBig7なんてただの女ヨ。」

「ちよつとエージ!!」

なんとかしなさいよこの状況!!」

☒・・・すまん☒

▽

(ナンカ様子ガオカシイケド)

「全艦、砲撃開始!」

▽

「撃つて来た、霧島!!マエストラーレ!グレカーレ!

同航戦!!反撃開始!!」

二人「了解!!」

リヨウカイ

「霧島!!我慢しなさい!!」

周りを蹴散らして頂戴!!」

アウ／／／

▽

(大丈夫なのかしら?)

「砲撃戦用意、

目標、深海雨雲姫の周辺深海棲艦!!」

「行くわよ?」

新生パースの力、見せてあげる!!」

「『アレはご褒美』って、

なんでわかんないのかな?」

「それは貴女だけよ。」

ウ／／／

▽

「なんか変だけど、ちゃんと当ててるし、

私も負けてらんないね!!」

彗星隊、ファントムII!!急降下爆撃開始!!」

〈ジェットに負けてられっか!!〉

〈空中分解だけは済んじやねえぞ?ロートル!!〉

〈んだとこらあっ!!〉

〈事実だろうがジジイっ!!〉

〈てめえもジジイだろうが!!〉

〈くそジジイ!!〉

「あんたら、仲いいわねえ。」

▽

(出鱈目ヨ!!コノ威力!!)

瞬く間に僚艦は吹き飛ばされ

モノ言わぬ『物』に変換されていった

「コノオオっ!!」

私だって沈みたくない、嫌、嫌だけど、

『撃つ』以外、逃げ道はなかった

▽

「やばっ!? コロラド!!」

「避けなさい!!」

「コロラド!!」

「ん? ナニカ当たったノ?」

3人「なんで無傷なのっ!」

「流石に機銃座は壊れたわよ。」

3人「理不尽防御力!!」

「兎に角、ダレ? 私に砲撃をクレタのは?」

アレ↓

「へエ、ヤルじゃない、ジャップ。」

▽

「ナツ!? 直撃シテルノヨっ!」

なんて防御力!?

主砲じゃ無理ね、雷撃で!?

『7発の砲弾が直撃』する

▽

「アレ? やっぱり一発外レルノネ、ナンデかしら?」

「つて、あれ大丈夫なのっ!」

「ヤバくない?」

「ラウンド2つて、とこカシラ?」

「エージ!! 深海雨雲姫の形状変化!!」

なんかヤバいよ!!」

▽

(ツ、意識トンダ、デモ沈マナイ!!)

▽

「ナイスファイトネ!!」

「じゃあ、とど☒やるな☒キャウ!」

☒それはコッチでやる良いな?☒

☒コロラド? 聞いているのか?☒

「エージ、ちよつと黙ってて。」

☒え？な「いいから」あ、はい☒

「エージ、声、怖すぎ。」

☒・・・そんなにか☒

▽

「さて、

行けるな？『北上、大井』」

「行けるなって、

有無を言わさず『艀装』を付けて拉致っというて

なに言ってるのさ？」

「そうですね？引退して一度も海に出ていない『人間』に、

『艀娘の艀装』を付けて

『村雨』を助けるのを手伝えですもの、

普通は『拒絶反応』とか出るのよ？わかってるかしら？」

「出る筈がないよ、

お前らが『使っていた艀装』だ、俺が保管してたんだ。」

二人「変態。」

「・・・流石に『パラシュート』で

降りるのは出来ないだろうから低空で飛ぶ、

『爆弾倉』から飛び降りろ。」

「一式陸攻から飛び降りろって、

速度どれだけ差があると思ってるの？

海に叩きつけられて『骨折』じゃすまないんだよ？」

「フロートがある、着水、速度が落ちてきたら降りろ、

降下し始めたんだ、時間は無い。」

「はあ、北上さん行きましょう。」

「ま、一度は『望んだ事だし』

いいよ、『今だけはエージ指揮下艀娘』だ。」

二人「行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

嫁と村雨と今度はお前か!!

どこ? (ト)

わたし

えっと

単冠湾泊地

医務室

「ようやく起きたか『村雨』」

「へ? え? なんで?」

「あ、むらむら!! 起きたんだねっ!!」

「ちよつと北上さん! ここは医務室ですよ!」

なに? 一体何が起きてるの?」

「・・・まずは、村雨、お帰り。」

「えっと、た、ただいま、で、いいのかしら?」

事の顛末を聞くと、

変化した後、

『北上さん大井さん』の魚雷でボコボコにされ、

オマケに『一式陸攻』が頭上に『直撃』

それに搭載されていた『改・応急修理要員女神』で、

私は『艦娘』として復活したそうだ

「トラウマと強烈な切っ掛けが

深海棲艦から艦娘に戻るらしいと、

『ラノベ』のヒントを頼りにやったと。」

「おう、結果良ければすべてよしだ。」

いや人・・・艦娘だけど、

頭に一式陸攻ぶつけるとか、

どう言う思考をこの人はしているのだろう

「ほら、むらむらの髪留め、ちゃんとつけてね?」

「北上、ちよつといいか?」

髪留めを奪い取る

「ちよ。」

「動くなよ?」

村雨に付けて行く

「うん、やっぱりお前は可愛いよ、村雨。」

「村雨?」

「むらむら?」

「村雨さん?」

「・・・事情があれど、

艦娘を泣かせるなんて、瑛士?ちよつと来なさい。」

「山雲?!

おま、知ってるなら少し「少し?」

「確かに嬉しい涙でしようけど、

『泣かせた事実』は覆らないわ。」

「ソウダナ、

幾人かの艦娘も『乙女の事情』で、

恥ずかしい思いをシタんだ、

お説教するのは当たり前ダロ?」

「タシユケントっ!」

「へエ?それは詳しく聞きたいわねえ?」

「村雨までっ!」

「あ、北上さまは、パス。」

「私もです、北上さん。」

▽

暫し待たれよ・・・

▽

執務室

「・・・貴方、なにをしたの?」

「あ、三笠元帥、どうも。」顔パンマン

「あら?三笠、どうしたの?」

「山雲、彼、なにをしたの?」

「『乙女の事情』よ。」

「アア、『乙女の事情』だ。」

「・・・珍しいわね、

『貴方が怒る』なんて、結構良い声だから、私も聞きたかったけど。」

二人「え?。」

「え?あの『恐怖ボイス』は、『ご褒美』じゃ無いの?」

「そうですね!!何度も説明しても、

『ご褒美』じゃ無いって言われるんですよ。」

「あら?ジャーヴィスちゃん、貴女は解るのね?」

「はい!!あの『お腹に響く』心地よさ。」

「そうそう、『そのトーンのまま口説かれた時』なんて、

ほんと、一人の女として、たまらなく興奮したわ!」

「・・・三笠元帥、視線が辛いので、本題を。」

「あらら、

まあ、いずれ意味がわかるでしょ、

本題はコレ、『艦娘・村雨』の処遇よ。」

「・・・どうでした?」

「大本営としては『却下』」

「代表元帥13人の内、7人が反対よ。」

「僅差ですね。」

「ええ、それで今後なんだけど、

『監視』を付けなきゃいけないんだけど、

その役をどこにするかで揉めちゃって、

裁量権丸ごと貴方に投げられたわ。」

「わく、押し付けられたく。」

「それと、二人は『復隊』しないって、

今の距離感が良いそうよ?それと、

『大井が妊娠』してるから余計に、ね。」

全員がばつと振り向く

「俺じゃねえよ、一般男性の普通の会社員の人だ、何度かダブルデートを組んだだけだ。」

「デートっ!?!」

「山雲?北上とだ、それにヤツは『人妻』だぞ?」
全員「はあっ!?!」

「引退して二カ月と経たずに、

『あ、エージ?アタシ結婚して子供できたから』って、
電話で連絡貰ってな、

慌てて『呉の明石』に連絡して健康診断、

マジで妊娠してて『呉の明石』も、

『あ、あり得ないですよお・・・』って、
頭抱えてたなあww

なんでも、『引退して普通は1年は出来無いだろう』って、
今までのデータぶち壊し案件だったそうだぞ?」

「き、北上さん、子供いるんですかっ!?!」

「お、村雨来てたか、

ほれ、一応『単冠湾泊地』の艦娘として認められたから、
これからよろしくな。」

「ちゃんと答えて下さい!!」

「ちゃんとも何も・・・あ、これ写真、

コレが旦那さんとお子さん。」

▽
「さて、

『録音』させて貰ったし、私は帰るわね。」

「ん?泊まって行くんじゃないや無かったのか?」

「馬鹿ね、旦那に癒して貰うのよ?」

「あく、さいですか。」

「え?三笠も結婚してるの?」

「そうよ?言って無かったかしら?」

「言ってナイナ。」

「ほら、コレが旦那♪

あと『子供達』がこっちなね♪」

▽

執務室

「ねえ？」

「まだダメ。」

「違うわよ、三笠の子供達って。」

「ああ、『艦娘』だよ、

今は、横須賀鎮守府の

『大和』『武蔵』『長門』『陸奥』

『比叡』『ウォースパイト』『ネルソン』だよ。」

「なに？そのビッグネームだらけ、

しかもさらっとイギリスの戦艦混ざってるし。」

「まあ、イギリス生まれだからじゃないか？」

「だったら、『金剛』が出てこないとおかしいわよ？」

「さあ？」

『適合』した艦装があげた名前だったからとしか、

言いようがないんだよ。」

「北上さんの方は？」

「あつちは『引退後』の子供だからな、

『一般人』だよ、大井の子供も、一般人だ。」

「そう。」

「山雲、

今つくと『艦娘』のしがらみからは逃げられないんだぞ？」

「・・・わかってるわよ。」

そつと抱きしめ

「今はキスマまでだ。」

「ばっかっ。」

「いつか、な、

もう少し落ち着いてからな？」

「・・・それだと貴方が。」

「はは、大丈夫だ、俺はそんなに信用無いのか？」

「・・・いじわる。」

「大好きだからな。」

「ふん。」

「・・・愛してる、山雲。」

「ふふっ、私もよ？愛してるわ。」

「はあ、昼間っからなにヤツテンダ山雲？」

「たっ!?タシユケントっ!?貴女何時からいたのっ!?」

「人に書類取りにイカセテ、二人きりにナルトカ、

私もヤルからな？」

アウ／／／

「タシユケント。」

「ナンダ？」

GJ!!

「はあ、惚れた手前のナントヤラだっけ？

ま、廊下で聞き耳立ててるヤツらに、

後でオシオキだな。」

「ナンデスツテ？」

▽

オシオキ後

「ソウだ、彼女、挨拶だっけ。」

「彼女？誰だ？」

「・・・牛。」

「なっ!?『雲籠』っ!?」

「きちやった、『美味しいゴハン』があるって聞いて。」

「牛乳ダナ。」

「重いだけ。」

「でも羨ましいよ。」

「私は、貴女が羨ましい。」

「私ガ？」

「『幸せでしょっ?』」

「・・・アア、幸せだ／／／」

「じゃ、早速ゴハンを頂戴？」

「間宮ーっ!!助けてくれっ!!」



間宮食堂

「むむっ!!」

「これは食豪の気配ですね。」

嫁と食豪と雨雲の涙

村雨私室

はあ、あつという間に一週間

この状況に慣れちやつた自分を

たくましく感じるわ

山雲、大淀、霧島、コロラド、蒼龍、明石、間宮さん

そして、目の前で『変身おもちゃ』で遊んでいる

プリンツ・オイゲン

彼女らは『艦これ』の世界から『自力建造』で

この世界に来たと言う

「ねえ？オイゲンさん？」

それって、『使い捨て』なんででしょう？

資材、なくならないかしら？」

そう、確か各資材を2500使うのよね？

「コレはちゃんとした『おもちゃ』ですよ？」

「え？」

以外だ、てか、その背格好で

『仮○ラ○ダー』ごっこは、かなり複雑に思う

「むらむらもやる？」

「遠慮するし、ナチュラルにむらむら呼びしないで頂戴？」

北上さんならいざ知らず、

海外の艦娘で、なおかつスカートが短すぎる彼女は

体型と精神年齢が合っていない

「も〜、楽しいのにな〜。」

エージ曰く『オイゲンは捕まえられる。』との事

先の私が復活した一件に関わっておらず、

『むらむらって言うの？私と同じ胸ね♪』

いきなりセクハラされた

「それは貴女だけでしょ？」

「そうとも言う。」

「はあ、気が付くと目の前に居たり、食堂に居たりと
「ほら、スカート直しなさい。」

短すぎるスカートは守るべき物を護れていない

「ありがと、むらむら♪」

「村雨よ、

ねえ？オイゲンはいつもなにしてるの？」

流星に資材が敵しいのか、

既に遠征のローテーションに入ってる私は、今日は非番だ

「遊んでるよ？」

「ライダーごっこ？」

「ううん、別なこと。」

「・・・どんな事？」

「まずはねく、

『えくすかりばー』で、深海棲艦を殴り殺して。」

まって？いきなりおかしな事言ってるんだけどこの子

「次は、『エスカリぼるぐう』で、

深海棲艦を殴り殺して。」

いやいや、やってる事変わってないわよね？

『ツヴァイハンダー』で切り飛ばして。」

なんでそこは普通の武器なのっ!?

『ドールドルヒ』で砲撃して。」

列車砲っ!?

『はうにぶー』でお空のお散歩して。」

は、はうにぶー？なにそれ？

「あー！そうそう！

『ヨルムンガンド』で爆撃もした！」

爆撃機っ!?

「後はねえ、『れーるがん』で狙撃したりもしたよ!!」

・・・白露姉さん、時雨でもいいから、誰か来て

私の常識が崩れ切る前に

▽

間宮食堂

「では。」

「いざ。」

二人「勝負!!」

「あの二人は何をしてるの?」

「サミー、あれは確か『ワンコ蕎麦』って言う奴よ。」

「ワンコ?」

「ああ、『梔子蕎麦』と書くんですよ、

お椀に入れられたお蕎麦を食べると直ぐにお代わりが入れられて、

一瞬の隙をみて、蓋をしないと、延々と食べ続けるの。」

「霧島さん、やった事あるんですか?」

「やらないわよ、

お残しすれば『間宮さんのオシオキ』ですから。」

二人「あく。」

「所で。パースさんに、サミュエルさんはお昼ですか?」

「そのつもりだったんだけど。」

「マミヤが、鬼の様な顔してたからどうしようかと。」

「厨房では千手観音の如く手が動く間宮がいた

「あく・・・そうだ、私の私室に来ますか?」

「お昼ごちそうしますよ?」

「え?霧島料理出来るの?」

「ええ、間宮さん程では無いですけどね。」

「ごちそうになるわ、

リクエスト出来るのかしら?」

「あはは・・・材料があるだけなのでお手柔らかに。」

▽

食堂の『雲龍』VS『コロラド』はまだ終わらない

▽

「あれ?霧島。」

「村雨とオイゲンさん、珍しい組み合わせですね?」

「お昼に行こうと思ってね。」

「ああ、今止めといた方が。」

（にょにょ）にょ

「うわ。」

「ワンコ蕎麦ですか、

オイゲンはゆっくり食べたいですね。」

「貴女達も一緒にどうかしら？」

「これから私室でお昼を作るのよ。」

「その方がよさそうね。」

「いきます!!」

「それじゃ、行きましょ。」

▽

霧島私室

「はい、沢庵チャーハンよ？」

「オイゲンはうんと甘くしたからね？」

「わくいつ!!いただきま〜すっ!!」

「頂きます。」

「召し上がれ。」

「あ、おいし♪」

「ほんとね、タクワンのコリコリ感がたまらないわね！」

「ほ、ほんとね、美味しい。」

「どう、村雨？大分慣れて来たかしら？」

「ええ、貴女の自炊スキルには驚くけど。」

「ちよつと、これでも『女』なんですよ？」

「流石に『自活』程度は出来ないとアレなので。」

「そう、よね。」

「村雨？」

「あのね？艦娘としては知識はあるのよ？」

でも、『自活』とか、金銭感覚、

知らない事だらけなの。」

「貴女、『味覚』は？」

「え？」

「村雨?」

「むらむら?」

「どうして言わなかったの?」

「き、きつと甘い物なら!ほら、

綿飴食べて!ね?ね?」

「そんな・・・。」

「いいのよ、

そもそも、『深海棲艦』から『艦娘』に

戻ったって言っても『まがい物』よ、

ごめんね、オイゲン、『あまい』もわからないの。」

「そんなことない!!」

きつと『眠ってるだけ』!!」

「オイゲン、貴女優しいのね。」

「私、明石さんに相談してくる。」

「私も良くわ、霧島、

村雨を捕まえて連れて行くわよ?」

「オーケー、さあ、逃がさないわよ?」

「ちよ、はなし・・・オイゲン。」

「なおそ?ねえ、

なおしていつしよに味をたのしみたいよ、

むらむらの『ほんとの笑顔』みたいよ、ね?」

ボロボロ泣きながらも両手を離さない

「・・・ずるいわよ、その顔。」

▽

「・・・わかりません、

もしかしたら『病気』では無いのかもしれませんが。」

「え?」

「あかし!!なんで治せないのっ!!」

『病気』じゃないんですよ、

「これは・・・」呪いね「雲龍さんっ!?!」

「うんりゆう?なおせる?なおせるの?」

むらむら、あじ、ちゃんとわかるようになるの?」

「ほら、泣かないの、」

村雨、貴女は『深海棲艦』の時、

『誰かに会ったかしら?』」

「え?」

「もしかしたらそれが原因かもしれない。」

「でも、ほとんど覚えてないのよ。」

「・・・まあ、その程度些細な問題ね。」

「ええっ!?!」

「私の『能力』の一つは、

『陰陽師』呪いのエキスパートよ。」

って、

なんでキスされて・・・舌っ!?!舌からめてなにすんのっ!?!

「はい、『解呪』完了、

『お腹空いたから』また食堂に行くわ、

オイゲン、もう村雨の『悪いところ』全部治したから、

もう大丈夫よ。」

「ほんとっ!?!うんりゆうっ!!ありがとうっ!!」

・・・オイゲンさん、これは私『明石』に対する当てつけかしら?

「雲龍さん、後学の為に教えて「だめ」ええっ!?!」

「これは、私の能力、明石には無理よ。」

「そんなあ。」

「オイゲン、村雨も連れて来て?一緒にたべよ?」

「うん!!いこ!村雨!!」

▽

「ぬう、むねん。」

「間宮、まだ在庫あるかしら?」

「え?」

「な・・・ナンダツテ?」

「村雨の『味覚』治した記念よ。」

「・・・それなら。」

「はい、村雨さん。」

「・・・はむ。」

「良かったわね、それじゃ、『カツ丼』30人前で。」

全員「は？」

「それと、味噌汁も10リッターで。」

その後、間宮が倒れたと一報を聞き、

エージが、死に物狂いで料理を作った。

「けぷつ、やつと八分目ね。」

それを聞いてエージも倒れたの言うまでもない。

▽

執務室

「・・・喰う母が増エタ。」

「書類・・・いやあく。」

嫁と日常と書類

単冠湾泊地

港湾区

「さて、リユックは持ったな？」

「はい、アナタ。」

「ジャーヴィスも準備万端！」

『「おねえちゃん」ちゃんと起きてて？』

「おね・・・おね」カフツ

「ジョンストン、だから止めを刺さないでっつてば。」

「でも大丈夫なの？」

「そうだよ、ほぼ艦娘が出払うなんて。」

「そうね、

『彼女達の自己責任』よ、私達は『被害者』なんだから。」

「それを言ってる訳じゃないんだけど。」

「そうね、私達は『被害者』

責任は『彼女達』にある。」

「アハハ、慈悲は無い。」

「そうね、無いわ。」

山雲、パース、

イタリア組（シロツコは留守番）

アメリカ組（コロラドはお仕置きの為留守番）

マックス、レーベレヒト（オイゲンは出撃中）

タシケント、ジャーヴィスでお出かけをするのだ。

なんで？いや、お仕置きで気づいて？

「い、いってらっしゃいませ。」

間宮さんチヨイスの『霧島が恥ずかしいと思う服装』で、

霧島以下、

『コロラド』『蒼龍』『明石』『大淀』

『雲龍』

ここからが重要

『ビスマルク』『※イタリア』『ローマ』

『ガンビア・ベイ』『白露（改二）』『時雨（改二）』

『春雨』『五月雨』『山風』『江風（改二）』『涼風』

11人も『来てしまったのだ。』

資材が各『一桁』となり、行動不可となってしまうのだ。

11人分の資材？

ああ、下手に泊地内に置いてくくと『自力建造』されるので、

『大湊警備府』に預かって貰っていた筈だった。

が

大湊警備府からの緊急連絡により自体は一変、

『複数の鎮守府』の建造システムが乗っ取られ、

資材を強奪し、『自力建造』した彼女らは、

『自力』で、ここ単冠湾泊地に着任したのだ。

各鎮守府からの『請求書』を引っ提げて。

当然、いくら寛大な俺でもブチ切れ、

資材5桁まで『自力建造禁止を言い渡した』

当然、資材は『返済』に充てすっからかん

給料は諸経費で消えて行った。

流石に見かねた『三笠』が、

旅館の手配をしてくれ、

先に上げたメンバーは『休養』を言い渡された。

村雨は貧血を起こし絶対安静中

『重い日』ダソウダ・・・

焦ったよ、まさか『修繕ドックで今までは対処してたの事』

明石からの『ダメです、村雨さん、今回は自然治癒以外認めません』

と、珍しく怒った。

村雨は『艦娘』ではあるが、限りなく『人間』に近くなっている為、

そう言う周期を崩すと、『引退後にも引きずる事になる』

と、明石が村雨を『真っ赤』にしながら説教していた。

「まあ、いいお灸を据えられたと思おう。」

「だと良いのだけれど。」

言わないで山雲？

絶対フラグになるから。

▽

単冠湾泊地

執務室

「・・・霧島、終わった？」

「その、まだこれだけあるのよ。」

執務室の隣にある『書庫』に積み重なる大量の『資材申請書』

「閉じて。」

「現実よ、やりましょう。」

「駆逐艦達は？」

「燃料溜まりに往復中。」

「腹が減っては戦はできません、か。」

「江風、貴女が事務仕事出来るのが一番助かってるわ。」

既に燃え尽きた大淀はソファアで（死んだように）仮眠している。

3人ずつに分かれ、

兎に角燃料を優先して回収している。

練度？ああ、ここに来たメンツは全員『カンスト（99Lv）』だ、

不思議か？

他は知らんけど、ケツコン済の艦娘って実は少なくって、

『山雲』『扶桑』『山城』『秋雲』『望月』『敷波』

『多摩』『八丈』なんだ、

全員（山雲は除くけど）

『先に行って来なさい』って、後押しされた、

理由を聞く前に『建造ボタン』を押され、聞けなかった

「なんでかねえ？」

嘆きつつも取得して置いた『事務スキル』をフル活用し、

書類を終わらせて行く、

私、江風の能力は

『事務スキル』『夜戦特効』

『稻荷神社氏子』と、変わった物だ、

夜戦は言わずもがな、『夜戦時、火力増強200倍』と、正直、私もエージも呆れ返ってしまった、消費資材割り増し『無し』でだ!!

ただ、日中は極々普通の駆逐艦程度の火力しか出ない。事務スキルは、そのまんま、書類仕事はなんでもござれで、

今はパソコンで書類をどんどん消化中。

本気で取得して良かったと思ったスキルだ、

良くわからんが、建造時、なんか選べるらしく、

エージの側に居れたらいいなって思ってたソレをチョイスしたんだ。

残りのスキルは『副産物』で、建造ドックランダムらしい

あ、この『稻荷神社氏子』って、

良くわからん、一応泊地に

『稻荷神社』を妖精さんに建造して貰ってる途中で、

効果は完成し、『神オロシ』が終わってからじゃないとわからない。

「ふいっと、

霧島、弾薬は終わりだ、そっちの鋼材はどんくらいだ？」

「はやっ、まだ半分以下よ。」

「そうすつと、後はボーキサイトか、先にやっちまうか。」

どこぞのコーディネーターよろしく、

キーボードがドガガガと唸りをあげて行く。

左手で書類訂正箇所を見つけ、

右手でソレを修正し打ち込んで出力していく。

因みに『左利きだ』なんだよ？ギツチヨで悪いか？

「うゝ・・・ん、はっ?!今何時ですかっ?!」

「あ、起きたな？」

弾薬は終わって、私はボーキサイトを進めてる、

鋼材はようやく半分だ、

燃料はまだ遠征連中が帰って来てないからこれからだ。」

「え・・・まだ『2時間』しか経ってないですよっ!？」

「どれだけ早いんですかっ!？」

「アタシはほら、スキルのお陰さ、

じやなかったら一枚で30分は下らないだろうさ。」

「くう、私もソレを選んでいれば……。」

「大淀、『問題ありません』とか言って、

意気揚々と建造したじゃんww

ま、『紙媒体』限定とは言え、

不正を直ぐ見つけられんのはすげえと思うぞ?」

正直、家で書き出した書類は出来るが、

他所の『申請書』とかは、そのままとしか見れないんだよ、

その『改竄部分』とか、『艦娘の移動書類』とかは、

私じゃ見抜けない、その点、大淀の能力……スキルは、

すげ〜助かってる。

「そ、それは／＼／＼」

あ、女のテレ顔はいらん、

エージの『ありがとう』は、マジで効く

おっと、ボーキサイトも終わりだな

「ほれ、鋼材の終わって無いのくれよ、

ちやつちやか片付けて『エージに褒めて貰おうぜ?』」

二人「か、江風が輝いて見える。」

「あ?なんだそりゃ?」

増える艦娘紹介

『江風（改二）』

建造時の特典らしく、改二

『事務スキル』『夜戦特効』『稻荷神社氏子』とトリプル

性格も艦娘江風のままエージに好意を持っている

まあ、本編中にも書いたが、

書類、夜戦、なんでもござれの万能型

料理に関しては、『レンチンアレンジ』なら出来る

ウーマンスーツも着こなし、秘書業務もこなせる

ただ、

日中戦闘に関しては極々普通の駆逐艦程度なので、

夜戦特効が活かせる海域を選ぶと更にお得になる子

『白露（改二）』

同じく建造時特典

『お姉ちゃん』『一撃必殺』『良母』と、またトリプル持ち

『お姉ちゃん』は、白露型の一番艦と言う事かと思っただ、

どうやら『駆逐艦におけるお姉ちゃん』らしく、

滅茶苦茶頼りになる姉ポジションを差しているそうで、

『諦めない』『模範のお姉ちゃん』『世話焼き』が、

常時発動状態で、

元の白露からは想像できない程、THE『姉』である

尚、『いっちばくん!!』は、滅多に言わなくなってしまった。

『一撃必殺』は、日中戦闘夜戦に関わらず、

ここだ!と、見極めると、『深海棲艦』を一撃必殺で仕留める

超資材に優しいスキルである。

魚雷一本でタフ過ぎる『レ級elite』『名持ちの深海棲艦』を除

くが、

夕級だろうが、ヲ級だろうが、護衛要塞すら、一撃で仕留める。

名持ちは2〜4回当てれば墜とせるらしい

まだ遭遇していないので未検証

『良母』

これは、俗に言う『母性』？なのかわからないが、海防艦達が着任する際、『お母さん』と言われて発覚するので、まだ未知数なスキルである

『時雨（改二）』

ま、察しろ

『ヤンデレ』『呪い特効』『一撃必殺』と、一部白露と被っている『ヤンデレ』そのままであり、解説出来ない

ソレを解除するには、『最低5時間』は構ってあげないと、『物理的に刺される』

と言っても、その状況にはなり辛く、

基本エージの側に居るようになる為、そこまでは酷くないただ、エージを批判する内容を口にした瞬間

『鉈』が飛んで来るのでそこだけは注意

艦装を装着していなくても42000馬力を叩き出せるので、捕まえられたら最後、『圧殺』される

『呪い特効』

これは『条件を整えれば、相手にデバフ効果を付けられる』速度低下、火力低下、判断力低下等々、

今の所、深海棲艦に対して使用されている。

ヤンデレとセットスキルで、建造ドックランダム之恩恵

対人に関しては『圧殺』が主になる為、『まだ』使われていない

『春雨』

この子は元々『艦これ』時代でも遅めの着任だった為、

この子だけ、98Lv、充分強いのだが・・・

『一撃必殺』『撲殺』『構って？お兄ちゃん!!』のトリプル

二つ目の『撲殺』は、手持ちの飯盒ではなく、

『撲殺』である、つまり、『拳』で相手を殴り殺すスキルである

戦艦だろうが、『名前持ちの深海棲艦』だろうが、

捕まったら最後、沈むまで殴られ続ける。

『構って？お兄ちゃん!!』の複合スキルで

『撲殺』が付与されている

従って、『お兄ちゃんⅡエージ』で、

構ってあげれば『どんな相手だろうと撲殺する』

『俺が構って上げられ無いのは、

悪い深海棲艦のせいだからな』と言われ、

目に付く深海棲艦を片っ端から『撲殺』しており、

『お兄ちゃんに構って貰いたいのにくっ!!』と、

ハイライトオフで殴り続けている。

『五月雨』

本来の『初期艦』であり、

『艦これ』時代、2-4まで最前線で戦い続けた武勲艦娘

山雲がその後着任し、遠征メインに変わった為、

ケツコンはしていない。

『正確無慈悲』『水神氏子』の二つ持ち

『正確無慈悲』は、相手が嫌がる個所への寸分たがわぬ攻撃、

大破状態の深海棲艦を『確実に仕留める』

言わば、『トドメに特化したスキル』

尚、対人に対しては相手の心を『えぐる』言葉を選び

『再起不能』まで貶められる

『水神氏子』に関しては、江風同様、

神社が完成してから出ないとわからない

因みに『ドジっ子』は、デフォルトスキルなので外せない

『涼風』

五月雨が心配だから着いて来た子

『フォロー上手』『起死回生』『水神の加護』のトリプル

『フォロー上手』は、五月雨のドジをカバーし、

戦闘面における正確な援護射撃に効果がみられる。

更に凄いのが、『飛来する砲弾・魚雷・爆弾』を、

『全て撃ち貫ける必中スキルに変化する』

フォローの範疇に収まらないのだが、恩恵らしい

『起死回生』は文字通り

瀕死状態になればなる程、

『相手への起死回生の一撃』を繰り出せるが、

そもそもそこまで『被弾しない』ので、

まだそれが発揮される場面は無い・・・はず。

『水神の加護』は、

『常時・応急修理要員女神』を所持している状態になり、

装備枠を圧迫しない

海上・水面の上では『矢避けの加護』と変化し、

『飛来物』はまず当たらない

陸上では薄まるものの、河川が近ければ

『大人1000人だろうと投げ飛ばせる身体能力』に変化する。

地下水脈でも恩恵があり、

どこでも負け無しに思えるが

『油虫（ゴキブリ）』だけは駄目で、全兵装をぶちまける。

『山風』

ぶっ壊れスキル持ち

『お兄ちゃんの頼みなら神でも殺しちゃう♪』

『お兄ちゃんの為なら何でも手に入れる♪』

『お兄ちゃんの為に深海棲艦ブツコロス♪』

超絶ブラコンになってしまった。

ほんとにヤバイ。

おどおど喋りは変わらないのだが、

スキルは書いてある通りで、マジで『実行』してしまう。

え？書いてある事少ないって？いや、マジでそのまんまなんだよ。

『ビスマルク』

改三相当の改装済

『精鋭ドイツ海軍・空軍・陸軍』

『艦首魚雷は伊達じゃない!!』

『生活能力』

・・・まあ、『でかつぎ』では無い。

『精鋭ドイツ海軍・空軍・陸軍』は、

消費資材が『一度で枯渇する危険スキル』

かつて『ドイツ第三帝国』に所属していた『軍団』を具現化し、深海棲艦艦隊や、泊地級に大打撃を与える。

列車砲や、V1V2噴進弾、ジェット戦闘機等々、

『史実で確認されている兵装』を全力投入する。

尚、100か0しか選択できないので、

ほんとに『ヤバい時以外』使用出来ない死蔵スキルとなる。

『艦首魚雷は伊達じゃない!!』は、

史実に基づく艦首魚雷の事であり、

火力は、例の雷巡と同等の威力を叩き出せる。

しかし、これも資材泣かせのスキルであり、

『火力を上げるには』消費資材が倍化して行く。

二乗では無い

『生活能力』

家事全般、衣・食・住における必須科目をきちんとこなせる。

書いてある通り、炊事洗濯、衣服の修繕も可能。

唯一の弱点は、『油虫（ゴキブリ）』

『イタリア』

本物のパスタを食べたい事と、

ローマが好き過ぎる為着いて来た

『ローマ大好き!!』

『超々距離狙撃』

『セメント地獄』

え？ナニコレスキル持ち

『ローマ大好き!!』は、ローマを好き過ぎる余り、

行動基準がローマを優先で、

ローマに危害・被害をだそうものなら、

『イタリア全軍がフル装備で攻撃してくる』

『超々長距離狙撃』は、ローマ大好き!!の複合スキル

ローマに『一人でも危害』を加えそうな相手を見つけたら、

射程距離をガン無視して、一撃の元に相手を抹殺する。

『射程距離？ローマへの愛でぶち壊す!!』

深海棲艦が哀れにしか思えなくなつて来た。

『セメント地獄』

・・・口がある相手に、

どこからともなく『ホース』を突っ込み、

『セメント』を流し込み、窒息、

または破裂させる全殺し専用スキル

『運悪くローマの近場に来た敵勢力』に使用される。

『ローマ』

イタリア駆逐艦達が心配なのと、

ホントは、イタリアから離れたかった

『打倒フリッツX』

『癒し』

『事務スキル』

『心眼』

初の4つ持ち

『打倒フリッツX』は、アレである。

発動時、

『ハード・ソフトキル』が発動し、

飛来物迎撃100%になる。

積んだ覚えのない『フアランクス（CIWS）』

『スパロー発射基』『パルスレーザー発射基』

『対空用散弾』『対空用気化熱弾頭』をどこからともなく召喚し、

全てを撃ち墜とす。

資材には決してよろしくない『二乗』タイプ

『癒し』

『対イタリア用スキル』だが、

複合効果として、心労を癒せる。

自分に対して暴走する『イタリア』を

標準状態に戻せる唯一のスキル。

駆逐艦達の癒しにも一役買っており、

『シロツコ』の『海嫌い』を徐々に回復傾向に持つて行っている。

『事務スキル』はほぼ江風と同程度だが、

バイリンガルタイプで、

数か国分の言語も読み聞き喋り書き変換可能付

『心眼』は、心労を素早く見抜く事に特化しており、

戦闘面に置いては余り使われない

深海棲艦の基本感情が『帰還本能』と『恨み』しか無い為である。

『名持ち深海棲艦』に対しても使わない

『結構疲れるのよ、アレ』と、その時の精神力に左右される。

ローマ自身は見れないデメリットがあり、

こっさり、エージに癒して貰っているのを、

『イタリア』は気付いていない。

『雲龍』

正に最強の『喰う母』

『陰陽師』『降霊術士』

『無限食欲』『陸上運用機使用』

『陰陽師』は『解呪特化』で、逆は出来ない

燃費は極悪だが、解呪出来ない物は無いとの事

『降霊術士』は、軍神や、鬼神達を自身に降ろし、

その技術や、能力を發揮する。

『2030年』までに死亡している人が全て対象な為、

実質、『ワンマンアーミー』が出来るが、

これも燃費は極悪

『無限食欲』は、上記二つのデメリットスキルで、

本来の雲龍は『超小食』だったのだが、

『無限食欲』に打ち消されてしまった。

『陸上運用機使用』は、

その名の通り『陸上機』を運用出来てしまう。

その為、艦上機と、陸上機を複合して戦闘出来る。

最も資材に優しいスキルに見えるが、

ボーキサイトの消費が段違いに跳ね上がる『強制6乗』となる。

尚、態々キスをし、舌を絡めなくても『解呪』出来た模様
『ガンビア・ベイ』

泣き虫寂しがり屋軽空母

『艦これ』時代、龍驤とペアを組み、

最前線最上武勲艦娘。

『超努力家』『ビビリレーダー』『大泣きソナー』

『砲弾嫌い』『龍ちゃん早く来て!!』

まさかの5個持ち

『超努力家』は、

ベイに関わる事象を努力で覆す事が出来る。

例えば日本語が書けない

『寝ずに練習して、書道の師範代クラスの達筆化』

料理が上手くない

『間宮さん』に弟子入りし、堂々の『二代目を襲名』

など、恩恵しかないスキル。

『ビビリレーダー』は、

ほんの僅かな異変に気付き何処から来るのを言い当てる。

しかも、『イージス艦索敵範囲の1.9倍』もの距離を感じ取れる。

『大泣きソナー』は、

あえてベイを『泣かせなければいけないが』

敵潜水艦型深海棲艦を確実に『捕らえる』もとい、

耳を潰して強制浮上させる『音響兵器』と化した。

尚、響がこの声を聞いても気絶する。

『砲弾嫌い』は、史実における『大和』からの砲弾が、

すっぱ抜けた『トラウマ』から来ていると推察できる。

その為、自身に被害を及ぼす砲弾は、

全力回避で、当たらなくなった。

ビビリレーダーのお陰である。

『龍ちゃん早く来て!!』は、

御守りとして貰った、龍驤のお札を握りしめると、

どこからともなく、『完全ぶつ殺装備』の龍驤艦載機が、

ベイを護る為にすつ飛んで来る。

相手は死ぬ。

着任艦娘

戦艦

『霧島』『コロラド』『イタリア』『ローマ』

忘れてた『ビスマルク』

空母

『蒼龍』『雲龍』『ガンビア・ベイ』

重巡洋艦

『プリンツ・オイゲン』

軽巡洋艦

『パース』『大淀』

駆逐艦

『山雲』『山風』『江風』『白露』『時雨』

『春雨』『五月雨』『涼風』『村雨』

『マエストラーレ』『グレカーレ』『リベツチオ』

『シロツコ』『フレツチャー』『ジョンストン』

『サミュエル』『ジャーヴィス』

『レーベレヒト・マース』『マックス・シユルツ』

『タシユケント』

工作艦『明石』

給糧艦『間宮』

遠征組みと深海棲艦

単冠湾泊地より

やや南東燃料溜まり付近

「はあ、お兄ちゃん。」

「春雨姉さん、流星に今回は私達が悪いのもあるよう。」

「ほっときな、五月雨、

春雨姉さん、ただのブラコンこじらせてるだけだから。」

「それはそれでどうなのよ、涼風。」

〈電探に感アリ、距離、55000〉

「きた、わね。」

「ふええっ!?せつ、戦闘態勢っ!!」

「五月雨、落ち着けて。」

へん?IFFは・・・友軍?どう言うこっちゃ?〈

「いや、そもそも55000(55km)で探知出来る時点でおかしくないかい?」

私たちの装備は、13号電探、

対空もとい、本来は陸上用電探で、『固定運用』前提だったけど、艦艇用にブラッシュアップされた物で、

良くて35000(35km)が良い所な筈なんだけどな。

「みえた。」

(いや、春雨姉さん、あんたの目はどうなってんだよ)

「アレは・・・夕立っ!?なんでこんな所につ!？」

「涼風!!」

「おうさっ!!春雨姉さん!!五月雨!!行くぞっ!!」

▽

「くっ、さすがに無補給はキツイっ・・・ぽい。」

太平洋の深海棲艦達の集積地から強奪した燃料もそろそろ限界
弾薬はもう僅か

「はあ、私も鎮守府から建造したかったな。」

どう言う理由かわからないが、弾かれてしまい、

ハワイに飛ばされてしまった。

「せめてソロモンとかの方が海域知ってるから楽だったのに。」
能力も、資材が無ければ使えない

「吉川艦長、流石にキツイっほいよお。」

心配そうに妖精さんが撫でてくれる

「えへへ、ありがと。」

指先で撫で返す

〈発砲炎!!〉

「全速!!一杯!!」

▽

「夕立っ!!狭叉されてるっ!!」

「涼風!!援護はっ?!」

「まだ射程外だっ、くそっ!!」

▽

「くう、射程外ほいい。」

撃ち返したいけど届かない

「きやうっ!!」

▽
「いたい・・・どこ?被弾はどこ?」

▽

「ゆうだちいいいっ!!」

(は?なんで赤く発光してんだ春雨姉さん?!)

その瞬間、春雨姉さんの姿はブレて、

海面に水柱しか見れなかった

「はやっ!!」

「春雨姉さんっ!!」

▽

そくど・・・だめ、おちる

あはは・・・流石にソロモンの悪夢でも・・・

吉川艦長・・・泣かないで?

こんどは・・・いっしょだ、よっ!

「しっかりなさい!!夕立っ!!」

「ふえ？・・・はる、さめ、ちゃん？」

「よくも私の夕立を。」

（私の？）

「大事な姉妹を。」

「あ、こりやあいけねえ、全員、しがみつけよ？」

髪留めがちぎれ、髪が舞い上がる

「ブッコロス!!」

迫る砲弾を

「オラオラオラオラアツ!!」

『拳』で弾き返す

「・・・はは、これ、げんじつ？」

（拳で撃ち返すなんて・・・夕立でも無理っぽい）

「どうした？それで終わりか？なら、こちらの番だ、

楽に終わらせはしない。」

再び赤く発光し、一瞬で深海棲艦へ距離を詰める

「ひよえく・・・はるちゃん、すごいっぽい。」

「夕立姉さん!!大丈夫ですかっ?!

「さみちゃんに、すずちゃん、どうしてここに？」

「話は後です、涼風!」

「わかってるよ、『もう、範囲内だ』」

降り注ぐ砲弾は全て撃ち墜とされる

「ぽいく・・・すずちゃんも凄いつぽい。」

「へ、あたぼうよ!」

「むう。」

「あはは、さみちゃんも偉い偉い。」

「もう、夕立姉さん!」

「さ、兎に角一報を・・・。」

素早く砲撃し、深海棲艦を引き離す

「てやあああっ!!」

そしてトドメを五月雨が刺す。

「なあっ・・・連携も凄いつぽい。」

二人「えへへ／＼／＼」

「まけて、らんな、いね、って、言いたいけど。」
ぐうぐ

「おなか空き過ぎて力出ないっぽいぐ。」グ

「あ、それならコレ食ってくれ、

梅干し入りの塩つけたっぷりおにぎりだぜ？」

ぱくっ!!

「あぶねえっ?!夕立姉さん!!

あぶねえよっ?!」

ぽいっと、種だけ吐き出す

「・・・うふふ。」

二人「あ。」

「さみちゃん、砲弾少し頂戴？」

「ど、どどどうぞ。」

「ありがとう、すずちゃん、魚雷頂戴？」

「はい!!どうぞおおっ!!」

「ソロモンの悪夢、復活!!」

そして赤く発光しだす

「たっぷりオカエシしてあげるっぽいっ!!」

そして、水柱しか残さない

「・・・ねえ、涼風。」

「五月雨、言うなよ？」

「ガ○ダ○のアレよね？」

「言うなって・・・。」

「ト○ン○ムだよねっ?!アレっ!!」

「だくっ?!言うなああっ!!」

▽

「ちっつ、中々固い。」

(流石に拳が痛くなつて来た・・・こら?)

だれ?私に痛みの概念が在っただなんて言ったの?)

「ぽくくっいっ!!」

「?ちえいさーっ!!」

クの時に折れ曲がる深海棲艦

くじやない、クの方まで折れ曲がった

「夕立姉さん!!」

「春雨!!夕立にも仕返しさせて欲しいっポイ!!」

「了解!!」

「ソロモンの悪夢、白露型駆逐艦4番艦、夕立!!」

「その妹!白露型駆逐艦5番艦、春雨!!」

二人「貴女達にさいっこの悪夢、見せてあげる♪」

▽

一方、白露、時雨、山風

「ふう、二人とも、『初めての海』大丈夫?」

「大丈夫だよ、白露」

「そう言う白露は大丈夫なのかい?」

「そう、だよ、無理、してない?」

「大丈夫、お姉ちゃんちゃんと無理と無茶は区別してるし、

みんなのお姉ちゃんなんだから、

定時連絡、お願いね?

時雨、どう?春雨達に連絡付けるかしら?」

「はい、いま、定時、連絡した、よ?」

(かっこいい、白露お姉ちゃん)

「え?春雨に?わかった繋げるね?」

(くう、なんなんだろう?この余裕たっぷり感は、

それに胸もボクより大きいし・・・)

「え?ちよ?!大変だよ!!」

この先で『夕立』と合流して、

深海棲艦と戦闘中だっつてっ!」

「わかったわ、『単冠湾泊地へ』

遠征中断し、援護に向かう、

二人共、戦闘態勢、最大船速!!

いくわよ!」

二人「はいっ!!」

▽

「ふう、ふう、ちょっと、よくばったっぽい?」

「です、ね、少し、侮ってました。」

「流石に燃料がキツイぜ。」

「っ!!白露姉さんから入電!!間もなく合流するって!!」

少なくとも駆逐艦20隻、

巡洋艦10隻、戦艦6は沈めた筈、でもっ

「流石に、カバー仕切れねえ。」

それでも戦艦4、巡洋艦6、駆逐艦8がまだ追撃してくる

特に弾が少ししかねえ、

魚雷はもう無いし、機銃弾はあってもあまり効果はねえ

「つんだか、コレ。」

被弾はしてない、でも、夕立姉さんとはとっくに限界だろうに、

まだ闘志は消えてない

春雨姉さんもバテ気味で、息も荒い

五月雨は・・・まあ、まだいけるな、

スタミナはなんかある見たいだし

「っ!!まずっ!!」

迎撃しようにも、遂に弾切れ

『幾つかが防げない』

「避けてくれ!!夕立姉さんっ!!」

「ぽいっ!?!・・・あらら、身体が。」

その場で膝から崩れ落ちる

二人「夕立姉さんっ!?!」

「くそおっ!!」

振り向こうにも、私も膝をつく

(燃料切れっ!?)

「妹達に何してるのよ。」

私達を飛び越え、砲弾を蹴り飛ばす姿

「遅くなっごめんね、

「まあ、

傷つけた妹達の落とし前はつけなきやね？」

砲弾の嵐に包まれる

晴れた水柱には、姿はなかった

沈めた、さあ次に

「ドコを見てるの？」

淡い緑の粒子を纏う艦娘なんて聞いた事無い

「ほらっ？」

心なしか身体重い

「次。」

駄目だ、止められない

「見せられないもん。」

なにを

「こんなバトルジャンキーなお姉ちゃんなんて。」

は

「さあ、一撃必殺、その意味を」

味合わせてあげる

膨大な緑の粒子が爆発的に広がっていく

「ふう、コレ、結構疲れるのよ？」

再び彼女に何かの『膜』が張られる

「あら？貴女は見えたのね？」

く、くるなあっ!!

「今度は、艦娘になって会いましょう？」

わたしのキオクハココデトギレタ

「全くもう、

髪が乱れちゃうわね、

村雨にすいて貰おうかしら。」

頬に僅かな切り傷以外被弾無し

「おっと、この子達は収納っと。」

手の平に粒子は集まり、ビー玉に変化する

「置いてくと、海を汚しちゃうものね。」

「コレを使いこなせる貴女はなんなんですか?」

「あら?知らないの?」

「私はみんなのお姉ちゃんなのよ?」

「怖いです、その淡緑の瞳は・・・」

「あら、戻して無かったわね。」

姉は戻る

姉妹達の為に

一人で戦う方が被害を少なく出来る

この力はそう言う力

あえて選んだ力

「さ、エージにいちばん褒めて貰わなきゃ♪」

嫁と留守番組と遠征組み

旅館

「・・・ここ、かあ。」

「貴方?どうしたの?」

「よ、よく来たな。」

悪友

「三笠のヤツ、どうやって調べやがったんだ。」

「知り合い?」

「お、キミが『エージの嫁ちゃん』か、

んで、その後ろの子達は『娘達ってか?』」

「おま、そう言う事言うなよ。」

「んだよ?違うのか?」

もしかして『現地妻』の子達ってか?

いや〜お前もやる事やってんな〜。」

「マックス、ダメだからな?」

USPコンパクトにナイフとライトを下部に付けた

二丁持ちがマックスの愛銃であり、ちゃんと『許可持ち』である。

「お、おう、止めてくれて助かった。」

「からかうには限度って物があるわ。」

「すまん、すまん、

嬢ちゃん達は『艦娘』だろ?家はそう言うところの御用達なんだよ、

戦地よりはリラックス出来るのは保障するぜ?」

「はあ、お前も『適正』が?」

「いんや、ない。」

全員「ないんだ。」

「おう、ま、この子はそう言うの抜きで

俺の奥さんだ。」

「こ?」

「あ、ここにいらしたのね?しれ・・・貴方。」

「・・・まあ、お前の押しっ子だったな、『春風』」

「あら？艦娘をご存知で？」

「ほれ、コイツが『単冠湾泊地』に着任したアイツだよ。」

「あら、わたくし、

このしれ……

『大谷田（おおやた）・新造（しんぞう）』の妻、

『大谷田・春恵（はるえ）』です、

ようこそ、『大谷田旅館へ』

「っ?!……こちらこそ、3日間ですが、宜しくお願い致します。」

▽

「貴方、あの『春風』は。」

「引退か、『そう言う所に居た』んだろうな。」

顔に大きな傷跡で左目が塞がっていた。

「でも。」

「ああ。」

何よりも大きなお腹が物語っていた。

「羨ましい。」

「すまん。」

「ねえ、温泉って、どれがおススメなの？」

「ん？まあ、肌荒れ系は、

これで、冷え性とかはコッチだな。」

パンフレットに書かれている通りに指さす。

「へえ、マエストラーレ、リベ！先に温泉入りましょう？」

「いいわね！行きましょ？」

「……後でいいわ、少し休みたいし。」

「そう、みんな？温泉先に入りたい？」

複数が答え、一部はリベと同じように後でとなった。

▽

「山雲、毛布そつちも頼む。」

「ええ、わかったわ。」

まるで電池が切れたように、

リベツチ才は俺の膝を枕に眠ってしまった。

それにつられるように、

ジャーヴィス、タシユケント、マックスも眠っている。

「痺れない?」

「暫くは、な、それにしてもリベツチオ、

『不眠症』は治って無いのか。」

「そうね、明石も調べてるけど、

『心因性ストレス』としかわからない、

でも、貴方の膝枕でなら眠れる、

他所の『リベツチオ』とあまりに違う個性、

真面目で判断力も早い、なにより、

『相手の観察能力』に長けている。」

「そこなんだよなあ、

恐らく『能力』なんだろうが、

ここまで支障が出るのは不味い、

そうさせないようにしようにも、

『遠征』に出て貰わないと厳しいからなあ。」

コンコンコン

「はいよ?」

「よ、エージ。」

「なんだよ、家族水入らず「その子、何抱えてんだ?」

「・・・不眠症だ。」

「どうして?」

「ああ、俺は元医者だ、モグリだったけどな。」

「それ、犯罪よ?」

「その子、『父親』を求めてるんじゃないかねえのか?」

「『父親』・・・なぜそうなる?」

「まあ、感だ、

その顔良く見ろ、顔面のほころび具合、

しっかり握る服の裾、なにより、

『身体を丸めて眠る』これだけ条件がそろってりやなあな。」

「どうして。」

『そう言う』泊地だったんだろ？三笠から聞いた。」

「アイツ……。」

「その白髪の子が一番辛かった筈だ、

歩き方に微妙な癖がついている、

そつちの金髪子も左手に違和感を抱いてる筈だ、

そして、『起きてるんだろ？嬢ちゃん』」

「……どうして？」

「マックス。」

「寝息の呼吸と起きてる時の呼吸は違うからな、

それをマスターしないと、『狸寝入りは成立しないぞ？』

それに、『視力』が『落ちているんだろ？』」

「え……マックス？」

「どうなんだ？マックス？」

「治療しろ、たぶん、入渠風呂とか、『バケツ』じゃ治らない。」

「貴方に何がわかるのっ!!」

「ほれ、こうして飛び掛かれても、

『簡単に捕まえられる』」

「っ!？」

「それと、内蔵のどっかかちやんと見なきやわからんが、

『機能不全』を起こしかけてるだろう？

それに『味覚』もだ。」

「なあっ!？」

「……新造、頼めるか？家の子達。」

「三笠がここに送った時点で感づけよ？

『みんな障害』を抱えている。」

「みんな、か。」

「え？」

「山雲の嬢ちゃんもだよ、

無意識に『お腹を押さえている』それも合図だ。」

「……うそ。」

「やっば、そうだったか。」

「やれるだけやってやる、

その後はこの子達の『決断』だ、

風呂場の子達は『春恵』が診ている、

そこまでは酷くないからな。」

「俺の落ち度だ、すまない。」

エージよう、みんな、ボロボロなんだぞ？

自分から言うの待ってたら手遅れになるかな？

▽

単冠湾泊地

執務室

「あ、そうだ、

霧島？戦艦組は？」

「え？ああ、『畑仕事』を任せただけど、遅いわね。」

「ほれ、書類は俺がやっちゃうから、

『霧島の姉御』は、見てきちやえよ。」

「やめて頂戴、姉御なんて資格は無いわよ。」

「で、だ、

大淀？なんでお前さんから上がる書類の方が

『訂正箇所』が多いのかな？

「この江風さんに解るように説明して貰えるかな？」

「あ、あの、ですね。」

「ん？この『事務スキル』を騙せると？」

「この修正部分にあとココだ、

『何回書き間違えたんだ？』ん？」

「はあ、やっと終わった、

キシシマ、畑の手入れの確認作業お願い、

・・・大淀、あんたココも間違えてない？」

「へっ!?ローマさんっ!？」

「お、ローマも確か『事務スキル』持ってたよな？」

「ええ、

・・・()も、()も、

貴女、『ちやんと現代語』を習得して来たの？

ここは旧書体だし、漢字にして貰わなきゃいけない所は

『平仮名』だし、江風、これは『お説教』よね？」

「おう、コレは不味いわ、

『間宮さんコース』かねえ。」

そこには、綺麗な土下座を決める大淀が居た

▽

工廠

「ふう、なんとか形になって来ましたね、

ベイさん、ほんとに凄いですね！」

「そっ!? ソンナコトナイデスよ!!」

「羨ましい。」

「・・・ドコ見てるンデスカ。」

「だって!! 貴女軽空母でしょうっ!?」

なのにこの『胸』!!

あれなのっ!?

アメリカンだから?! アメリカ艦だからなのっ!?」

「・・・3点デース。」

「しかも点数低っ!?」

「っ!? 明石サン!! 緊急修理の準備ヲ!!」

「ちよっ!? どうしたのよ?」

「タブン、遠征艦隊に何かアツタデス!!」

「!?」

〈緊急!! 救援要請!!

白露、時雨、山風、3名を除き大破ス、

入渠ドック準備サレタシ、

尚、『夕立』ト合流ス同大破ナリ

繰り返してます!! 発信は、白露からです!!

「出マス!!」

全機緊急展開!! 遠征艦隊ノ直掩に回りマス!!」

《あいよ!! 野郎ども!! 聞いての通りだ!!》

《日頃の訓練の成果を見せつけてやろうぜ!!》

▽

執務室

「ベイちゃん、凄い。」

「ん？コロラドとイタリアは？」

「ああ、その『炬燵』に埋もれてるわよ？」

「フオウ。」

「ローマ！貴女も暖まりましたようよ!!」

「炬燵、やっぱしまうか。」

「ええ、それは賛成ね。」

「エージが気を効かしてくれて『私物』を使わせて貰ってるけど。」

二人「だめよっ!!」

4人「いや、救援要請出てるだから行けよ。」

▽

「夕立、大丈夫？」

「えっ、と、白露なんだよね？」

「そうよ？」

（その力、夕立が欲しかったヤツっぽい）

（ダメよ、これはお姉ちゃんが使うから）

（ぶっ）

（それに貴女には貴女だけの力があるでしょう？）

（そうだけど、ソレも使いたいっばい!!）

（結構疲れるのよ？資材も）

（どれくらい？）

ゴニョゴニョ…

「え、遠慮しとく。」

「よろしい。」

「思ったり元気そうだね、夕立。」

「しぐしぐに言われるとなんだか納得いかない。」

「それはドウイウ事ダイ夕立？」

「なにやってんだよ、時雨、夕立姉ちゃん、

「怪我酷いんだから大人しくしてくれよな?」

「それは涼風も同じっぽい。」

「たはは、面目ねえな、でも、まだ航行出来る。」

「ネエ? ナンデ 『夕立をお姉ちゃん』 呼びナノニ、

僕ハ呼び捨てナノカナ? カナ?」

「みんなっ!? 電探に感!!」

「ちっ、

夕立は春雨と五月雨に、

涼風は山風と時雨で牽引して貰って!!

私が殿で対空戦闘用意!!」

「白露!!」

「時雨!! 言う事聞きなさい!!

貴女は涼風を抱えながら対空戦闘するのよ!!

春雨!! しっかりなさい!!

主砲構えて!!」

兎に角初撃をつ!?

「うわ、マズ。」

春雨は不味い、虚ろなまま

しぐしぐは、だめ、離れてる

「アハハ…、

吉川艦長・・・また会える、かな。」

「あれ? 来ない?」

《ガンビア・ベイ一番機現着!!

ファイヤ!! ファイヤ!!》

F4F (FM-2) からばら撒かれる機銃掃射は

深海棲艦の爆撃機をハチの巣に変えて行く

「べ、米軍機っ!?!」

更に目の前をF4U-1Dが駆け抜けていく

《オラオラ!! お前らの相手は俺達だぜ!!》

F6F-5が更に被って行く

☒コチラ、ガンビア・ベイデス!!

救援要請受諾サレマシタ!!☒

「が、ガンビア・ベイっ!?

米軍が?なんで?どうなってるっポイっ!?

☒こちらコロラド、

夕立ちちゃん、私達ヨ!!☒

「コロラドっ!?!って事は、

『泣き虫ベイちゃんなのっ!?!』

ベ〜イ!?!ウワ〜ン!?!ユウチャンノバカ〜!!

「うるさっ!?!あんなに離れてるのに、

こんなに聞こえるものなのっ!?!」

「はっ!?!今の声は『泣き虫ベイちゃんの声』?」

「これで起きる春雨も凶太いっぽい。」

そして、周りに浮かび出す深海棲艦の潜水艦型が数隻

「うわ〜お、音響兵器、ベイちゃん。」

☒龍ちゃん!!早くきてえ〜っ!!☒

うし、ほないこか

嫁と泊地と現実

旅館

治療専用ルーム

「新造、おま、この設備は。」

「黙ってる、

風呂場組はリハビリと食生活改善で何とかなる、

『春恵』も医者だ、

まあ、来月予定なんだけど、四の五の言っただらねん。」

「おいおい、医者として駄目だろ。」

「安心しろ、そろそろ。」

「遅くなりましたっ!! 『呉の明石』現着です、

新造さん、直ぐ始めましょう・・・って、

エージさんっ!?!」

「あ、明石、じゃあ。」

「私も居るわよ、エージ君。」

「み、三笠。」

「・・・山雲ちゃん、貴女は私とこっちに着て頂戴。」

「で、でも。」

「いいから来なさい、エージは

リベツチオと一緒にマックスの付き添い、

いいわね?。」

▽

「ねえ、三笠、どうして?。」

「・・・貴女、いずれは引退するのよね?。」

「ええ。」

「・・・ちゃんとアレは毎月来ているのかしら?。」

「・・・ま、まだ半月よ?こ、これからじゃないかしら?。」

「『あの声』で反応が無かった、

つまりは『その可能性』があるのよ。」

「か、可能性って、ちゃんとアレが来れば大丈夫なのよねっ!!」

「・・・幾人かそう言う『艦娘』も居るのよ、

だから、精密検査が必要なの。」

「・・・いや、嫌よ!!」

「手遅れになったらそれこそ!!」

「なんで？私は、エージの為に・・・」

エージの為にこの世界にきてエージの為に・・・に。」

「酷な事を言っているのは解るわ、

でも、貴女の為に、先ずは検査して頂戴、エージの為に。」

「私だって・・・ほしいのに。」

「新造君が今してる治療はね？」

『艦娘と人間』の狭間に居る子を『戻して』あげるの。」

「え？」

「新造君は、

『提督の適正』は無いの、でも、

『孤高の外科医』と言う、スキルを持っているの。」

「外科医。」

「あの子、『春風』は、『そう言う扱い』をされてきた。」

「あの怪我も。」

「ええ、

でも、ちゃんと子供がお腹に居るわ、

コレは、『孤高の外科医』のお陰で『人間』になれたからなの。」

「『人間』に・・・まって？春風はまさかっ!?!」

「元、横須賀鎮守府所属、私の指揮下の子よ、

遠征中に攫われて、ね、

見つけてくれたのが新造君なの。」

「・・・艦娘として、生きてたの？」

「・・・彼だけだった、

今でも顔の傷を無くすために努力を続けてるのよ。」

「効かなかった、のね？」

「ええ、入渠ドックも、バケツも、

『人間の医者』もさじを投げたの、

彼だけ、諦めなかった、だから『今』があるの。」

「・・・わかったわ、でも。」

「ええ、エージ君には黙っておくわ。」

「ねえ、私、ちゃんと出来るよね？三笠？」

「・・・貴女ならきつと。」

▽

ぼくつとする

あれ？わたし、またねちやっただ？

だれだろ？抱えてくれてる

「ん・・・へ？エージ？」

「お、起きたか、リベツチオ。」

「え？ちよっ?!」

「動くな動くな、ま、甘んじて抱えられてろ。」

(ちよっと!?!?どういう状況?!?)

「すまん・・・はは、謝ってばっかだな、俺。」

「エージ？」

「・・・俺でいいのか？」

「え？」

「・・・俺の『娘』になつてくれるのか？」

「あれこれ足りて無いし、

察する事も得意じゃない、

ついつい、言い出して貰う方が良いつて、考えちまう。」

「こんな情けない俺でいいなら。」

「『娘』になつてくれるか？」

「・・・やだ。」

「どうして？」

「だって、みんなの提督なんだよ？」

「それを抜きにしたら？」

「リベツチオ？」

「やだ。」

「なんで？」

「やだ。」

「教えて？」

「やくだ。」

「じゃあ、俺に何をして貰いたい？」

「なにもしなくていい。」

「それじゃ困る。」

「いいの。」

「良くないから聞いているんだ。」

「いいの。」

「リベツチオ。」

「やあ〜だあ。」

「リベ？」

「り〜べ？」

「なあ？』お父さん困っちゃうよ？』」

「り〜べ？」

「・・・パードレ。」

「パードレ？」

「イタリア語。」

「イタリア語か。」

「パパ、って意味。」

「そか。」

「パパ。」

「はいよ、パパはここに居るよ？」

まあ、良かった、のかな、俺で。

泣き止むまで撫でてあげた

▽

「有無を言わず『艦娘』の腹を搔つ捌くなんて、酷い人。」

「いや、もう喋れるお前さんがすげえよ。」

「新造、でしたね？」

「おう、マックスの嬢ちゃん。」

「『ダメなの？』」

「・・・つええな、お前さん。」

「違うわ、執拗にお腹を蹴られたから、何となく、ね。」

「・・・『残してはある』ただ、機能するかは、わからない。」

「・・・そう。」

「エージとは？」

「本命の山雲がまだなのよ？出来ないわ。」

「・・・あっちが深刻だからな、

言っちゃえば、『春恵』も、4回目なんだ。」

「・・・そう。」

「今度こそ、今度こそ、って、

助けられなかった『子供達』の為に、

今度こそってな、そんな中、お前さん達が、

『担ぎ込まれたようなもんだ』

『春恵』さん、なんて？」

「・・・やっと会えますねって、言ってくれたよ。」

「・・・一人にして下さい、春恵さんに、ついていて下さい。」

「いや、抗生物質の点滴もあるし、

まだ、閉腹してから10分と経って無いんだぞ？」

「大丈夫です、です、から。」

「・・・すまん、明石に代わるな。」

▽

「ふう。」

「大丈夫なの？」

「ちよつと、重くて。」

「・・・さわってみても？」

「少しだけね。」

ぺた

「・・・凄い。」

「そうね、グレカーレちゃんも、

何時か大事な人とケツコンしたら、

経験するの「どうしたのっ!?!」あちら。」

「どうしたっ!!」

「あ、旦那さん!!春恵さんがっ!!」

「春恵!!・・・破水っ!」

「なんでっ!?!来月なんだぞ!?!」

「い、イタタタ・・・。」

「っ!?!冗談じゃない!!諦めるか!!」

「大丈夫」

「え?高校生の嬢ちゃん?」

「治せる、この子は大丈夫」

「え?え?パースさん?」

「大丈夫、ほら、コツチ、大丈夫、

みんな待ってるよ?」

▽

「え?俺がうたた寝してる間に何がどうなってるの?」

「パパ、それは同感。」

春恵さんに抱えられている赤ん坊に、

抗生物質の点滴に追加された血液パックのスタンドを抱えたマツ

クスに

痛めていた筈の左腕を振り回すジャーヴィス、

その周りで赤ん坊を見つめている子達

「説明ぷりーず。」

▽

「そうだ、山雲は?」

「どこかしら?」

「・・・昨日は、三笠の部屋に泊まってる。」

▽

「ここか、

りべ、頼めるか?」

「はい!パパ!」

「いいよ、入って?」

重い

「おい、三笠。」

「……。」

「なにがあった？」

うずくまる山雲

「答えろっ!!何があった!!」

「ば、パパ。」

「……限りなく低いのよ。」

「な、何がだ!!」

「……山雲ちゃん、出来ないかもしれないわ。」

「……新造に。」

「万能じゃねえんだよ。」

「てめえっ!!」

「パパ!!マミーを止めてっ!!」

「なっ!?!」

ココは旅館

裏手は川だ

しかもかなり落差がある

「やめろっ!!山雲っ!!」

ギリギリ捕まえる

「……ナサイ。」

「謝るな。」

「……ンナサイ。」

「謝るんじゃない。」

「ゴメンナサイ。」

「山雲、謝る必要は無い、いいな?」

「……ゴメンナサイ。」

「マミーっ!!」

「……。」

「ねえ!!マミーは誰の為に生きてるのっ!?
パパの為でしょ!!」

「マミー!!私、エージにパパになって貰ったの!!

でも、マミーは!?マミーになれるの、

私、山雲しか思いつかないのっ!!

お願い!!私と、エージパパの、

マミーになってよっ!!

『居なくならないでよ!!マミーっ!!』

▽

「無理だけはしないでね?」

3日間の休養は終わった

「ああ。」

「クソエージ、俺が諦めねえんだ、てめも諦めんな。」

「・・・おう。」

「山雲ちゃん。」

「春恵さん。」

「諦めないで?」

「・・・はい。」

「パーパ、マミー、

帰ろう? 私達のお家に。」

「ああ、そうだな。」

「そう、ね、帰りましょう、

单冠湾泊地へ。」

嫁と娘と艦娘

单冠湾泊地

一軒家

ジリリリリ

「んゝゝゝゝ。」

「まだねるゝ。」

ジリリリリ

「・・・んえ？」

「あ、パーパ、おはよう。」

「おう、おはよう、りべ、

マミー起こしてくれるか？」

「はーい！」

▽

4人「いただきまゝす。」

「アナタ、今日は？」

「そうだな、遠征と、北方海域へ偵察艦隊を組んで、

解放の足掛かりを築こうと思う。」

「遂に、動くのね？」

「ああ、『自力建造』が止まったからな、

辛い思いを教えてしまった。」

「・・・ええ。」

「ほら、時間無いわよ？アナタ。」

「え？マックス、まだ時間。」

「見なさい。」

3人「あ、コレ遅刻する。」

▽

バタバタと仕度し、泊地庁舎へ向かう

「あぶねえ、あぶねえ、

ありがとうな、マックス。」

「ふふん。」

「マミー照れてる〜♪」

「もう、私には?」

頬にキスをする

「もう／＼／」

「マミー!!くねくねしないで急がないと!!」

▽

あれから、泊地庁舎とは別に一軒家を建てた

俺、リベツチオ、山雲、マックスで暮らしている

タシユケント、パースは、まだ同居していない。

やはり、アレが堪えたのか、距離が空いてしまった

奇跡的にタシユケントは問題無く、出来ると結果が出てしまった。

パースは、

やや『ふわっと』した感じになってしまった。

先の『春恵さん』と、『ジャーヴィス』に、

力を使い切ってしまった、まだ、あやふやらしい。

明石曰く、

『艦娘でも、人間でも無いんです、でも、ここに居るんです。』

との事。

▽

執務室

「お、おはようさん。」

「おはよう、『龍驤』、夜勤お疲れ。」

「ほな、これから寝るわ、お休み〜。」

「ああ、ありがとうな。」

そう、『龍驤』が来てから止まったのだ、

その影響なのか、『建造』が出来なくなつた。

この症状は家だけで、他は問題無いそう。

龍驤は、この一連の事を、『自力建造待ちの奴らに見せた』

と、言っていた。

「そうだ、龍驤。」

「ん〜?」

「ベイも連れてってな？」

「はいよ、わかっとるわ。」

ベイは、龍驤をママと呼ぶようになっていた

龍驤はこれを受け入れ、『マイドーター』と、ベイを呼ぶ
こら？胸に固執してないタイプの龍驤なんだぞ？

それに、

『あの海戦の武勲艦なんやろ？』

なら、答えたるのが、日本の空母の務めや！』

ただ、辛そうな目をしていたのは覚えている。

「さてと、偵察艦隊で……。」

「はいよ、コレが仮組さ。」

「助かる、江風。」

江風とローマで、執務室に常駐して貰っている

本来はここに大淀が入る筈なのだが

何を思ったのか『一度、出直して来ます!!』と、

『艦これ』の世界に戻って行った

戻れるんかいっ!!と、思ったが、

『……わかりません。』と、明石もお手上げで、

もしかしたら大淀の隠れた能力だったのではないかと、

結論に至った。

「それじゃ、ローマに引き継ぐな？」

「ああ、ありがとう、江風、

そこのお菓子はあげる。」

「お、マジで？さんきゅ！」

「あ、江風、丁度ね。」

「おう、ローマ、頼んだ。」

「ええ、任せて頂戴。」

白露は一部能力の封印

例の粒子は本当に危険で、

『回収』が出来る白露だから使える事、

『時間経過』で『鋼材』をゴリゴリ消費する

一秒で、100も消費する

代わりに『対深海棲艦用スペツナズナイフ』を搭載
封入ガスは、『過酸化水素』容赦なく深海棲艦を溶かしてしまう
いや、それも十分危険だよな？なんで平気なんだって？

『妖精さん』に言ってくれ

夕立は、

『狂気ソロモンの悪夢』『なんでもぽいぽい!!』

『悪食・深海棲艦』『深海棲艦ブッコロス!!』

『癒しのぱふぱふ』『時雨いじり』

・・・狂気ソロモンの悪夢は、

身体能力向上、反射速度上昇、

相手に『悪夢を見せる』と言う物で、

消費する資材は発動時のみで、任意解除できる優秀な能力

しかも各資材300と、お手頃

なんでもぽいぽい!!は、

そのまま、相手の砲弾だろうが、魚雷だろうが、

爆弾だろうが機銃弾だろうが、『手でつかめる物は投げ返せる』

条件として手で掴む事で、『一掴み毎に鋼材50消費する』

あんまり使って欲しくは無い

悪食・深海棲艦は蒼龍と同様

深海棲艦ブッコロス!!は、全身が赤く発光し、

艦装に『バーニア』が生えて来る

燃料消費20乗と言う資材殺し

ただ、深海棲艦への攻撃が『強制一撃』となる

使用時はエージの許可が必須

癒しのぱふぱふは、『艦娘』のみ効果を発揮する。

まあ、艦娘の心労を癒し、士気向上効果もある。

消費は無し!!ただし、夕立の気分次第なので、

して貰えるのはかなりレア

なお、エージにやっても効果は無く役得なだけである

時雨いじりは、時雨を上手い事おだてたり、

イライラさせたりする事により、

『時雨の深海棲艦への火力上昇バフ』になる。
気よ付けないと自身に降りかかって来る。

「パーパ、横須賀鎮守府の三笠グランマから。」

【お願い、リベちゃんを遊びに来させて!!】

あく、三笠が大分崩壊した。

リベツチオの、パーパ、マミー、とくれば、

『グランマは、三笠ね♪』

と、二日前の電話でシユンコロされていた。

「まだ、一週間経って無いんだ、

それで？用事は？」

ちゃんと黒電話で話すようになった

【長いわよ!!毎日来て欲しいの!!】

「きるぞー。」

【まっ!?まって!!】

正式な書類で、貴方に命令なのよ!!】

「どっ。」

【呉鎮守府の向かい側に、

第二・呉鎮守府があるのは知ってるわね?】

「・・・おう。」

いや、知らなかった

【そこを『解体』したの】

「・・・何人だ?」

【話が早くて助かるわ、

『阿賀野型軽巡洋艦』 4人

『長良型軽巡洋艦』 1人

『天龍型軽巡洋艦』 2人

『ノーザンプトン重巡洋艦』 1人よ。】

「・・・わかった、何時だ。」

【・・・】

「おい。」

「アナタ、港湾区から連絡、

『移動艦娘の受領サインが欲しい』と。」

「パーパ、

お迎えしてくるね。」

「りべ、私も行くわ。」

「私も。」

ぱたん

【てへぺろ♪】

「・・・。」

ちん

▽

「はあああん／＼／＼」

「うわっ!?!気持ち悪っ!?!」

「なんですの?」

「いや、三笠がなんか顔真っ赤にしてくねくねしてるし。」

「あら、はしたない。」

「二人とも。」

「なにさく。」

「なんですの?」

「旦那を連れて来て?」

二人「うげく、了解(ですわ)。」

オカシイ艦娘に触れぬ崇り無し

鈴谷と熊野は旦那と言う生贄を

執務室に放り込む

▽

「今度は、どなたがお生まれになるのかしら?」

「勘弁してよ、

ベビー用品で埋まる執務室なんて

入りたくないし。」

嫁に娘とエージ

単冠湾泊地

執務室

「えつと、取り合えず、艦名を聞きたいんだけど?」

まあ、知ってるけど、職務上聞かねばならない。

「天龍型、天龍。」

「龍田。」

「おう、よろしく。」

「ノーザンプトン重巡洋艦、一番艦。」

「よろしく。」

で、だ

阿賀野型は全員拒否

ま、そうだよな、『そう言う扱いをされて来た』人間不信だろうよ

「天龍、龍田、ノーザンプトンは、

ひとまず『入渠ドック』へ、

損傷修復後、間宮さんの所で補給、

その後、施設把握を命ずる、

それでいい時間になるだろうから、

部屋を用意してある、明日に備えてちゃんと眠るように。」

「それだけか?」

「ああ、生憎俺は別邸に住んでるから、

夜は基本居ないぞ?」

「け、そこでよろしくやってんだろ?」

「ああ、ケツコンしてるからな、

山雲、マックス、娘のリベッチオだ。」

「改めてよろしくね。」

「ふうん、エージはあげないから。」

「もう、マミー達ったら、3人のパーパでしょ?」

「はっ、どうだか、

男ってのは、嘘つきで糞な生き物だろうが!!」

まあ、家の嫁が抜刀を許す訳ないので
「なっ?!」

(冗談だろ?! 駆逐艦の癖にっ!!)

「天龍だったわね?」

「人の抜刀止めといてなんだよ?」

(迂闊に動けねえ)

「肘、痛めるわよ? 抜刀にもやり方があるのだけど、

貴女、独学?」

「え? は? 独学だが。」

「そう、エージ? 抜刀が得意な子家に居たかしら?」

「抜刀かあ、

剣技に絞れば、『ビスマルク』だな、槍は『村雨』だな。」

「だ、そうよ?」

「くっ、駆逐艦の癖に。」

(双銃術ですって? なんなのこの子)

「メガネおねえちゃんは動かないのね?」

オネエチャン?

「ノーザンプトンお姉ちゃん?」

．．．オ・オネエチャン／／／ハフウ／／／

「あ、倒れた。」

「リベ、ノーザンプトンを先に入渠ドックへ、

良く見ろ、幸せそうな顔してるぞ?」

「．．．マエストラールと同じかあ、

まあ、お姉ちゃんに変わりにないから、

これからよろしくね♪お姉ちゃん♪」

大量の忠誠心(鼻血)を垂れ流している

「リベく、トドメを刺すんじゃないやありません、

ほれ、天龍、龍田、ノーザンプトンを牽引してくれ、

流石にリベじゃ引つ張れない。」

▽

「さて、今は俺だけだ、

本音を聞こうか、艦名すら忘れたとは言わせないぞ？」
「つても、誰も喋らないか
さして、どうした物かね？」
「ん？」

酒匂がこつちを見た？

「おお？」

左腕を噛まれた

他は？あら？手を出さない？

(なんで？痛くないのっ?!)

「俺の肉なんて不味いだらうに、腹減ったのか？」

(なんで・・・)

「阿賀野、能代、矢矧を連れて、

入渠ドックへ行つて来い、先ずは疲れを癒してから、

また話そう。」

「っ!？」

「なんだ？何か変な事俺は言ったか？」

「貴方、わかつてて言ってるの？」

「能代、これ以上の問答は無駄だと思うが？」

「貴方ねえっ!!」

「よそう、能代、阿賀野、酒匂、早く来いよ？」

「矢矧っ!!」

「はぎちゃん・・・。」

「矢矧。」

「なによ？」

「大和は、

『護る戦いが出来たんだよな?』

「・・・知らないわ、私が先に沈んだのだから。」

「・・・そうだ、矢矧に『会いたい人が来てるんだ』

「ご老体に無理をして態々来ている、会って欲しい。」

「・・・わかった、

だが、貴様、覚えて置けよ？」

今は万全では無い、それを整える為にここは引こう。」
「そうしてくれ。」

▽

「流石に顎が疲れたか？」

(なんで・・・顔色一つ変えないの)

「あくあく、歯形がくつきりついてら。」

(・・・なっ!?)

軍服を脱ぎだし、腕の『噛み痕』をあらわにする

「いつてく、酒匂、お前は大丈夫か？」

「そんな・・・本気で噛み千切る力だった筈なのに!!」

「本気、ね、

だったら、『艤装』で砲撃した方がよっぽど早かっただろうに、
態々噛みついたと？理解できんな。」

あ、なんで？艤装なら、撃つだけで済んだのに・・・

「ほれ、せめて口ゆすげ。」

あ、ぺっ、けっこう可愛い

「ほれ、ハンカチ。」

「ふん。」

さて、どうしたもんかね。

「貴方も酷い事するんですよ。」

「して欲しいのか？」

「嫌に決まってるでしょ!!」

ガルルルルって、可愛いww

「しかし、他の3人とは大分印象が違うな？」

「ぴやあ？」

(なんで私、普通に話せてるんだろ?)

「何も知らない・・・知りたがりの顔をしている。」

(ぴやう?! てててっ?! てがっ!?)

「いや、末っ子ならではの可愛いさかね？」

「ひやうっ!?!」

「つと、すまん、嫌だったか？」

(なんで?この人だと・・・嫌じゃない)

「髪も綺麗だ。」

(ひやうく)

「・・・娘にならないか?」

「へ?」

「あ、いや、すまん、リベとなんか雰囲気近くてな。」

(さっきの子)

「肌ざわりいいな。」

「ぴやう?!」

「すまん、大丈夫か?」

(なんで?なんでだろ?)

あ、スリスリしてくる

「証明、して?」

「ん?」

「やなこと、絶対しないって。」

「しないのは勿論なんだが・・・証明かあ。」

(んく・・・なにがいいんだろ?)

「ねえ?」

「あいよ?」

「好きな人どうして、なにをするの?」

「・・・手を繋ぐとか?」

「じゃあ、『指切り♪』」

「え?あ、ああ、指切りな?」

ゆくびきりげんまん、うそついたら

しれいの大事なもんぐぐ!ゆびきった!

「つて、もぐつ!?!なにをつ!?!」

つて!?!

「えへへく／＼／ファーストキス♪」

これをばらされたくなければ、

ちゃんと約束守ってね?『お父さん♪』

「ははっ、はいよ、酒匂!」

先ずは身綺麗にしてからな？

それからご飯と

山雲、マックス、リベに紹介だな。」

「うん♪お父さん！」

絶対嫁に出さないぞっ!!

嫁と娘達と長良型

別邸

リビング

「あ・な・た？」

「はい。」

「どう言う事かしら？」

「ちゃんと聞きました。」

「で？妹なの？お姉ちゃんなの？」

「あ、それは聞いてなかった、

酒匂？どっちがいい？」

「ぴやあ、決めてない。」

「史実だと、酒匂の方が後だからな、一応、妹になるのか。」

「妹？まあ、阿賀野型で言えばそうなるけど。」

「酒匂『お姉ちゃん』？」

「ぴやう!?!お、お姉ちゃん?!?酒匂が？」

「(背丈的に無理だし) うん、

なんだかお姉ちゃんって呼びたいかな？」

「ん、いいよ？りべちゃん♪」

「お？」

「あら？」

「ふうん。」

「酒匂お姉ちゃん、倒れたりしないの？」

「ぴやあ？わかんないけど、

倒れないよ？妹って、こうなんだな〜って。」

頭ナデナデ

「むふ／＼／＼」

「ふふっ、それじゃ改めまして、

阿賀野型軽巡洋艦4番艦、酒匂、

これより『家族になります』これからよろしくね？」

3人「いらっしやい、酒匂！」

▽

阿賀野型

私室

「酒匂ちゃん、あつさり認めてたね。」

「ちつ、あの子の見る目は確かだから、安全なのは確かね。」

「・・・ふう。」

（どうして？）

私達姉妹の方が良いんじゃないの？

酒匂、貴女、あんな男に何を感じたの？

「矢矧ちゃん、

あのお爺さん、『会わなかったね』どうして？」

「姉さん、

『かつての搭乗員』って言われて、

懐かしくて会いたいなんて言いますか？」

「それは・・・。」

「矢矧の言う通りよ阿賀野姉、

確かに私達には『艦艇』の記憶がある、

でも、私達は『艦娘』なのよ？

「でも・・・。」

「アイツの裏、調べてみるわ。」

「能代ちゃん？」

「そうね、私も、私なりに動いて見るわ。」

「矢矧ちゃんまで。」

▽

「えつと、こんなにアメリカ艦艇が・・・。」

「フレッチャーよ？こつちが。」

「ジョンストンよ、ノーザンプトンさん。」

「サミュエルよ？」

「えへへ、私はラッキージャーヴィスよ！」

「え？」

「ああ、ジャーヴィスはイギリスの子よ、

それと、私はコロラド、
ある意味、初めましてね？」

「こっ!?コロラドさんっ!」

「ええ、ノーザンプトン、

貴女はどんな事を過ごして来たのかしら？」

「ごっ、ごめんなさい!!

辛かったわね?大丈夫よ、ここは決して

そんな事を強いる所じゃないわ。」

「・・・ホントニ?」

「てか、なんで『しおラド』になってるのよ?」

「誰?『しおラド』って言ったの?」

3人「ジャーヴィス。」

「ちよっ!?裏切り者っ!!」

「はあ、広めて無いわよね?」

4人「・・・。」

「ちよっ、まさか。」

「ぷふっ／＼／」

「なあっ、ノーザンプトン〜!」

「ふふふ、ごめんなさい、

コロラドって、はっちやけてるって伝え聞きだったから。」

「うゝ、確かにそうよ?」

でも常にそのキャラじゃないわよ?私だって淑女なんだから。」

5人「その恰好で?」

ジャージは淑女とは言わないだろう

「なによ?着心地が楽で

着飾らなくていいんだからいいでしょ?」

しかも『眼鏡』を付けてゲームをしている

「どうするのよ?もし、エージが来たら?」

「来ないわよ、夜だし、

見回りは『当番制で』確か今日じゃ無かった筈よ?」

コンコンコン

おーい、いい加減寝ろよ

「え?」

5人「あ。」

そっ閉じ

寝ろよ

「いやあああつ!」

▽

「なっ!?!悲鳴?」

「そうね。」

コンコンコン

「は〜い。」

「もう寝たか?外に灯り漏れてるから、

カーテンぐらい閉めてくれよな?」

「ねえ?さっきの声、誰かしら?」

「コロラドだよ、

ジャージ姿で眼鏡かけてゲームしてたからな。」

「てめえ!!」

「うおっと、はあ、お前ら?艤装つけたまま寝るのか?」

「んだよ!?!悪いか!!」

「まあ、あんまり良くは無い、

海上で作戦中なら兎も角、

今は休養中の筈だ、艤装も休ませないと、

金属疲労が鰻登りだぞ?」

「あら、そう言っつて、私達を襲うつもりかしら?」

「・・・確かに見芽麗しい女性二人だ、

そう言う思いもあるだろうが、

龍田、そんなに震え、怯えるお前を俺は手を出さん、

天龍をずっと庇ってたそうだな。」

「おい、なに言っつてんだよ?」

「龍田、俺からは言わない、

お前のタイミングで言っちゃれ、

泣き顔より、笑顔の方がお前には似合うのにな。」

(どうしてこのひとは・・・そんな辛そうな顔をするの?)

「龍田っ!?おい!!大丈夫なのかっ!!」

「・・・どうして。」

「ん?」

「わたしからいわせるのですか?」

「・・・わからん。」

「お前なあっ!!さつきから無視しやがって!!」

「ふん、お前も震えているぞ?天龍?」

「ふざけんな!」

「てん、りゆう、ちゃん。」

「た、龍田。」

「龍田、俺は外す、ゆっくりでいい、

先ずは姉妹の仲を治す事から、一つずつな?」

「はい。」

▽

「ふう。」

ここは流石にキツイな

コンコンコン

「入るぞ?」

返事は相変わらず無い

くらい室内の隅っこにうずくまる『長良型』

『『五十鈴』・・・おにぎり、食べて無いのか。』

乾燥が進みぱりぱりになっていた

「ほれ、お粥だ。」

動こうともしない

「はあ、『命令だ、お粥を食べなさい』」

漸くもそもそと口と手を動かします。

「おま・・・着替え、持って来る。」

廃人

その表現は正しく五十鈴に当てはまる

彼女は『目の前で姉妹を解体され』

『新たに建造された姉妹の前で汚された』

時には他の艦娘の前で汚された

生食行為を一切諦め、完全に塞ぎ込んだ

でも『生きては居た』

三笠が見つけた時には、既にこの状態だったそうだ

でも、『三笠を見た時、涙を流した』らしい

「可能性があるなら、か、

馬鹿言え、『助けて欲しい』って事じゃねえか。」

『命令』は受け付ける事が出来る

ただ、それ以外は自身が出した物で汚れても何もしない

『命令だけ応じて行動する』

それが五十鈴の選んだ自分を守る行為だった

「ほれ、服・・・『もう良い、食事を止めろ』」

かつん、かつん、

お皿の底を叩く音はキツイ

『立て』

ゆっくりと立ち上がる

『服を脱げ』

汚れた服を回収し、お湯で温めたタオルで拭いて行く

『服を着ろ』

身綺麗には出来たが

『身体に残された傷跡は消えなかった』

抜糸されずそのまま残った開腹痕が幾つもある

「・・・五十鈴、嫌だったら抗えよ?」

左目の眼帯を取り、目薬を点眼する

今の所、治る見込みがあるのはコノ左目だけ

右目は虚空になり、後日『義眼』を埋め込む予定だ

余りにも衰弱していて『手術には耐えられない状態だった』

頬にも傷痕が残り、元の五十鈴の顔の名残は無い
では、先ほどの食事はどうしていたのか？

『動作を身体が覚えているから』

例え見えなくても、『艦娘の感覚』は生きていて

ソナーの応用らしい

「五十鈴、お前は生きていたいのか？」

反応は無い

生きていたいと、言っただけか？

正直、解体し、艦娘を辞めた方がマシな人生を歩めるのでは？

提督権限で『艦娘の意志を尊重せずに解体出来る』が

「はあ、

『就寝しなさい、明朝、0800に起床』

布団に潜りこむ五十鈴

「・・・明日、俺も付き添うからな。」

頭を撫でる

義眼を埋め込まないと頭蓋骨が変形してしまう

命と繋ぐために必要な事だが

「・・・嫌だよな、辛いよな？」

見知らぬ場所、見知らぬ人間に

身体を拭かれ、世話をされる

更に明日、義眼を埋め込む手術をする

「すまない。」

撫でるのを止め、明石に連絡を入れる。

▽

「ようやく眠ってくれたよ。」

☒わかりました、直ぐ向かいますね☒

「ああ、部屋の外に・・・。」

☒どうされましたっ!?☒

「いや、30分後でいい。」

☒・・・わかりました☒

▽

別邸

「お疲れ様、貴方。」

「ああ、五十鈴を責めるなよ?」

「しませんよ。」

「『抱かない』 そう言ったら布団に戻ったよ。」

「ソレをすれば、溺れるでしょうね。」

「だろうな、

俺にそんな気兼ねは無いし、

山雲、マックス、リベ、酒匂も居るんだ、

既に一杯一杯なんだよ。」

「・・・私は?」

「・・・ダメだ、お前も溺れるぞ?」

「そう、かしら?」

「キスだけでコレなんだぞ?」

せめて北方海域が終わってからだ。」

「・・・深海棲艦め。」

(いや、山雲だけなら良いんだけど、

なんか3人の気配もオカシイんだよな、

いや、無茶言うなよ?」

4人全員とかきついからな?)

嫁とエージと五十鈴

時刻は既に12時を回っていた
執務室

「はあ、こんなに時間が掛かるなんてな。」

結局、手術室から追い出され、

『ダブル明石』が手術を進めている

「貴方。」

「わかってる。」

目の前の書類もあるし、

また、『移動艦娘』の書類も混ざっていた

「三笠のヤツ、

俺を託児所かなんかと勘違いしてないか？」

「ほんとね、

酒匂？これとこれを整えて頂戴？」

「は〜い。」

以外や以外、

『眼鏡酒匂』は、事務処理ができる。

しかも、『能力なし』でだ

「はい、お父さん、これが燃料の分で、こっちが鋼材分ね？」

しかも早い!!

「はやっ、酒匂？無理してないか？」

「ん〜？してないよ〜？」

「不思議ね〜、

酒匂？貴女は書類仕事なんてした事無かったのよね？」

「そ〜なんだけど、割と、感？それに、ね。」

膝元には、こっくりこっくりと眠たそうなりべを抱えている

「酒匂お姉ちゃん・・・なんかりラックスオーラ出てるよ〜。」

条件として、

りべを抱えてる時の酒匂は滅茶苦茶ハイスペックなのだが、
降ろして数分経つと『ぴやあ？』と、元に戻る

「まあ、いいか。」

江風は遠征中で、執務室には、俺、山雲、りべ、酒匂の4人
マックスは、レーベレヒトの付き添いで遠征中

「あ、二人から連絡、今、折り返しに入ってたって。」

「遭遇は？」

「無いって、深海棲艦、なんか大人しいね？」

「だな、大規模侵攻の前触れか。」

「この間の『海域集中攻撃』のせいかもね？」

丁度、阿賀野達が来る前日に、

太平洋方面に『ストレス発散も兼ねて全員出撃』して
太平洋方面軍を徹底的に虐めたのだ

まあ、その分の書類16乗増しだったが

「さて、手術は進んでるのかね？」

予定では、3時間だったが、既に4時間半は超えている

「連絡は無いからまだ手術中なんだろうけど、遅いわね。」

▽

「はあ、終わった。」

「ですね。」

私と、『呉の明石』で、兎に角頑張った

実は、義眼は直ぐ終わって、

『開腹痕』の修繕に時間を喰っていたのだ

「後は、彼女の意志次第ね。」

「このまま目覚めないのはキツイですよ。」

持てる技術、投薬、修復を施したのだ、

せめて意識が戻ってくれと願っているが

「でも、あれだけの『傷跡』

いくら艦娘でも致命傷ばかりよ？

なぜ、生きていたのか不思議でしょうがないわ。」

「そうですね、

どこか五十鈴さんには、

譲れない何かを持っていたのだと推察します。」

大小合わせて『47カ所』それだけ

『人間』に傷つけられ『艦娘』として、致命傷ばかりだった

でも、『生きていた』これがおかしい

「もしかして・・・船員達に？」

「山本長官達ね？」

「ええ、恐らく長官達への思いが

五十鈴さんをギリギリ繋ぎ止めていたと考えます。」

二人「え？」

あり得ない麻酔もまだ効いている筈なのに

「うそ、でしょ？」

起き上がった

「な、なんで・・・。」

せつかく治した筈の『傷跡』は、『残っていたのだ』

「せつかくだけど、この子、壊れてるわよ？」

確かに五十鈴の声なのに、

どこか『ここにあらず』と感じた

「態々傷跡を治そうとしてくれたのはありがたいけど

そんなにこの子に戻って来て欲しいのかしら？」

「それはっ!!」

「訳わかんない、この子は死んでいるのよ？」

「それでは説明がつきません!!」

それに、『涙』を流した事にも矛盾が生じます!!」

「・・・この子はそこで死んだのよ、アレは解放された最後の意志」

「じ、じゃあ・・・。」

「この子はもう無理、靖国へ旅立っているわ」

「では、今話している貴女は何者何ですかっ!!」

「五十鈴達の残留思念ってトコかしら？」

「残留思念・・・。」

唐突に扉が開かれる

「なっ?! パースさんっ!？」

「え? まだロツクは掛けてた筈なのに!？」

「壊れていて、靖国に旅立った？」

嘘も方便ね、『貴女達』彼女を手放したくないだけでしょ？」

「な、なにを」

「もう少し休めたら良かったんだけど、

この子、以外と意地っ張りなのよ、

だから、『五十鈴を帰しに貰いに来たわ』

「帰さない!!こんな世界に五十鈴を帰してたまる物か!!」

「貴女達の意志は関係ない、

その身体は『五十鈴』の物よ? 『貴女達』には、過ぎたる宝物」

「ちよっ、パースさん?なんの話しを。」

「・・・『五十鈴』貴女、

エーヅに抱き着いた根性を持つてるんでしょ?

なら、『そんな奴ら』とつとと弾き飛ばしなさいよ」

「届く訳が無い!!聞こえる筈も!!」

「なっ!?五十鈴さんが!」

「さ、自力で手繰り寄せなさい、貴女の未来を」

「随分と言ってくれるじゃない、パースとやら。」

「なぜだっ!」

「なぜ?あのね? 『私は長良型軽巡洋艦、五十鈴よ?』

貴女達なんか知った事じゃないわ!!」

「おのれええっ!!」

「・・・五十鈴を舐めないで!!

『開・神』五十鈴の力、見せてあげる!!」

バカナ ナゼ コンナ チカラガ

「教えてあげる、

私が輩出した艦長、船員達はね?

皆優秀なのよ?そして、山本五十六は大将にまで上り詰めた、

山口多聞も提督となった、

あの人達の艦として、誇りは失っていないわ!!

貴女達は『帰りなさい』そして、

『新たな司令の元へ』靖国の英霊達に恥じる行為は許さないわ!!」

「長良型軽巡洋艦2番艦、『五十鈴』

只今着任致しました!!」

▽

執務室

「そしてパースは原因不明の昏睡状態か。」

「はい、眠っている以外正常です、

流石に栄養点滴はつけていますが。」

「それは五十鈴が説明するわ、

彼女、パースは『巫女』なのよ、

海神の巫女の役割があるの、

でも、あの子の身体はその力に『馴染んでいないの』

完全に馴染むまでは、昏睡を繰り返すでしょうね。」

「海神（わだつみ）か、

まさか、『右目の義眼』以外、

完全復活とは驚いたよ、五十鈴。」

「完全じゃないわよ、

幾つかのお腹の傷は残ってるわ、

確認してみる？貴方には、裸見られてるし、

私が『戻って来る切っ掛け』になったのだから構わないわ？」

「しない、それに言ったろ？『お前を抱けない』と。」

「傷だらけの身体を嫌ってって意味じゃ無いなら、

今の身体を「やめろ」

・・・冗談が過ぎたわね、ごめんなさい。」

「あえて執務室に、明石二人、五十鈴、俺だけにした意味を

履き違得るんじゃない。」

「そうね、こんな話し、重くて貴方の『家族』に、

さし水所じゃない物ね。」

「その通りだ、

それに『俺じゃなくても良いだろうに』」

「あら？」

「明石、呉の明石、

現状の五十鈴は『どっち寄りなんだ?』

「私は、『艦娘』と。」

「私は、『人間』とみて取れます。」

「つまり、今のお前は『あやふやな存在だ』

下手に関係を持つても『繋ぎ止めたお前』を失いかねんし、

お前にはもつと良い人が見つかるだろうに。」

「居ないわよ、貴方以外なんて。」

「それはお前が『外』を知らないからだ、

来週、本土に行く用事がある、

2、3人連れて行くから、その時、秘書艦補佐としてついて来い、

これは『命令だ』』でしよ?。」

「全くもう、これでもこの身体(改二)には自信あるのに、

なんで『小ぶりと無い子を選ぶんだか』」

「ねえ?五十鈴。」

「誰が小ぶりで?」

「誰が。」

「無いって?」

「山雲、マックス、リベ、酒匂、程々にな?」

4人「慈悲は無い。」

エージと矢矧と護衛艦

執務室

「あ、そうだ、山雲？」

「なあに？」

「ちよつとひと月空けるから、

その間は自衛に努めてくれる？」

「・・・え？」

「出向だよ、

『ある鎮守府』の監督さ、

昨日付で『大佐』になったからな、

北方海域も足掛かりは出来たし、

後は、『キス島』に居るであろう『生き残り』の捜索だけだ、

そのの『下準備』も兼ねてる。」

「でも、私は連れていってくれるのでしょうか？」

「・・・すまん、今回は無理なんだ。」

「なぜ？」

「相手方にも『山雲』がいるからだ。」

「・・・仕方が無いわね、誰かは連れて行くのでしょうか？」

「連れて行けないんだ、

外出経験のある子達全員向こうに居る、

つまり、家から連れて行けないし、

遠征組のローテーションを崩す訳には行かない。」

「大丈夫なの？」

「ああ、

三笠の近衛兵を借りてく心配すんな。」

「そう。」

▽

(チャンスね、後を付けていけるかしら?)

▽

4人「いってらっしゃーい！」

「おう、行つてきます！」

▽

護衛艦

艦橋

「お久しぶりです、艦長。」

「久しぶりですね、あつという間に『大佐』ですか、

いつその事、目的地まで操艦なさいますか？大佐殿。」

「遠慮しますよ、

『護衛艦くまの』の機嫌を損ねるのは勘弁です。」

「はは、確かに、艦娘でなくても、『私達の護衛艦』ですからね。」

流石に艦種が違うからなのか、

『重巡洋艦熊野』が乗っても動かない、

この『護衛艦くまの』は、数少ない護衛艦の生き残りで、

要人運搬、近海警戒通報艦として、今も現役だ。

「で、後方2500に艦娘がついて来てますが如何しますか？」

「・・・あれでバレてないって思ってる時点で問題にならない、

せめて、『浮き輪におにぎり』でもつけてあげて下さい。」

「ふふ、優しいですね。」

「貴女も、全員に言つてあるのでしよう？」

「あは、バレてましたか、はい、全員に周知済みです、

私から渡せば受け取ってくれますかね？」

「さあ？因みに彼女、『納豆が好き』だそうで、

お茶と納豆巻きでお願いします。」

「お、益々話が合いそうですね♪」

この女性艦長、

船員達から、『納豆艦長』と呼ばれる程に納豆好きで、

食糧庫の中に彼女専用納豆保管庫があるぐらいだ。

いや、自衛隊の越権行為だろ？

と、言つても生き残りの護衛艦自体が少なく、

次の護衛艦建造は暫く延期されている。

・・・例の『専用艦』の犠牲になつたのだ。

ある程度の範囲だが、個々の申請が通りやすくなっている。

「それじゃ、士官室で仮眠しますね。」

「はい、狭いですけど、お使い下さい、

ほんと『貴方の副業』は無くなる事は無いですね。」

「ええ、そうですね。」

▽

(・・・あの変な艦艇から投棄物?)

(なっ!?!納豆巻きに緑茶がお盆に乗ってるっ!?)

ぐく

(くっ、流石に無補給は無理なのね・・・)

ぐく

(手紙?)

(お爺さんから差し入れです、会いたがってましたよ?)

(・・・馬鹿ね)

▽

「どうだ？」

「ああ、たぶん、食べてくれてる。」

「泣いてないか？」

「ああ、泣いてるな。」

「あのご老人、長くないんだろ？」

「らしいな、そもそも100歳超えてるからな、会いたいだろうに。」

「ほんと、人間が一番悪者だな。」

「ああ、彼女達に胸張って見せられる国にすらなって無いからな。」

「上手く彼女を『隠さないとな』」

「だな、その為の『護衛艦』だしな。」

▽

「甲板員より通達、無事食べて貰えたそうです。」

「そう、短艇の準備、湾には近づかず、

短艇で向かって貰うように、

『お爺さん』は、甲板へ。」

「は、準備します。」

(もう、意識が無いけど、せめて・・・海の上で、ね)

▽

(なっ!!?短艇ですって?)

これじゃ近寄れない

どうする?・

え?・

後部甲板に何かが・・・っ!?

▽

「いいのか?」

「良いんだそうだ、

親族の方も、そうさせて欲しいと、要望している。」

「海の男は海で死ぬ、か、俺達もそうなるかね?」

「ああ、陸で最後は勘弁だな。」

☒艦娘、乗船します!☒

「お、来た来た。」

「っ!!」

「えっと、阿賀野型軽巡洋艦、矢矧さん、で宜しいでしょうか?」

「・・・そうよ。」

「どうぞ、先日までは意識があつたのですが、もう、意識が。」

「——なんで、こんなになるまで。」

「必死に丸太にしがみついて、泳いだそうです。」

「・・・そう。」

や は ぎ

「っ!?!——っ!!貴方なのっ!?!」

ああ、やつと会えたね

こんな美人さんになって・・・俺はジジイになってしまったよ

「・・・、貴方ねえ。」

▽

「いいのか?」

「俺達は邪魔だろ?」

それに、既に心電図は止まってる

幻影なのか、魂なのか、

再開を邪魔する程空気を読めない訳じゃない

「・・・会えた、か、

俺達は『護衛艦くまの』に会えるのかね？」

「いつも会ってるし、乗せて貰ってるだろ？」

「まあ、そうだけどさ。」

「なんだ？艦娘の熊野ちゃんに見とれてたろ？」

「なっ!?お前だってそうだろ!!」

「おにく様達？静かにして下さいな？」

「・・・子供？」

「失礼ですわ、『くまの』と言う大事な名前がありますわ。」

「・・・初めまして、くまの」

「『初めましてですわ』

お兄様達、ちっちゃくても、『護衛艦くまの』ですわ、

『重巡熊野』には敵いませんけど、

お兄様達を護る為にキチンと戦えますわ！」

▽

「で？」

「んふふ／＼／＼『くまの』ちゃん♪」

港に着いて一息ついてたら、

湾に近づかない筈だった『護衛艦くまの』が後ろに居て、

『護衛艦くまの』が艦長に抱きしめられていた

「どういう事だっばよ。」

「もう『お姉さま!』お話がし辛いですわ。」

はう／＼／

あ、ダメだこの艦長どうにかしないと。

「ふう、改めまして『護衛艦くまの』ですわ、

矢矧さんの船員達から促され、

『艦娘化』を選びましたの、

ですが、護衛艦であるが故に、

『重巡熊野』の様に、大きくはなれませんでしたの。」

「なるほど、ロリ巨乳が何を言っているんだ？」

「セクハラですわ？」

「いや、引く、嫁は山雲達だからな。」

「そうですよ、まあ、わたくしは、

『艦娘』として、産まれたてですので、

どこまで出来るかわかりませんが、

深海棲艦に必殺の『はーぷん』をぶち込んでやりますわ!!」

にゆつと、背中から生えて来るソレは、危ないからしまいなさい

「まあ、程々にな？一発で、

『家二つ分の値段』だったか？お高いからね？」

「・・・そうですよ？お姉さま？」

「あく・・・うん、高いよ、

でも、私達がいいよって言うから、

無駄遣いをしない様に一緒に気よ付けましょ？」

「はいーお姉さまー！」

はう／＼／／／

そのまま『護衛艦くまの』に拉致・・・乗り込んで出航して行った

『矢矧』も連れて

▽

「まさか、護衛艦も艦娘化するなんてね。」

「おい、猫吊るし、アレはどうなんだ？」

最近、猫吊るしは薄くなり、言葉も交わしずらくなって来ている

「あれもイレギュラーだそうよ？」

彼女も、元居た場所に帰るそうよ。」

「元居た場所？」

「彼女、『艦これ』から来てたのよ、言ってなかったけど。」

「・・・そうか。」

「驚かないのね？」

「まあ、な、

『もう一人の猫吊るし』が肩に乗り出したからな。」

その肩には、他の妖精さんと変わらないサイズの猫吊るしが居た

「転換期なのかしらね？」

「誰かさんがポコポコ子供を増やしたからな。」

「ちよ、私のせいだって言うの？」 20人しか産んでないのに

「いや、思いつ切りそれ原因だろ。」

「さ、雑談は終わり。」

「ああ、行こうか。」

副業と三笠と艦娘

どこかの鎮守府

「どう言うつもりかしら?」

「いえ、例えば三笠元帥でもお通しするなと言われまして。」

「そ、エージ、アレを。」

「はい、『大本営』からの命令書です、

——鎮守府は行方不明の艦娘調査に協力するように、

正式な命令書です、たかが門兵に拒否できる案件では無いんですよ。」

「・・・本物である証拠は?」

「勿論、この捺印と『血判書』『お上』の物ですよ?」

「・・・わかりました。」

▽

「手こずりましたね。」

「ええ、門兵も『使ってた』みたいだし。」

曲がり角一つで

如何にこの鎮守府が腐っているのか目の当たりにする

「・・・死んでいる。」

「エージ!!この子はっ!!」

「・・・そうか、『加賀』、君を退役させる、構わないな?」

僅かにうなずく

「ダメよっ!!助かるわ!!」

「産みたくも無いガキを孕んでるんだ、

それに、見ろ、これじゃあ、助けようがない。」

『歪に膨らんだお腹』更には、手足の『壊死』

「遅くなって済まない、『加賀』

君の来世に、幸があらん事を。」

空気の抜ける音が僅かにする

「言いなさい!!なぜ殺したの!!」

「三笠元帥、俺達は所詮人間だ、

出来る範囲なんて限られているし、全部は無理だ。」

「だからって……他の子が居る前で。」

廊下には幾人の艦娘が横たわって居た

『加賀』は先に靖国へ旅立った、

彼女に続きたい物はなにか反応を示せ。」

「あんまりよ……人間なんて。」

「そうだな、だから『俺が殺してるんだ』お前じゃない。」

俺の副業、墜とされ、離れていた時、

ある場所から逃げ出した艦娘を拾った時から、

この『副業』は始まった。

慰み者、虐待、薬物漬け、その被害艦娘を

『靖国へ旅立たせる副業』を続けている

アノ時から備わった能力『靖国へ』

死を渴望する艦娘を、『靖国へ旅立たせる』

神様は俺にないを求めてコノ能力を俺にくれたのか

「三笠元帥、この先はもつときついぞ。」

お楽しみ中の声が聞こえる

すすり泣く声も幾つか聞こえる

「行くわ、その為に来たんだから。」

「近衛兵、しっかりと三笠元帥を護れよ?」

無言で傾く姿は本当に頼りになる

銃でドアノブを吹き飛ばし、蹴破る

「なっ?!何者だっ!?!」

「ええい!!憲兵はなにをやってるか!!」

▽

「すまん、

手が滑った。」

容赦なく艦娘を傷つけていた提督達や、兵士を撃ち殺した

「あ……。」

ひー、ふー、みー……たぶん、8人か

「三笠元帥、艦娘を。」

「意識がある子は返事をして！」

重症の子達を入渠ドックへ!!」

▽

とりあえず死体をどかし、潰されていた艦娘を起こす

「・・・すまない。」

ち

「ん？」

「血、けが、してる？」

「あく、返り血だ、怪我はしてない。」

「よか、た。」

「名前は？」

「・・・うづき。」

「そうか、良い名前だ。」

「ない、てる？」

「・・・そうだ、同じ人間が済まない、

謝って許される問題じゃないな。」

「・・・ゆ、るす、よ？」

「うづき。」

「・・・ね、む、いよ。」

「ああ、俺が支えてやる。」

「こわいよ・・・。」

「俺も怖い。」

「い　しよ　だ　」

冷え切った彼女は、今、死んだのだ

「エージ!!その子・・・は。」

「まだ生きている艦娘を優先してくれ、

卯月は、俺が処置する。」

▽

「ねえ？」

鎮守府は即日解体

ほとんどの艦娘が『退役』を選んだ

『引退』を選んだのは数人

『退役』は、艦装を解体し

『解体ドック』にて『消える事』を差す

『引退』は、艦装のみで、一般人として生きる事

「どうして無くならないの？」

「・・・人間が居るからな。」

「でも。」

「深海棲艦は、

もしかしたらこう言う奴らを知っているから、

侵攻を止めないのかもしれない。」

「それじゃあ!!」

「それだけじゃ説明がつかない、『艦娘』は何なのか？」

「忘れるよ、そんなの。」

「え?」

『我、思う、故に、我あり』

それだけしつかりしてりや、

お前は『三笠』であり続けられる、

助きたい思いを塞ぐな、

なら、それを続ける、辛いのは承知の上なんだろう？」

「酷い人。」

「ああ、知らなかったのか？」

『重爆の奇人』は、人でなしなんだぞ?」

「バカ、貴方の何処が人でなしなのよ?」

その手には『三日月の髪飾り』が握られていた

「・・・いや、人でなしだよ。」

▽

一つ目

二つ目

三つ目

合計三か所の鎮守府、基地が地図から消えた
なんの因果か、

最後を看取ったのは、『睦月型』ばかりだった

▽

単冠湾泊地

港湾区

「お疲れ様、

暫くは大丈夫な筈よ。」

「だと良いな。」

用は上手く雲隠れされてしまったのだ

「今度はゆつくり出来ると良いわね。」

「・・・北方海域、キス島を足掛かりに、

幌筵泊地の設営の準備を進めてくれ。」

「っ?! 貴方、何言ってるかわかってるの?」

「ロシアさんは、知らなかったの一点張りだ、

幌筵泊地には、『現地に住人が取り残されている』

「なんですってっ!?!」

「よりもよつて『日本人らしい』との事だ、

恐らく『艦娘』か、本当に日本人が残されていると

判断して良いだろう。」

「・・・ダメよ、3つの鎮守府、基地が消えている以上、

その補充要員、提督候補の『繰り上げ採用』

資材も全然足りないわ。」

「・・・救助だけにとどめると?」

「それでも直ぐには無理よ、

まだ事後処理が終わらないわ。」

「・・・わかった、家だけでやる、邪魔だけはするなよ。」

「出来ないわよ、支援を送りたいけど、

何処も手一杯、ごめんなさい、無理をさせるわね。」

「・・・今度、東郷さんに会いに行こう。」

「そうね、『遺髪』は、『私の本体』にある物ね。」

「家族で行くよ。」

「わかった、掃除しとくね。」

▽
執務室

「ただい・・・まつ!」

入って早々、子供達に抱き着かれた
な?この子達は一体つ!?

「ただいま!!」卯月、帰還しました!!」

「長月、ただいま帰還したぞ!!」

「菊月、帰還したぞ!!」

「お、お前ら・・・どうして?」

先の看取った子達だ

「うくちゃん、やっぱり『帰りなさい』って、言われたびよん。」

「私もだ、まだ早すぎるとな。」

「同じく、なにより、貴殿に仕えて見たいと思ってたしな。」

「あくなきたろ?」

「・・・山雲、すまん、『娘達』だ。」

▽

単冠湾泊地所属艦娘

戦艦

『霧島』『コロラド』

『イタリア』『ローマ』『ビスマルク』

正規空母

『蒼龍』『雲龍』

軽空母

『ガンビア・ベイ』『龍驤』

重巡洋艦

『プリンツ・オイゲン』『ノーザンプトン』

軽巡洋艦

『パース』『大淀』『五十鈴』

『阿賀野』『能代』『矢矧』『酒匂』

『天龍』『龍田』

駆逐艦

『山雲』『山風』『江風』『白露』

『時雨』『春雨』『五月雨』『涼風』

『村雨』『マエストラーレ』『グレカーレ』

『リベッチオ』『シロッコ』『フレッチャー』

『ジョンストン』『サミュエル』『ジャーヴィス』

『レーベレヒト・マース』『マックス・シユルツ』

『タシュケント』

『卯月』『長月』『菊月』

工作艦

『明石』

給糧艦

『間宮』

卯月と深海棲艦と嫁

キス島近海

「ファイエル!!」

「ファイヤ!!」

「うてえ〜!」

「よし、チャンスだ!」

「狙い撃つ!!」

「外さない!!」

珍しくオイゲンが

「なんかみんなで行きたいです!!」

つて言うもんだから、

「じゃあ、メンバーもよろ。」

「は〜い♪」

つて、決めさせたら、

オイゲン、ノーザンプトン、

卯月、長月、菊月、タシユケントの6人

(まあ、反れマス行きなのだけど)

「て、手強いと聞いてた筈なのに。」

「ああ、なぜだ? 私達3人は、

練度もそんなに高く無かった筈なんだが。」

「なんでか戦えてるぴよん。」

「それは私もよ。」

「確かニ、なんだか、ヘンね?」

「あく・・・やっぱりか。」

5人「やっぱり?」

「みんな、『演習』で気づいてなかったのね〜。」

「質問ぴよん。」

「はいはいどぞどぞ。」

「演習って言っても、

深海棲艦を倒すのと演習じゃ、

それなりに経験出来る『練度』に
差があるって聞いたぴよん、

でも、この状態はどう言う事ぴよん？」

4人「確かに。」

「それはね、

『単冠湾泊地所属』って言う『加護』が付与されてるんだよ？」

5人「加護？」

「そう、

私達『単冠湾泊地所属』って、

『海神（わだつみ）』の加護と、

『稻荷神社氏子』と、『水神氏子』、『開・神』の

四つも『加護』が付与されてるの、

演習における経験がそのまま生かせるようになったり、

『少しでも異変を感じられたり』

『扶桑・瑛士の体術指南』がオマケだね。」

「なっ!?なんだそれは？」

「いや、そもそも提督の体術指南？」

「あ、確かに色々教わったぴよん♪」

「まさか、それらをそのまま？」

「そ、『練度』に加算されてて、

『単冠湾泊地内で演習相手に困らないでしょ?』」

5人「むしろ強制されてる気がする（ぴよん）んだけど？」

「まあ、エージのお陰かな？」

最近、北方海域全体が活発化してて、

私が単独で動くにはちよつと厳しいの、

だから『ついた力の確認』も兼ねて、ついて来て貰ったんだ。」

「ほえ〜。」

「だが、いまいち実感がわかん、

オイゲン殿、所詮私達駆逐艦の砲撃は

駆逐艦同士なら兎も角、

軽巡、重巡となると砲撃が通らないし、

戦艦となれば、魚雷でなければダメージが通らない、
にもかかわらず、

『重巡り級flagship』に砲撃が通っている、と言う事なの
だ?」

「ん、」

みんな、主砲『12.7cm連装砲D型改三』でしょ?

それに、魚雷も『61cm三連装(酸素)魚雷後期型』でしょ?

更には、『22号対水上電探改四(後期調整型)』電探、
装備も滅茶苦茶充実してるんだよ?」

(あれ?みんな固まってる)

「つ、つまり?」

(あ、菊月復活早いww)

「まあ、『普通』じゃ無いのは確かだねww」

(ゲームの時の相乗効果とは大分違うけどね)

▽

キス島深部

「うへえ、やっぱりみんな来て正解、

『ヲ級flagship』が二杯に、

うげげ、『ル級flagship』に、『ハ級』が、

二杯と、なんでか『ル級elite』も居るし。」

5人「いや、オカシイでしょコレっ!!」

「見つかったっちゃってるし、戦うしかないよ?」

▽

「ナツ!?ナゼコンナ所ニ『艦娘』ガイルノダ!」

(冗談じゃない、最近変な『重巡洋艦』がうろついているから、

その調査と可能であれば撃破を頼まれたが、

報告では『単艦』だった筈だぞ!!)

▽

「対空防衛!!」

「わかってる!!」

「了解した!!」

「うてえ〜！」

「信管調整、艦爆へ攻撃開始!!」

▽

「コチラ『キス島』調査艦隊!!」

現在、件ノ重巡洋艦ト遭遇スルモ、『艦隊』ヲ構成!!
至急、増援ヲ求ム!!」

☒ダメダ、今援軍ニ迎エル艦隊ガ無い、
現状ノ戦力デ対応セヨ☒

「フザケルナ!!『その重巡は複数で当たるべし』ト
言ツタノハ『お前らだろうが!!』」

☒ワカッテナイヨウダナ☒

「何がだ!!」

全機、全力で重巡洋艦を狙え!!
貴様!!帰レタラ覚エテ置ケヨ!!」

☒ヲ級flagshipヨ、
貴様ノ不可解ナ行動ハ既ニ把握済ミダ、
他ノ艦艇モ同様ダ、貴重ナ艦艇トハ言エ、
『他の深海棲艦を隠す』ナド、

離反シテイルト見テ当然ダロウ、

既ニ『処分』ハ終ワツテイルガナ☒

「・・・殺ス、絶対殺シテヤル!!
全機帰還セヨ!!」

アイツへ報復ニ向カウ!!」

▽

「なっ!?引き返して行く?」

「どう言う事だ?こんなの初めてだ。」

「・・・。」

「な、なぜでしょうか?」

「ねえ?」

「オイゲンちゃん。」

「うん、なんか、変だね、

私達も一旦帰投、

エージに相談しよう、

もしかしたら深海棲艦も『一枚板』じゃ無いのかもしれない。」

「オイゲンちゃん、

偵察機、どれだけ飛べるの?」

「ん、ごめんね?あんまり長くは飛べないの。」

「・・・あ!!エージ!!」

『一〇〇式司偵』出して!!早く!!」

☒卯月いつ!?なんで知ってるんだよ!?

てか、なんだ?いきなり『一〇〇式司偵』だなんて、なにがあった?☒

「エージ、

深海棲艦を追って欲しいの、

オイゲンの偵察機じゃ届かないから。」

☒・・・現着に三〇分は掛かる、それまで追尾出来るか?☒

「やってみる、偵察機、発艦用意!!」

☒蒼龍!!今回は『一〇〇式司偵』だ!!

増槽と『発艦ブースター』で急ぎだ!!☒

☒え、今からオヤツ食べるのに☒

「蒼龍さん?」

☒なくに?卯月ちゃん?☒

とつとつやれ

☒やります!!やらせて頂きます!!☒

▽

(あ、来た)

『一〇〇式司偵』確認、引継ぎを始めます。」

☒ああ、頼んだ、

蒼龍、しつかりやれよ?☒

☒ももも勿論です!!☒

▽

(なあ、菊月)

(なんだ？長月？)

(卯月って、あんな声出したっけ？)

(いや、初耳だし、

ここまで主張を通す子だったか？)

(ねえねえ、二人共、

卯月ちゃんって、何時もああなの？)

(ノーザンプトン殿、

いえ、私達も困惑している、

あんな声は初めて聞いたんだ)

(ああ、それにオイゲン殿も驚いていたようだ)

「そこ。」

3人「ひゃいつ!!」

「こここそ喋るなら、堂々と言って？

索敵も疎かにしないで？」

3人「びゃいつ!!」

(喋ベラナクテ正解ね、こっちに飛び火はイヤだし)

「タシユケントさん？」

「うへあつ?!なっ?!なにいつ!!」

「・・・ちゃんと索敵して下さいね？」

まだ帰還の途中なんですから。」

「わ、わかってる。」(怖っ!!)

(へへ、

卯月ちゃんこんな一面あるんだ、

ちよつと考えを改めないとアレだね、

エージへ、卯月ちゃん、

なにか抱えてるよ？ちゃんとケアしてあげてね?)

▽

「そうか、

帰還したら出頭するように伝えてくれるか？」

☒はいはい、

卯月ちゃん？エージが帰ってからちゃんと報告欲しいって☒

☒え？あ、ああ、わかったぴよん、

もうちよつとで着くから待ってるぴよん！☒

「わかった、気よ付けてな。」

▽

「ねえ？」

「なんだ？山雲。」

「あの子の『声』」

「ああ、恐らく『俺と同等かそれを上回る』かな？」

「あの子の最後って。」

「・・・周辺の漂流者救助における『機関停止中に置ける炸雷』」

「それが原因？」

「ソレもあるだろうが、

『睦月型最後の戦没艦』ってのが、一番大きいだろうな、

しかも、1944年が終わるまで後僅かって時にな。」

「そうだったのね。」

「それと、『龍田』を呼んで置いてくれ。」

「え？『龍田』を？」

「・・・卯月なら、それでわかるだろうな。」

「そうなの？史実は、

私自身以外、余り調べなかったから、わからないのよ。」

「・・・『龍田』の最後を看取っている、

本音も、『龍田』には言ってくれと、

少し期待している、俺だと、隠されたらわからないからな。」

「あなた・・・ホントに損な性格ね。」

「ん？なにか言ったか？」

「いいえ、呼んで来るわね？」

「ああ、頼んだ。」

嫁不在が起こす大問題

執務室

「どう言うつもりぴよん？」

「卯月、お前は『何を抱えている？』」

「・・・言えない。」

「じゃあ、私には言えるのかしら？」

「・・・言え、ない。」

「言え、卯月。」

「嫌だ!!」

(ここまで嫌がるなんて、

卯月ちゃん、貴女は一体なにを抱えているの?)

「はあ、

権限執行、『卯月』

あの深海棲艦は『飛龍』なのか？」

「そ・・・ぐうっ!!」

「卯月ちゃんっ?!」

「・・・恐れ入ったよ、

『舌を噛んでまで、喋りたく無いなんて。』」

「止めなさい卯月ちゃんっ!!」

(いや・・・あんなの飛龍さんじゃない!!)

「卯月、『舌を噛むのを止めろ』」

「・・・がああっ!!」

「やめさせて!!エージっ!!」

ある物を口に含み

「『口を開けろ』」

(いやあああっ!!)

何かを口に入れ込む

「っ!?なににするぴよんっ!?!」

「え?ちよ、貴方は『ペド野郎なのっ!?!』」

「・・・いや、口移しで、

『飴玉タイプの高速修復材』を入れ込んだだけだ。」

「・・・あ、『べろ』痛くない。」

「それでも、『少女の唇を奪うなんて許されないわ』」

「そうだぴよん!!」

うぐちちゃん、『ファーストキス』奪われたぴよん!!」

「・・・あの深海棲艦を救助しようにも、

『蒼龍』が追跡しているが、

『暗雲立ち込み追跡不可』と、連絡が入った。」

「貴方ねえ!!」

「・・・ぶっちゃけ、娘よりは、嫁って思ってるからだ。」

二人「え?」

「うるせえ、卯月、

俺は言った、お前の答えを聞かせてくれ。」

「え・・・ちよ。」

『『とんだ幼女趣味野郎』』

「龍田、むしろお前がどうしてそう言う事を

知識として持つてるのか気になるが、

『蒼龍』の最終目撃情報から推察するに、

ここから3つ目にある『火山島』だ、

『現在も休火山』だが、

深海棲艦の目撃情報も多数報告されている、

『行動が不可解な深海棲艦』のな。」

「ちつ、どう言う風に『不可解』なのかしら?」

「ジャーヴィス達が遭遇した時、

『挨拶』して来たそうだし、それも『艦娘』の気配でだ。」

「それって。」

「恐らく、『轟沈』したか、『自ら深海棲艦になったか』

『自沈』を選んだ『艦娘』の可能性がある。」

「じゃあっ!!」

「だが、『姿は間違いなく、深海棲艦だ』艦娘じゃない。」

「まさか、貴方はそれらを『撃沈』しろと言うのかしら?」

「・・・そうだ。」

「ダメぴよん!!」

『あの人』は、戦う事を嫌がる子を助けてるだけだぴよん!!
そんなの許さないぴよん!!」

「お前が『あの人』と言うのは、『飛龍』だけだったな、

なら、『匿っているのは、非戦闘深海棲艦』と確定出来る、

『三笠』あの情報は『確定』した、

つたく、『秋津洲』はどこでこの情報を手に入れたんだかな。」

【貴方ねえ、

いきなり電話掛けて来たと思えば、

延々とスピーカーホン強制で聞かされて

卯月ちゃんに手え出してるし、

深海棲艦を救助?なに考えてるのよ?」

「いや、とくに。」

3人「考えて無いんかいつ!!」

「ああ、

下準備は終わってるからな、な?『ノーザンプトン』?」

☒は、はい☒

「動かせるか?」

☒な、なんとか☒

【ねえ?今度はなにやらかしたのよ?」

「ん?」

☒あの、エージ?☒

「なんだ?」

☒こんな装備、使って良いのでしょうか?☒

「ノーザンプトン、

『常識に囚われてる場合じゃないんだ』

俺が使っていた『強襲揚陸重砲撃巡洋艦』で、

一気にやらなきゃならん、

因みに『鋼鉄の咆哮3』仕様だ、

艦尾に『揚陸艇』を三隻搭載できる。」

「え？なに？」

請求書？はっ!?ちよっ!?名義が私になってるっ!？」

「んじゃ、ヨロシク。」

「なんなのこの金額」ぶち

「うわゝ。」

「龍田、お前用に造った軽巡もあるんだけど、どする？」

「・・・遠慮しておくわ。」

「なんだ、つれないな。」

「えつと、うゝちゃん、どうしたら。」

「まあ、ついて来るなら構わないけど？」

「つて、エージも行くの？」

「え？だめ？」

二人「ダメぴよん。」

「・・・龍田、ソレ封印ね？」

「えゝ・・・。」

「『俺以外の大事な人限定にしなさい』

それに、あの艦を良く知ってるのは俺だ、

装備の運用はノーザンプトンだが、操艦は俺がする。」

「えゝ??エージ、運転できるぴよん？」

「もちろん。」

二人「不安。」

「よし、お前らも連れてく、これ、決定ね。」

▽

『強襲揚陸重砲撃巡洋艦』

・ 35. 6cm55口径三連装5基（15門）

艦首3、艦中央部（艦尾向き）2

・ 61cm4連装酸素魚雷4基

両舷に2基ずつ

（ホントは誘導魚雷にしたかった）

・ 12. 7cm連装65口径連装高角砲8基（16門）

・ 20mm多砲身機関砲（5門）10基（50門）

いわゆるCIWSのレドーム無し

(この世界だと誘導兵器は軒並みダメだから・・・)

・対空炸裂噴進弾垂直発射基(4基)×3基

(VLSモドキ、同時12発斉射可能)

第二主砲と第三主砲の間に収まっている

・対艦近距離用ロケット弾発射基

(36口)×6基

射角で、500m〜3500m範囲で攻撃可能

(ホントは対艦VLS)

・対潜水艦爆雷ロケット砲発射基

最大10km270度範囲発射可能

(25口)×4基

最大攻撃深度250m

接触炸裂・連動爆破切り替え可能

・艦尾『強襲揚陸艇』格納庫3隻

戦車6・陣地砲6・トラック6・海兵隊300人の

どれかを選択可能

今回は、

海兵隊100人、トラック2台、戦車2台

1艇に100人か、各2台

・最大速度40・8ノット

航続距離20ノット・一万海里

「あわわわ。」

「落ち着けて、ノーザンプトン、大丈夫だから。」

「オーバースペックデスう!!」

「ねえ、うーちゃん。」

「なあに? 龍田。」

「私達、とんでもない人に仕えてるのね。」

「うん、改めて手綱をちゃんと握らないと

マジで危ないぴょん。」

誰でも良い、ヤツらを止めろ

单冠湾泊地

執務室

「くっ、やられた。」

「コッチにもいない、

エージの奴、ドコに行ったんだ？」

「なんやなんや？五月蠅いわ、

って、山雲にタシユケント？

どう言う組み合わせや？エージはおらんの？

もう夜勤の引継ぎっちゃうのに。」

「龍驤、

エージの馬鹿、出撃したみたいなの。」

「あく・・・やらかしおったか。」

「なにをシツテルの？」

「知ってるもなにも、

強襲揚陸重砲撃巡洋艦ってヤツを

引っ張り出して『カチコミ』行ったんやろ？」

「龍驤、追いつける？」

「山雲、アレはアカンねん。」

「あ？アカん？」

「あく、危ないっちゆう意味や、

それにわかつとるやろ？」

「・・・鋼鉄の咆哮。」

「せや、

それに今回は重巡洋艦として、

ノーザンプトンが出とる、

あの子、オドオドしちよるわりには、

『決まる』とアカン、だーれも止められへん。」

「何ノット？」

「全速40ノット越えや、うちらじや到底追いつけん。」

「今、単冠湾泊地を空ける訳には行かない、

エージのヤツ、帰って来たらただじゃ置かないから。」

「40ノット・・・無理ダ、追いつけナイ。」

「まあ、しゃあない、

ベ〜イ！カモ〜ンマイド〜タ〜！」

吹き飛ばされる扉は、万国共通

「マミー!!呼ばれてぶっ飛んでキタヨ!!」

二人「あれ？ベイって、こんな子だっけ。」

「ベ〜イ、

『例の艦載機』出来るよな〜?」

「はい! 『第七艦隊から』パク・・・借りて来ました!!」

二人「え、いま、パクツて来たって・・・。」

「かまへんかまへん、

死ぬまで借りるだけや、

んじやいつちよ飛ばしたれ!!」

「イエエ〜イ!!」

『アドバンスド・スーパーホーネット』発艦!!」

二人「それ、絶対ダメなヤツ〜っ!!」

▽

「さて、そろそろ島が見えて来るな。」

「あのさ?」

「なんだ? 卯月?」

「なんで、う〜ちやんと、龍田も一緒に連れて来られたぴよん?」

「え?」

二人「え?」

「いや、手伝ってくれるんじゃないの?」

二人「なにを?」

「救助作業。」

二人「誰の?」

「さっき言った『深海棲艦の救助』」

二人「いまから?」

「いまから。」

「ダメだコイツ、なんとかしないとぴよん。」

「ぴよん・・・そうね。」

「・・・龍田、おま、ぴよんがうつり過ぎ。」

（その顔でぴよんはギャップがヤバ過ぎるだろ）

「・・・いた、

エージ、海上に艦艇複数、

一方的に砲撃を受けてる一団を確認、砲撃側を撃ちますか？」

「（おお、龍驤が言ってた『決まる』ってこの事か）

中間地点に散布界広めで牽制射、

警告後、撃つて来る奴らは全て敵とみなせ。」

「イエス、アドミラル。」

二人「え？だれこの子。」

▽

「くっ、弾薬さえあれば。」

『飛龍さん』私達を置いてって下さい！」

「ダメよ!!今度こそ守って見せる!!」

『たとえば、一艦でも叩いて見せる!!』

最後の魚雷を抱えた九七艦攻6機を

海面スレスレに飛ばす

「いけええっ!!」

▽

「チ、シブトイ、対空防御、タカガ6機、狙ウマデモナイ。」

▽

「・・・ごめん、『白雪』『深雪』墜とされた。」

『飛龍さん』白雪、飛龍さんを護ろう。」

「言われなくても。」

振るえる手で主砲を構える

「二人共、単冠湾泊地は解るでしょ？」

そつちに逃げて!!お願いだから!!」

「でも、飛龍さん。」

「私達に燃料は残されていません。」

「え……だって、この間は『満タン』だって。」

「あはは。」

「アレ、嘘です。」

「そんな。」

「それでもしないと飛龍さん、

無理して燃料溜まりを往復しますよね?」

「当たり前でしょ!!皆の為に持って帰るのは!!」

「皆で決めたんです。」

「私、『白雪』以下、

『隴』『曙』『漣』『初春』

『子曰』『若葉』『初霜』は、

飛龍さんを単冠湾泊地へ送り届けると。」

「なに勝手に決めてるのよ!!」

「隴!!曙!!漣!!飛龍さんを捕まえて引きずって!!」

「初春、子曰、若葉、初霜!!」

根性見せなよ!!この深雪様より先に沈むのも許さないからね!!」

▽

「空母ヲ護ルカ、妥当ダナ。」

「夕級flagship、妙ナ反応ガ接近中デス。」

「ナニ?艦娘カ?」

「艦娘ナノハ間違イナイノデスガ、

一ヶ所ニ複数固マツテイルノデス。」

「護衛艦ノ生き残りカモシレン、

又級flagship、

ソノ艦娘達ニ攻撃「ギャアアツ!」

その断末魔は

又級の命が潰える最後の一声だった

▽

「あ、あてちゃった。」

「おい。」

「どつちに当たったぴょん？」

「見えないわね。」

「ノーザンプトン、状況確認。」

「あ、はい、恐らく『ヌ級flagship』を轟沈、

あ、向こう側はぽかんとってしてますね、

手前の艦艇は、あ、動き出しました、

交戦の意志アリです。」

「うし、主砲、下げ10、

対艦近距離用ロケット弾発射基最大射程で

撃ちまくれるように全速前進!!」

「イエス！アドミラル!!」

二人「救助は？」

「あとあと。」

「そうです、サーチアンドデストロイです!!」

二人「二人して、ダメだコイツ等、早く何とかしないと。」

嫁とエージと・・・

「冗談ジャナイ!!」

私達はあのはぐれ者達を始末するだけだった
なのに、何なのだ？

奇妙な重巡洋艦が一隻

それだけで『狩られる側』になってしまった

「全艦、散会セヨ!!急ギコノ海域カラ離脱スル!!」

「シカシflagship!!」

ソレデハ命令ヲ果タセマセン!!」

既に航空戦力の要、又級flagshipがやられ

同級のもう一隻も大破、対空防御に問題が出ている

「構ワン、ココデflagship級を失イ過ギルノハ愚策ダ、

flagship級ノ資材ガドレダケ費ヤサレルカ分カツテイル

ダロウ！」

甲板損傷なれど、又級flagshipは航行出来る

なら離脱させ、修復後、改めて作戦を実行すればいい

「シカシ、今回ノ作戦ハ

『はぐれ達』カラ『資材』を回収スル事、

我ガ北方海域ニ余剩ノ資材ナンテ」ぐしや

ああ、なんで私に当たらなかつたのだろう

見渡せば沈みゆく僚艦達

どうして？私を最後に？

どうして？どうして？どうして？

ああ、違った

砲撃の音から少なくとも『戦艦クラスの砲撃』と認識していたが

「コンナ馬鹿ゲタ重巡洋艦ガアルノカ。」

それが私が残せた言葉だった

▽

「最後のflagship級、轟沈を確認、

状況終了です、アドミラルエージ。」

「ふう、良かったよ、

『ちゃんと砲撃が通って』ほんとに良かった。」

「ちよつと待つびよん？」

もしかして確証がないまま砲撃を始めびよん？」

「半分な、

舞鶴の『陽炎、時津風』の一件だけだからな、

他には配備していないし、データも無い、

まあ、資材にはマジでキツイつてのが良くわかったよ、

このまま巡行前進、接舷作業準備、

帰りは巡行以上は禁止。」

「イエス、アドミラル、接舷作業準備します。」

「ねえ、エージ。」

「なんだ？龍田？」

「貴方、ホントは怖い？」

「そ、安心したわ。」

そう言つて艦長席の後ろから抱き着かれた

「・・・ありがとう、龍田。」

「ふふ、御障りは厳禁ですよ？」

「うちちゃんも、いいですか？」

有無を言わさず、膝に座つて来る

「・・・ありがとう、卯月。」

▽

単冠湾泊地

会議室

「飛龍です。」

姿は深海棲艦のヲ級のままだが、はつきり喋る

「よろしく、飛龍。」

「白雪です、この様な姿ですいません。」

容姿は確かに『白雪』なのだが、

真っ白な肌色で、明らかに艦娘では無かった

「まあ、いいよ、

白雪、皆の紹介を頼めるかい？」

俺から直接だと、嫌な子もいるだろうから。」

白雪から発言してくれた、

つまり他の『艦娘・深海棲艦』からは警戒されていない、たぶん

「はい、わかりました、

左から、隴、漣、初春、子曰、若葉、初霜、

現在治療中の『伊203』これが生存者です。」

▽

執務室

「よりにもよって『伊203』か。」

「どう言う事？」

「・・・実戦経験ゼロ。」

「え？」

「しかも『水中は』速いけど、『水上は』遅い。」

「ハ？」

山積みな書類を片付けながら話す

勿論、先の重巡洋艦の消費資材がマジでヤバイので、

各鎮守府・泊地・基地へ資材の融通して貰う為の物だ

ああ、ノーザンプトンはオーバーヒートで、

そこのソファアで寝ている

さつきまで頑張って計算してた

「まあ、水中速力に設計の重点を置いた潜水艦でな、

雷撃能力はあったが、

他の伊号潜水艦よりは少なくてな、

攻撃型と言うよりは、『試作型』の意味合いが強い。」

「そう、それじゃあ、『オリヨクル』は出来ないのね？」

俗に言う『オリヨール海クルージング』

それは練度の低めな潜水艦達を延々と

遠征（と言う名の出撃）に行かせ資材を確保する方法だが、

『全鎮守府・泊地・基地』の『伊号潜水艦達』が、

労働組合を設立、就労改善が認められ、実施されなければ二度と遠征に出ないと、事を起こしたのだ
当時の提督達は『新たな潜水艦に任せる』と言い、ソレを無視した

そこから悲劇が始まった

『潜水艦が建造されない・保護（ドロップ）も無い』

伊号潜水艦の労働組合は、既に知れ渡っていたので他の『駆逐艦娘』が同調、

それに続き、『軽巡洋艦娘』も労働組合に参加し、作戦遂行どころじゃ無くなってしまったのだ

まあ、艦娘が現れた初期の頃の

『オリヨクルに行きたくないでち』事件は

ある提督さんが单身全ての鎮守府・泊地・基地に頭を下げ、改善に努めた結果

労働組合は残るが、遠征の再会が少しずつ聞かれ始め、

3年に及ぶ抗争は鎮静化したのが、

一部では未だに続いている所もある

「家でオリヨクルの悲劇はやらんよ、

一部、ワーカーホリックになった伊号潜水艦が居るらしいが、その提督は、伊号潜水艦に頭が上がらんそうだ。」

「うわあ。」

「ン？ワーカーホリック？」

「仕事中毒だよ、

仕事してないと落ち着けなくなっちゃった人の事。」

「ア、把握。」

「さて、タシユケント、

今日はどうする？」

そろそろ夜が深くなる、つまり今日の業務は終了となる

「ん、マダ、いい。」

「そか。」

実は、先の戦闘で撃沈した深海棲艦と、

追跡していた深海棲艦艦隊は別物で、その調査で、タシユケントを旗艦に調査して貰っていたのだが、その際、

『艦装をはぎ取られた深海棲艦艦隊』を発見

『魚雷による撃沈』を行っていた

その時に何か言われたら嬉しいのだが、タシユケントが頑なに言わない為、言い出してくれるのを待っている。

「あの子達ノ無念を晴ラスまではネ。」

二人（聞こえてるからね？）

まあ、聞こえて無い様に振舞う

「さ、今日は終いだ、

夕食も作らなきゃな。」

「そうね、今日は『お昼のカレー』のアレンジよ?」

「お、楽しみだ、山雲先に戻るか?」

「そうね、

今『娘達』に連絡したから、準備して待ってるわね?」

「りよ〜かい。」

▽

「じゃあ?」

「おう。」

全員「頂きます!」

「お、中タイケる! 美味しい!」

「ふん、当然よ。」

「マックスマミーったら、ほっぺたにご飯粒ついてるよ?」

「お、ホントだ。」ひよいパク

「なっ／＼／」

「あはは! マックス顔真つ赤ww」

「貴方?」

「なんだ? 山雲・・・。」ひよいパク

「やん／＼／」

卯月達が呆れているがまあ、置いていて

「卯月、どうする？指輪？」

あ、むせた

「ゴハン時に聞く物じゃないぴよん!!」

「いや、サイズ測らないと造れないだろ？」

「だからって、今聞かないで欲しいぴよん、

それに、まだ練度も足りないぴよん。」

「それもそうだな。」

▽

練度

艦これでは『Lv』で表記されていたが、

艦これが現実になった今では、

『艦娘個人の概念』でしかわからない

山雲は174Lvで、意外とカンストしていない

ってか175Lvの道のりがまだまだ遠い

マックスは110Lvで、

ケツコンしてからもちよくちよく出撃している

リベツチオは89Lvで、単冠湾泊地内の演習の成果である

酒匂は37Lv、演習だけで、未出撃

卯月は56Lvで、先の重巡洋艦に便乗してたため

長月は28Lv、演習のみ

菊月は29Lvなのだが、

湾内演習だけで、湾外演習に出ていない

まだ、湾外が怖いそうだ

悪魔で『艦娘の個人概念』なので、

ホントのLvは解らない・・・